

鳥 坂 寺

——寺域の調査——

1983年度・1984年度

1986年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市内には、多数の遺跡が存在していますが、とりわけ古墳と古代寺院には注目すべきものがあります。柏原市内の古墳の数は、1500基とも2000基とも言われその実態が定かではありません。寺院も15~16ヶ寺あり、飛鳥時代~奈良時代のもので、狭い地域にこれほど多く所在することは、大和を除くと他に例を見ません。特に『続日本紀』で知られる河内六寺は、孝謙天皇・聖武天皇の行幸や参拝がおこなわれ、平城宮遷都後は、竜田道沿いに位置するため、河内国の国府と共に最も栄えた地域であります。

鳥坂寺は、大阪府教育委員会の調査以来、ブドウ園・神社地として現在に到っていますが、国指定史跡となっていないため今回の開発に直面することとなりました。今回の発掘調査結果から、「鳥坂寺」と墨書きされた土器の出土により当地が鳥坂寺の寺域内にあたり、検出した遺構が、僧房・食堂あるいは、造寺に関連する諸施設等ではないかと考えられます。このように鳥坂寺が河内六寺の中でも、最も遺構の存在状況が良いことは明らかであり、一日も早く、寺域全域が国指定史跡となることを切望します。

昨今の柏原市域における開発は、文化財の破壊のみにとどまらず、自然破壊も著しいものです。文化財を保護し、自然を保護してこそ、真に快適な生活が営めるのであって、文化財や自然の保護を含んだ開発を考え、現代の文化の創造をはかるのが、本来の姿です。一度破壊された文化財や自然は二度と戻ってはきません。これを守ってゆくのは、柏原市民の権利でもあり、義務でもあるのです。今後とも、文化財に対して良き理解者になっていただけることを切に望みます。

昭和61年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が柏原市高井田土地区画整理組合（理事長 谷口俊春）の依頼によって、柏原市高井田272番地他22筆及び278番地での土地区画整理に伴う道路工事及び汚水処理場建設に先立って実施した鳥坂寺跡の緊急事前発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は1次調査として柏原市教育委員会社会教育課 花田勝広が担当し、1983年5月23日～8月30日、1984年2月29日～3月31日までおこなった。引き続き2次調査として1984年4月2日～8月13日まで同市同課 田中久雄を担当としておこなった。
3. 本書の執筆は、各調査の担当者がおこなった。
4. 本書掲載の遺構の実測は、各調査の担当者及び補助員が、遺物の実測及び遺構・遺物のトレースは花田・田中・仲井光代がおこなった。
5. 本書で使用した方位は、磁北である。水準高はT.P.をもとにしている。
6. 従来、高井田廃寺として報告されてきた寺は、今回の発掘調査の結果、鳥坂寺であることが判明したため、従来より学史的に用いられてきた呼称を改称する。
7. 発掘調査の際には、元国立奈良文化財研究所所長 坪井清足氏、元四天王寺国際佛教大学教授 藤沢一夫氏、奈良大学教授 水野正好氏、帝塚山女子短期大学教授 山本昭氏他、多数の方々に指導・助言を賜った。また、木炭窯については、タカラ研究会々員 大澤正己氏の御教授を受けた。瓦類については、元国立奈良文化財研究所研究補佐員 濑本正志氏、東大阪市文化財協会調査員 中西克宏氏の協力を得た。調査地全体の航空測量は、アジア航測株式会社に依頼した。
8. 発掘調査及び遺物整理に携わった人々は、以下の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野一幸	安村俊史	広岡 勉	大塚淳子
山内 都	谷口京子	秋田大介	石田成年	伊藤泰臣	伊藤芳匡	井宮好彦
江浦 洋	清瀧健二	後壇洋文	佐藤 尚	辻元登志夫	福本一高	藤沼敏則
丸本周生	山下祐司	山中 茂	山本浩幸	竹下彰子	藤岡弘子	松村富子
椋本幸枝	森下尚美	麻栄三郎	朝田行雄	井上岩次郎	奥野 清	川端長三郎
岸本重夫	高瀬 操	谷口鉄治	玉野正一	東野覺次	西園武重	分才春信
道篠甚蔵	森口喜信	山田貞一	山本芳一	飯村邦子	坂本道子	竹下真紀
乃一敏恵	松成早苗	村口ゆき子	吉居豊子	横関勢津子		
東海アーネス株式会社	村本建設株式会社			(以上、順不同・敬称略)		

目 次

はしがき	
例 言	
第Ⅰ章 発掘調査に到る経過.....	I
第Ⅱ章 位置と環境	
1. 歴史的環境.....	2
2. 鳥坂寺の沿革.....	4
第Ⅲ章 発掘調査概要	
1. 発掘調査の方法.....	5
2. 発掘調査日誌抄.....	6
第Ⅳ章 発掘調査の成果	
1. 遺構.....	8
2. 遺物.....	28
第Ⅴ章 発掘調査のまとめ	
1. 調査地及び周辺の考古学的成果.....	96
2. 発掘調査のまとめ.....	98
図-1 柏原市内古代寺院推定地.....	3
図-2 地区設定図.....	5
図-3 遺構配置図.....	9・10
図-4 掘立柱建物-1.....	11
図-5 掘立柱建物-2.....	12
図-6 掘立柱建物-3・4.....	13
図-7 掘立柱建物-5・6・7.....	14
図-8 掘立柱建物-8・9・10.....	15
図-9 掘立柱建物-11.....	16
図-10 井戸-1.....	16
図-11 井戸-2・3.....	17
図-12 掘立柱列・石列1.....	18
図-13 石列-2.....	19
図-14 土坑-1・2・3・4・5.....	20
図-15 溝-2.....	21
図-16 木炭窯-1.....	22
図-17 木炭窯-3.....	23
図-18 集石遺構、整地層.....	25・26
図-19 古 墳.....	27
図-20 掘立柱建物・溝-3出土土器.....	29
図-21 井戸-1出土土器①.....	31
図-22 井戸-1出土土器②.....	33
図-23 溝-1出土土器①.....	35
図-24 溝-1出土土器②.....	37
図-25 溝-1出土土器③.....	39
図-26 谷-1・遺物包含層-2土層断面図	40
図-27 土坑-1・2、木炭窯-1、	
谷-1出土遺物.....	41

図-28 谷-2、遺物包含層-1出土土器	43	図-49 平瓦④	75
図-29 遺物包含層-1・2出土土器①	45	図-50 平瓦⑤	76
図-30 遺物包含層-2出土土器②	46	図-51 平瓦⑥	77
図-31 遺物包含層-2出土土器③	47	図-52 平瓦⑦	78
図-32 遺物包含層-2出土土器④	49	図-53 平瓦⑧	79
図-33 遺物包含層-2出土土器⑤	51	図-54 平瓦⑨	81
図-34 遺物包含層-2出土土器⑥	53	図-55 平瓦⑩	82
図-35 遺物包含層-1・2出土土器	55	図-56 丸瓦	83
図-36 谷-2下層出土土器	57	図-57 塚	84
図-37 谷-2'上層・集石遺構出土遺物	58	図-58 塚輪①	85
図-38 E地区炭層内出土遺物	59	図-59 塚輪②	86
図-39 E地区整地層内出土土器-①	61	図-60 塚輪③	87
図-40 E地区整地層内出土土器-②	62	図-61 金属・石製品	88
図-41 墨書き土器①	64	図-62 鍛冶関係遺物	89
図-42 墨書き土器②	65	図-63 木製品①	91
図-43 軒丸瓦	68	図-64 木製品②	93
図-44 軒丸瓦・軒平瓦	69	図-65 古墳出土遺物	94
図-45 平瓦叩き板原体模式図	70	図-66 移動式窯	95
図-46 平瓦①	71	図-67 鳥坂寺位置図	97
図-47 平瓦②	72	図-68 遺構変遷図	99
図-48 平瓦③	73	図-69 陶硯	99

図版-1 鳥坂寺全景		図版-11 井戸-1・2		図版-21 遺物①
図版-2 第1次調査区全景		図版-12 井戸-3・溝-1		図版-22 遺物②
図版-3 第2次調査区全景		図版-13 溝-2・遺物包含層-2	図版-23 遺物③	
図版-4 掘立柱建物-1・2		図版-14 石列-2		図版-24 遺物④
図版-5 掘立柱建物-2・3		図版-15 木炭窯-1・2		図版-25 遺物⑤
図版-6 掘立柱建物-4・5		図版-16 木炭窯-3		図版-26 遺物⑥
図版-7 掘立柱建物-6・柵列-4		図版-17 集石遺構・E区整地層		図版-27 遺物⑦
図版-8 掘立柱建物-8		図版-18 古墳		図版-28 遺物⑧
図版-9 掘立柱建物-9・10・11		図版-19 各遺構①		図版-29 遺物⑨
図版-10 W区上段平坦面・井戸-1		図版-20 各遺構②		図版-30 遺物⑩

第Ⅰ章 発掘調査に到る経過

柏原市は、その全面積の80%が周知の遺跡であり、全国でも有数の遺跡が集中する地域となっている。しかし、昭和30年代後半以来、人口の過密化による都市周辺の開発に伴い、玉手山丘陵等がその対象となり造成によって貴重な文化財が次々と消滅していった。今回の調査地が存在する高井田の地でも、昭和40年代より、村本建設株式会社により開発が計画された。その際、大阪文化財センターによる、埋蔵文化財分布調査及び試掘調査がおこなわれ、高井田横穴群が200基以上に達する横穴で構成されていること、新たに横穴式石室が11基検出されたこと、鳥坂寺周辺にも多数の遺物が散布すること等が明らかにされ、この地の重要性が指摘された。^{註1)}その後、この開発計画は、柏原市土地地区画整理組合に受け継がれ、昭和57年には、開発に先立ち、柏原市教育委員会により、前回の分布調査で不明であった鳥坂寺周辺の試掘調査をおこなった。この結果、当地域には、古墳～中世に到る多数の遺物が存在することを再確認するとともに、新たに古墳や建物跡等の遺構を検出した。これらの分布調査及び試掘調査の結果から、当該地での開発工事には、埋蔵文化財に対する慎重な取組み方が必要であることが示された。^{註2)}

このような経過の下、昭和58年4月23日付で柏原市高井田地区画整理事業組合設立準備委員会（代表 谷口俊春）より柏原市大字高井田 272番地他22筆での区画整理事業に伴う土木工事による埋蔵文化財発掘届出書が提出され、当市教育委員会が依頼を受け、着手した。（以下これを第1次調査とする）この調査に引き続き、昭和59年2月9日付で同会より柏原市大字高井田 278番地での汚水処理場建設に伴う土木工事による埋蔵文化財発掘届出書が提出され、同様、当市教育委員会が依頼を受け、着手した。（以下、これを第2次調査とする）尚、第1次調査で検出された遺構は、協議の結果、計画道路の設計変更により保存されることになった。このことは、今後の開発と文化財保存の共存に大きな布石となるものである。

註1) 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在村本建設株式会社開発計画地内埋蔵文化財分布調査概要報告書』 1973年

同上『大阪府柏原市高井田所在遺跡・試掘調査報告書』 1974年

註2) 柏原市教育委員会『高井田横穴古墳群試掘調査概要報告書』 1983年

第Ⅱ章 位置と環境

1. 歴史的環境

柏原市東方の東山丘陵は、生駒山地南端部に位置し、高尾山（標高 277 m）を最高峰とする南北に走る山地である。古代の大和川は、石川との合流点より北上し、現在の柏原市上市・清洲・河原町内を流れている。この東山丘陵と旧大和川に狭まれた南北 3 km、東西 500 m の地域内に旧石器時代～各時代の集落址 7ヶ所、寺院 6ヶ所が所在する。この生駒山地西南麓と云う地域内の河内六寺について、簡単に記述する。

河内六寺とは、『続日本紀』孝謙天皇天平勝宝八年の条にみられる「智識・山下・大里・三宅・家原・鳥坂」の寺院である。この内、墨書き土器の発見によって寺名の明らかになったものに大里寺と今回発掘調査をおこなった鳥坂寺があり、山本昭氏の『柏原市史』第2巻での比定が確実となった。河内六寺は、「和名抄」によると河内国大槻郡大里郷に三宅寺・大里寺・山下寺、鳥坂郷に智識寺・家原寺・鳥坂寺が所在する。大里郷の中心に所在する大里寺は、堂塔は未だ検出されていないが、礎石・軒瓦が周辺より出土している。昭和58年度の下水道埋設に伴う調査によって、主要伽藍の北側で井戸跡が発見され、その内から「大里寺」と墨書きされた土器が出土した。山下寺は、昭和57年度の調査によって、多量の軒瓦・土器が出土し、造寺に伴う整地層が検出された。さらに、鍛冶炉壁・軒羽口に伴って、鉄滓・銅滓が確認され、造寺に伴う鍛冶関連遺構の存在が予想される。寺院は、7世紀中葉に建立されたことが明らかとなった。^{出1} 智識寺は、昭和55年度に大阪府教育委員会によって東塔跡が発掘され石神社に所在する塔心礎が東塔のものであることが判明した。さらに、江戸時代の絵図に西塔が描かれており、双塔の寺院であったことが窺える。金堂は現在、山本義一宅内に位置するものと考えられ、文献で知られる塑像の盧遮那仏が埋没していると考えられる。家原寺は、鳥坂郷家原里に所在する寺院で、かつて塔心礎が出土しており、地籍団や家屋の下に露出する礎石から法起寺式の伽藍配置と推定されているが、昭和59年度の発掘調査により塔心礎が出土した周辺は近世に池が造られておりその石垣に礎石が使用されていることが判明した。しかしながら 7世紀前半の瓦や凝灰岩の切石等も出土していることから当地に寺院に關係する遺構が存在していたことは明らかである。以上のように、寺院の主要伽藍が推定される地区がある程度限定される。しかし、寺院が現集落と重複しており、その範囲確認は困難である。鳥坂寺は、唯一現集落と重複しておらず、今回の開発の対象地に包括される結果となった。これらの寺院は、三宅寺・大里寺・山下寺・智識寺・家原寺が7世紀中葉に建立が開始され、統いて鳥坂寺が後葉に建立される。特に前者が弥生時代から踏襲された扇状地上の集落内に出現するのに対し、後者は丘陵上に立地する等、他の寺院との間に違いが見られることは重要である。^{出2}

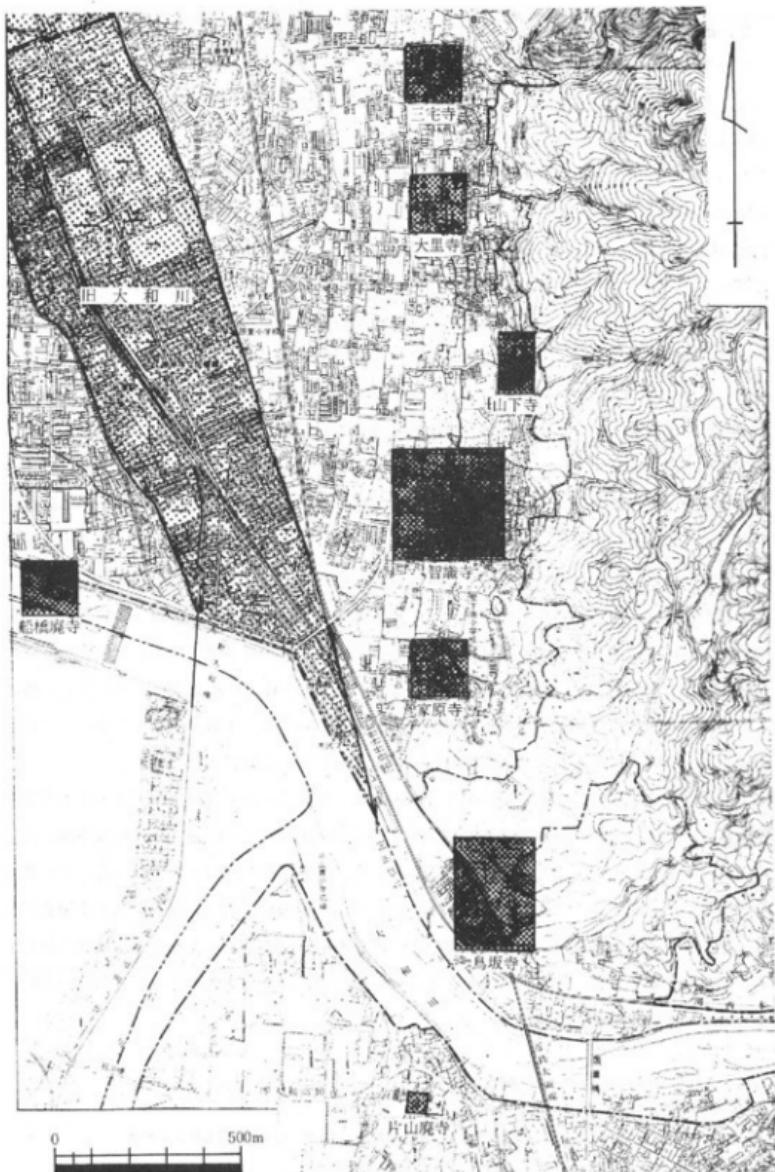


図-1 柏原市古代寺院推定地

2. 鳥坂寺の沿革

鳥坂寺は、河内国大県郡に所在した河内六寺（三宅・大里・山下・智誠・家原・鳥坂）の一つで、奈良時代中頃に孝謙天皇が巡拝されたことが、『続日本紀』天平勝宝八年の条に記されている。

かつて、塔跡と金堂・講堂の間に近畿日本鉄道が通り遺跡を2分することになり、その際、多量の屋瓦が出土した。1929年には、鶴尾が出土し、それを池田久吉氏が『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第1骨に「鳥坂寺址発掘鶴尾」として報告して以来、この遺跡はひろく学界の知るところとなった。1961年に天湯川田神社の丘一帯が住宅開発予定地になり、この丘陵が削平されることとなり、山本昭氏によって発掘調査が実施された。その結果、この丘陵上に奈良時代前期の屋瓦を伴う塔跡が検出され、地下式の塔心礎を持つ1辺8.66mの方形の基壇の実態が明らかとなった。1962年には、前年度の発掘調査の成果と付近の開発の進行状況から、大阪府教育委員会によって2次調査が実施された。その結果、字名「クロウ」、「堂の前」地区より、金堂・講堂が検出された。金堂は、基壇に安山岩または花崗岩の玉石を布敷し、その上に凝灰岩切石の地覆石・羽目石・束石・葛石を積んだ壇正積基壇で、南辺と北辺の中央に凝灰岩で積んだ階段が遺存していた。基壇は、東西約18m、南北約15mの長方形で、その上に礎石の抜き取り穴が検出された。講堂は、基壇が南北約20.3m、東西32.3mの長方形で、その上に礎石が29個体分遺存していた。また、中央部に仏壇跡も認められた。遺物は、屋瓦の他に金銅仏断片・仏手・塔身・金銅製金具・鉄釘・漆器・施釉陶器等が多量に出土している。寺院の伽藍配置は、地形に著しく制約されており、金堂・講堂跡が南北に配置されるのに対し、塔はその西南の尾根上に位置する。回廊や中門等の配置については、実態が明らかでない。これらの成果は、大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』として報告されている。

この寺院については、従来各説があり、河内行宮・普光寺・高井寺・高井田寺・井上寺等の見解が江戸時代以来いろいろの寺名が挙られているが、地名に「戸坂」があり鳥坂寺跡に比定する意見が最も有力であった。その小字「戸坂」は、主要伽藍北西の戸坂古墳一帯、その北側の尾根上に1カ所あり、広範囲に及ぶ。さらに、小字「普光寺」・「矢倉」が、主要伽藍の北東（標高70~90m）にあり『正倉院文書』・『続日本後紀』に見え、普光寺が当地域に存在することが明らかである。また鳥坂寺と普光寺については、同一寺院と考える説と別々の寺院と考える説があり、未だ決定し難い。

註1) 柏原市教育委員会『大県・大県道路』1985年

註2) 柏原市教育委員会『大県南遺跡』1985年

註3) 安村後史「安堂遺跡」『柏原市埋蔵文化財発掘調査報告』1984年度 柏原市教育委員会 1985年

第Ⅲ章 発掘調査概要

1. 発掘調査の方法

当該地は、昭和57年度の試掘調査により遺構・遺物の存在が確かめられており、基本的層位も耕土・床土の下に包含層・遺構面となることから、包含層上面までを重機により掘削し、それ以下を人力により慎重に掘削し、遺構の検出に努めた。遺物の取りあげには調査区全域に地区割をおこなった。地区的設定は、開発計画道路のセンター軸の方向（N=40°E）に方眼をかけ、10×10mを最少単位としたグリッドを設定し遺物を取りあげた。方眼の起点は、任意に金堂部分に仮定し東西を西から東へA～N、南北を南から北へ1～12というように区分した。例えば、Eラインと10ラインの交点「10E区」は南西隅の名称としている。このため、磁北又は真北の地区割を用いていないので、若干遺物の取り上げに支障をきたしているが、基本的には層位ごと、遺構ごとに取りあげるよう努力した。また地形から、便宜上、2次調査区で検出した集石溝より西側をW区、東側をE区とし、それぞれの遺構面を上段・中段・下段というように呼びわける。

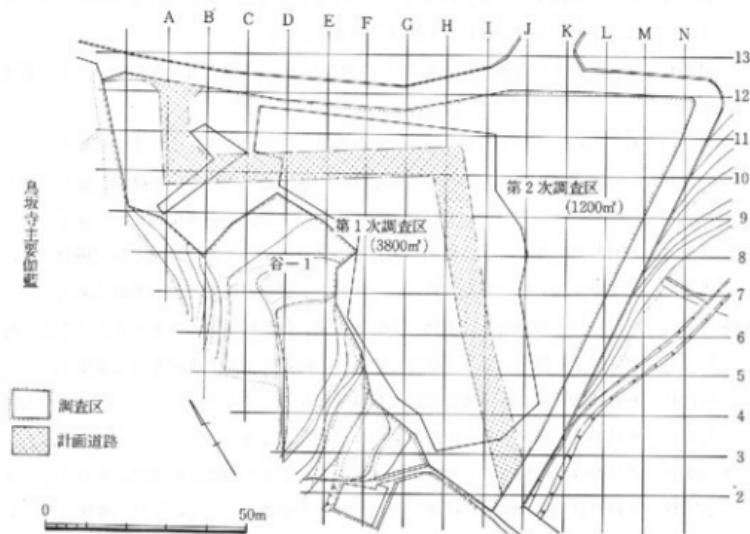


図-2 地区設定図

2. 発掘調査日誌抄

第1次発掘調査は、1983年5月23日から8月31日までおこない、1984年2月29日から3月31日にかけて写真測量及び保存区域の埋め戻しをおこなった。これに引き続き1984年4月2日から8月13日にかけて第2次発掘調査をおこなった。これらの結果、古墳時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出された。中でも「鳥坂寺」と墨書きされた土器の検出は、当調査地が、鳥坂寺と深い関係にあったことを示すものとして非常に重要である。1983年7月23日には現地説明会を実施し約300人の住民・研究者の参加があった。また、国立奈良文化財研究所主催の研修の見学会の際に、約60人ほどの都道府県の文化財担当者の見学があった。

◎第1次発掘調査（1983年5月23日～8月31日・1984年2月29日～3月31日）

1983年

5月23日～5月31日 調査区全域の草刈りと地区設定をおこなった。その際、表土層内に多量の瓦の散布が認められた。

6月1日～7月16日 重機による盛土・耕土・床土の除去をおこなった。その量は、約5000m³である。その間に補助員・作業員によって遺物包含層の除去・土層断面の実測。

7月18日～7月22日 W区上段の遺構の検出と井戸1・3、土坑1・2、溝1の掘り下げをおこなった。その結果、「寺」の墨書き土器の発見があり、寺域である事が判明した。井戸1内からは、土師器の杯・碗15～20個体分の完形品が出土した。

7月23日 午後2時より現地説明会を実施。高井田の住民・研究者を含む約300人の参集があった。

7月25日 井戸1内出土の土器を洗浄中に「鳥坂寺」と墨書きされた土器を発見した。

7月26日～7月31日 W区下段平坦面の遺構検出。掘立柱建物1～6を検出し掘り下げた。木炭窯の掘り下げ中に、ワラ灰層を検出。W区上段平坦面の実測作業をおこなう。

8月1日～8月6日 開折谷2の掘削。包含層内より多量の土器・瓦・木器・輪羽口・鉄宰等がコンテナ100箱分出土した。特に「三昧」・「寺」の墨書き土器が多量に出土した。

8月7日～8月10日 開折谷2の遺物包含層除去後、掘立柱建物2・4・5とコ字状に配される溝3と井戸2を検出し掘り下げた。建物2の柱穴内より7世紀末の土器出土。

8月11日～8月13日 調査区全域の清掃と写真撮影をおこなう。

8月19日～8月25日 E区下段平坦面の実測作業をおこなう。

8月26日～8月28日 開折谷3にサブトレーンを入れ、その深度と範囲確認をおこなった。

8月29日～8月31日 保存区域の協議のため、調査を中止することになり、遺構にシートをかけ、調査区周囲に有刺鉄線をめぐらし、立入禁止の看板を立てる。出土遺物を安堂事務所へ運搬した。

1984年

2月29日～3月6日 航空測量のため、調査区全域の清掃をおこない。6日に無事、航空測量をおこなった。測量は、アジア航測株式会社に委託した。

3月7日～3月31日 下段平坦面の保存区域全体に約1.5mほど全域に盛り、区域の境に土のう袋を埋めてその範囲を明らかにしている。道路計画に伴う3800m²については、発掘調査を完了した。

◎第2次発掘調査（1984年4月2日～1984年8月13日）

4月2日～4月9日 調査地盛土除去作業。第1次調査で検出した、「鳥坂寺」の墨書き器が発見された井戸1の埋め戻し。

4月10日～4月26日 盛土を除去しながら旧水田を検出する。この水田は、昭和35年頃まで耕作されていたとのこと。水田面は、W区で3段、E区で6段検出した。

4月27日～5月12日 旧水田面にトレーンチを6本設定、人力にて掘り下げる。W区では、約1mに及ぶ砂質土と炭の互層を検出、第1次調査区で検出した谷-2の続きである。E区では約2mに及ぶ版築状の整地層を検出した。また、これらに伴い6世紀末から7世紀にかけての遺物が多量に出土。

5月14日～5月25日 E地区整地層検出作業。第6トレーンチにて集石溝検出。

5月26日～6月7日 E地区整地層除去作業。集石溝検出作業。W地区遺構検出作業。

6月9日～6月27日 集石溝検出作業及び実測・写真撮影。E地区下段遺構検出作業。広範囲にわたる焼土面及び、焼けた柱等を検出。

6月28日～7月3日 集石溝の石除去作業。

7月4日～7月17日 集石溝の石除去後、3本のトレーンチを設定し、掘り下げる。砂・粘土・炭の瓦層が認められた。遺物は6世紀末から7世紀初めのもので、歯骨等も出土した。W地区建物・石列等を検出、実測及び写真撮影。

7月18日～7月30日 E地区遺構検出作業。建物8・9・10、木炭窯2・3、土坑5等を検出。また遺構面全体には炭層が堆積している。遺物は7世紀代のものが中心であるが特に7世紀末のものが多く出土した。

7月31日～8月4日 E地区遺構の掘り下げ及び実測・写真撮影。建物の時期は出土遺物等から7世紀末と考えられる。平板実測。

8月6日～8月9日 W地区平板実測。

8月10日～8月13日 航空測量のため、調査区全域の清掃。13日に無事に航空測量をおこなった。測量は前回同様、アジア航測株式会社による。遺構保存のため、調査地全域にシートをかける。

第Ⅳ章 発掘調査の成果

第1次・2次発掘調査の結果、7世紀初頭までは、墓地として認識されていた当地に、7世紀中頃～末にかけて山の斜面を削り、谷を埋める等の大規模な土木工事が行なわれ、7世紀の末には、鳥坂寺に関連すると考えられる建物や、井戸、木炭窯等が築かれ、その後、盛衰はあるものの10世紀頃までは確実に当地が、鳥坂寺と強く結びついて存続していたことが判明した。以下、発掘調査の成果を、遺構・遺物ごとに記述していく。

1. 遺構（図-3）

発掘調査により検出した遺構は、掘立柱建物11棟、井戸3基、柵列4列、石列2列、土坑5基、溝4本、木炭窯3基、集石遺構、古墳1基である。これらの遺構以外に、大規模な土木工事によって作られた平坦面、整地層、及び遺物の廃棄によって埋められた埋没谷、包含層等も検出した。ここでは、先に、埋没谷及び包含層の説明をおこなった後、順次遺構の説明に移る。

①埋没谷・遺物包含層（図-26）

埋没谷-1は、鳥坂寺主要伽藍と1次調査区の境に位置する自然の谷で、現地表下3.5mまで掘削し、7～8世紀の遺物包含層を検出したが、谷底を検出するには到らなかった。層序は上層より床土・茶褐色土・緑灰色砂質土・緑灰色砂質粘土・青灰色砂質土で、緑灰色砂質土内より瓦器@・土師器@、青灰色砂質土から土師器・須恵器・製塙土器（@～@）・瓦類（@・@～@）等が多量に出土した。特に、鳥坂寺創建期は、現地表下3.5～4m前後が地表面となっていると考えられ、治水の杭列が検出された。

埋没谷-2は、1次調査区と2次調査区のほぼ中央を南北に入る谷で、掘立柱建物-1～5が建てられた平坦面（W区中段）がつくられた時にその一部が削られている。本文では、1次調査で検出したW区上段に遺存しているものを溝-1、W区中段のものを埋没谷-2、2次調査で検出したものを埋没谷-2' と分けているが、埋没時期はともに7世紀初頭から中頃にかけてであり、本来は一つながりのものであることがわかる。埋没谷-2' 内からは、土器類の他に獸骨等も多数出土している。土層断面からは、7世紀初頭頃まで自然堆積した後、7世紀後半までに人為的に埋められたものと考えられる。

遺物包含層は、調査区全域に広がる耕土・床土と、1次調査区W区中段に、掘立柱建物廃絶後に形成されたものに分け、前者を1、後者を2として紹介する。1からは、7世紀初から中・近世にかけての遺物が出土している。2からは、W区上段より流出したレンズ状に堆積する黒色土内より、土師器@～@、須恵器@～@、木器@～@、輪の羽口@～@、瓦@・@～@・@～@・@～@、綠釉@～@、製塙土器・硯@が、コンテナ100箱分出土した。遺物の時期は7世紀末から8世紀代のものである。

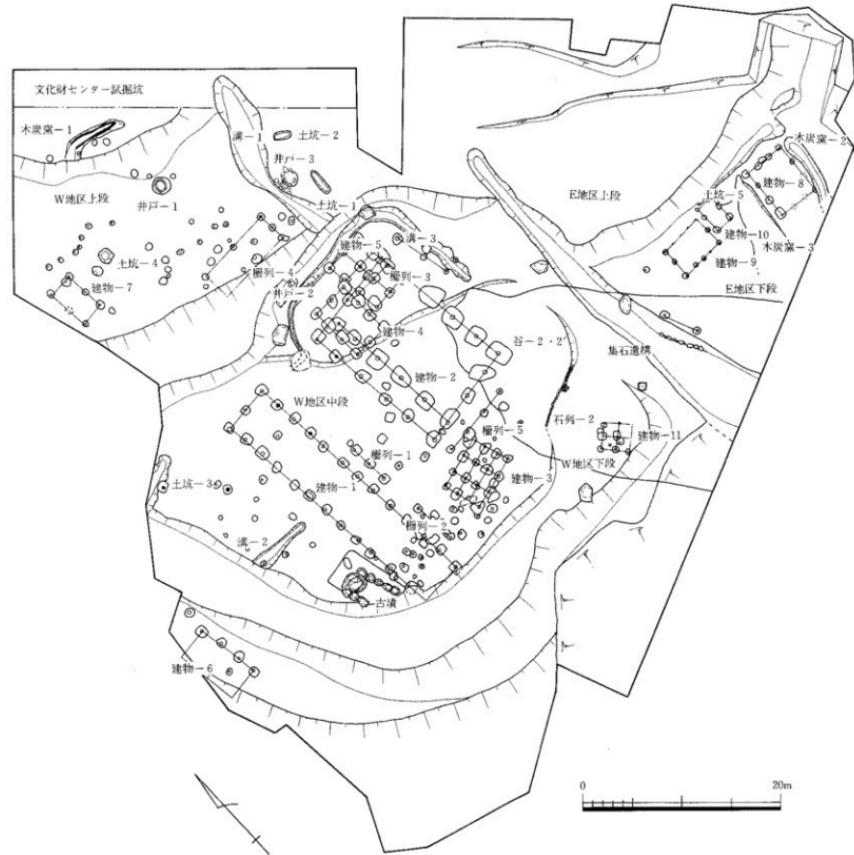


図-3 造構配置図

②掘立柱建物

◎掘立柱建物1 (図-4)

1次調査区W区中段の西半部中央に位置する桁行12間以上(26m)×梁行2間(4.7m)の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行2.1m(7尺)、梁行2.4m(8尺)である。建物の南北両側より2間に一辺60cmの隅丸方形を呈した柱穴が各1ヶ所あり、間仕切りと考えられる。このことから桁行はおそらく12間となる。柱穴の掘形は、一辺80~90cmの隅丸方形を呈し、直径20~30cmの柱痕跡を遺す。その内P-4は、柱穴内に縦50cm・横20cm・厚さ14cmの凝灰岩製の切石を根石として用いている。遺物はP-12より少量の土師器①・須恵器が出土した。柱穴内の土器から7世紀末以後に建てられたと考えられる。

◎掘立柱建物2 (図-5)

1次調査区中段の東半部中央に位置する桁行5間(15.2m)×梁行4間(10.4m)の南北棟建物である。西側に彫がつく。建物の造営に際して、コ字状に丘陵を掘削し、建物の北・東・西に溝-3をめぐらす。柱掘形は、身舎部分で一辺1.6~2mの隅丸方形・隅丸長方形を呈する大形のもので、直径30~40cmの柱痕跡が認められる。

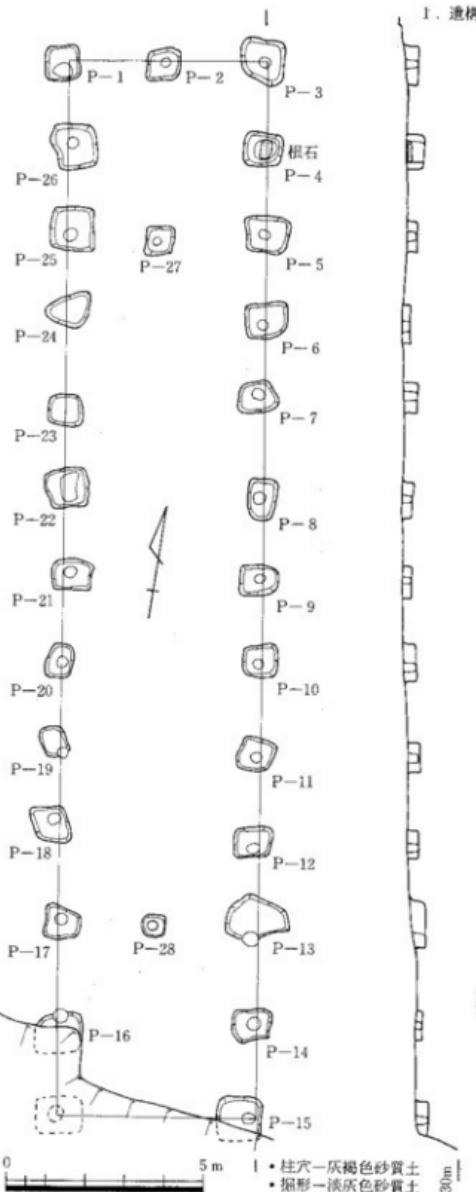


図-4 掘立柱建物-1

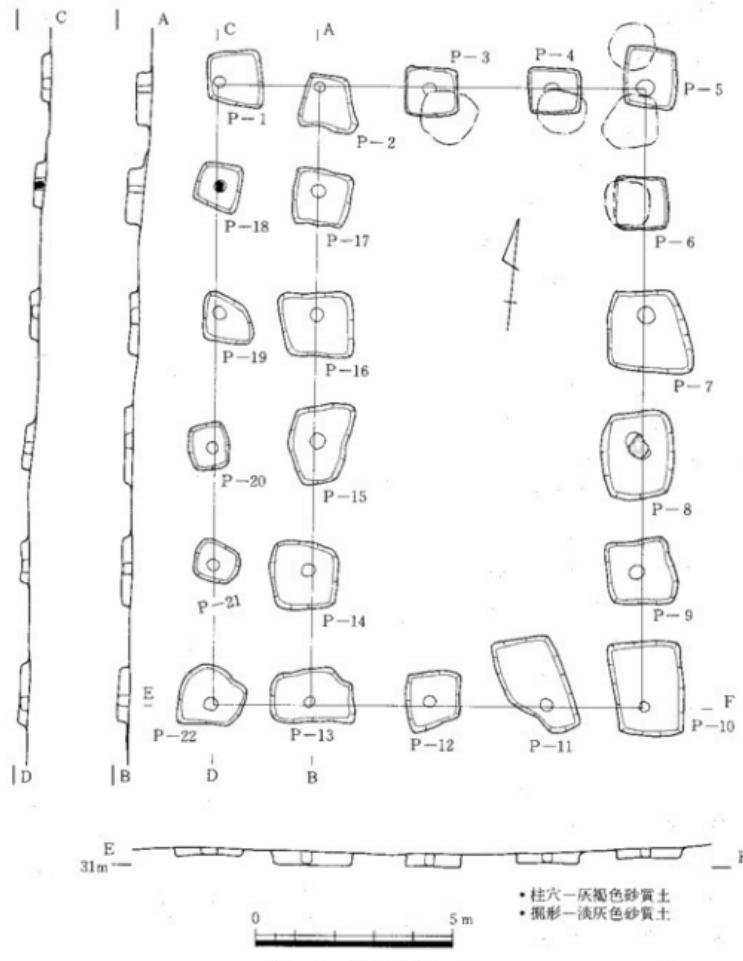
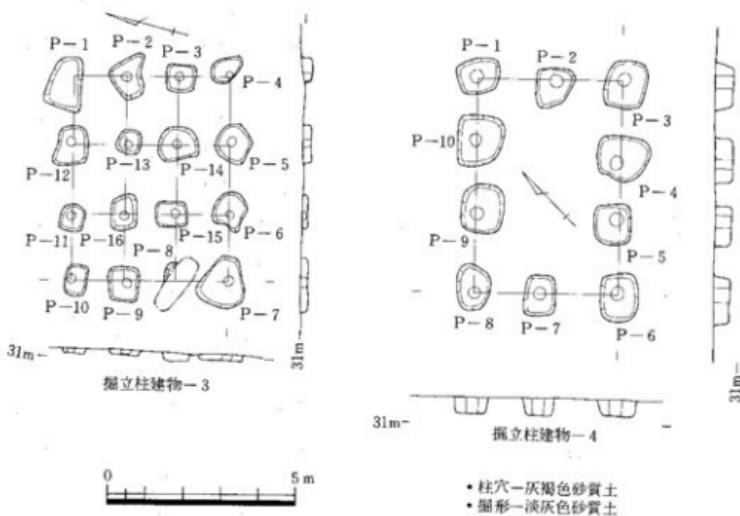


図-5 挖立柱建物-2

廄部分の柱掘形は、南北両端が1.3 mの隅丸方形又は不定形をなし、他のものは一辺1 mの隅丸方形を呈するものが多い。柱穴内には、直径25cmの柱根が遺るもの（P-18）や根石を持つもの（P-8）がある。この建物は、柱穴・平面規模等が遺跡内で最大である。建物は、P-13柱穴内より土師器（②・③）・須恵器（④）が出土した。時期は7世紀末以後と考えられる。この建物に付属する溝-3は、後述するが同時期のものと考えられる。



◎掘立柱建物-3 (図-6)

下段の南部に位置する桁行3間(5.5m)×梁行3間(4.2m)の総柱建物である。柱間寸法は、桁行2.7m(9尺)、梁行2.4m(8尺)である。柱掘形は、一辺80cmの隅丸方形を呈するもの、橢円形を呈するものがあり、その内に直径約25cmの柱痕跡が認められた。遺物は、P-10の柱穴内より土師器(⑭・⑯)・須恵器(⑮)・鉄滓が出土した。時期は8世紀前半。

◎掘立柱建物-4 (図-6)

1次調査区下段の中央部に位置する3間(5.7m)×梁行2間(3.9m)の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行15.6m(5.2尺)、梁行1.95m(6.5尺)である。柱掘形は、一辺1m前後で隅丸方形を呈するものが多く、直径30cmの柱痕跡が認められた。遺物は、P-4・P-9の柱穴内より土師器・須恵器(⑯)が出土している。この建物は、掘立柱建物-5との切り合い関係から、建物-5より後出のものである。時期は8世紀中～後葉と考えられる。

◎掘立柱建物-5 (図-7)

1次調査区下段の北東隅に位置する桁行3間(6.3m)、梁行2間(3.9m)の総柱建物である。柱間寸法は、桁行2.1m(7尺)、梁行1.95m(6.5尺)である。柱掘形は、一辺60cmの隅丸方形のもの、円形を呈するものがあり、直径25～30cm前後の柱痕跡が認められる。遺物は、P-3・P-11の柱穴内より土師器・須恵器が検出され、時期が8世紀前半と考えられる。

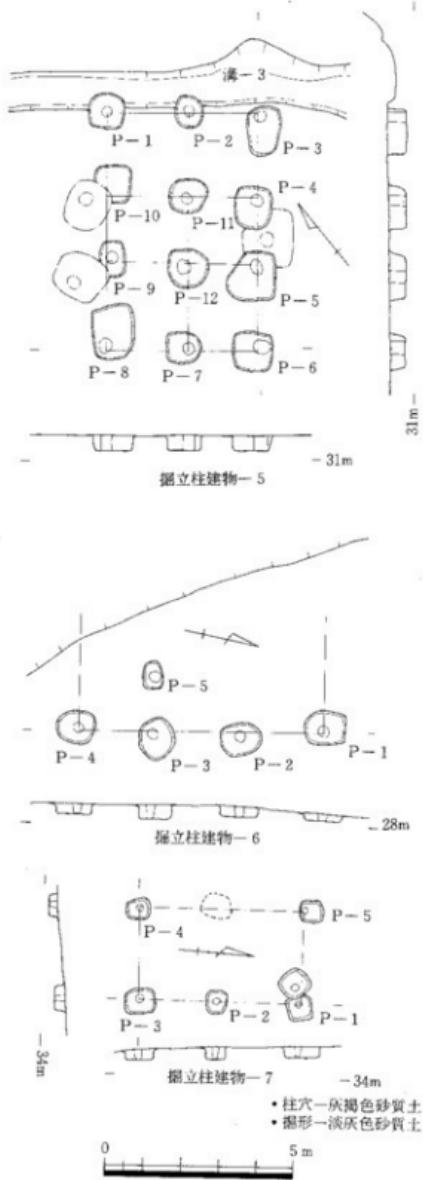


図-7 掘立柱建物-5・6・7

建物-2・5と切り合い関係があり、建物-2→5→4の順に先後関係が明らかである。また、建物-2の付属溝-3を切っており、先の前後関係が正確であることを実証している。

◎掘立柱建物-6 (図-7)

1次調査区中段よりさらに西側のテラスに位置する建物で、梁行が削平されており確認できなかったが、桁行3間(7m)の南北棟と考えられる。柱掘形は、直径60cmの楕円形を呈し直径約20cmの柱痕跡が認められた。遺物はP-4の柱穴内より土師器⑪・⑯・②、須恵器⑮・⑯が出土した。P-5は、建物内にあり東柱である可能性が高いが、他の柱穴が検出されなかったので断定しがたい。建物の造営に際して、建物東側の尾根を地山整形している。建物の時期は、7世紀末から8世紀前半と考えられる。

◎掘立柱建物-7 (図-7)

1次調査区上段の西側に位置する桁行2間(4.5cm)×梁行1間(2.5m)の南北棟建物である。柱掘形は、一辺50~60cmの楕丸方形を呈し、その内に直径25cm前後の柱痕跡が認められる。遺物は、P-1の柱穴内より土師器・須恵器が出土した。時期は、7世紀末から8世紀前半と考えられる。

以上1次調査で検出した掘立柱建物について述べた。次に2次調査で検出した掘立柱建物について述べる。

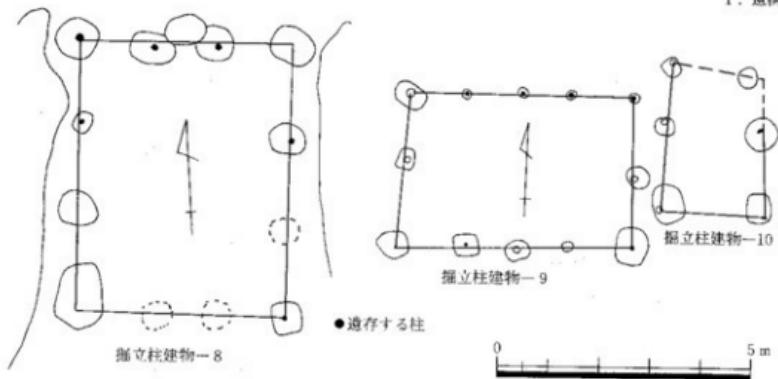


図-8 掘立柱建物-8・9・10

◎掘立柱建物-8 (図-8)

2次調査区下段に位置する桁行3間(5.7m)×梁行3間(4.44m)の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行1.8m(6尺)、梁行1.35m(4.5尺)である。柱掘形は直径約 mの不整円を呈し、中には、柱根が遺存するものも認められた。柱根は直径約 cmで床面より約 cmの所で切られている。その切断面は焼けて炭化している。また建物敷地内全面には、薄く炭層が検出された。これらのことから、建物が何らかの理由で除去された後、火を使う行為が当地でおこなわれたと、考えることができる。また、この建物をはさむようにして東と西には炭焼窯と考えられるものが存在していることも注意を要する。掘形内の遺物から時期は7世紀後半頃と考えられる。

◎掘立柱建物-9 (図-8)

2次調査区下段に位置する桁行4間(4.5m)×梁行2間(3.0m)の東西棟建物である。柱間寸法は、桁行1.2mから1.0mと幅がある。梁行は1.5m(5尺)である。柱掘形は一辺が約0.4mで隅丸方形や梢円形のものが多い。柱根が遺っているものもある。直径は約15cmである。当建物内北西隅には地中に曲物を埋めた土坑が検出された。土坑は長軸を南北に持つ梢円形を呈する。また、当建物敷地全面にも建物8と同様に炭層を確認した。また、この炭層は、当建物の西側部では、さらに顕著に見られ、約20cmの厚さで堆積している部分も存在する。この炭層内には7世紀末の土器が多量に混入していた。建物の時期は7世紀後半と考えられる。

◎掘立柱建物-10 (図-8)

2次調査区下段に位置する桁行2間(3m)×梁行1間(2.2m)の南北棟建物である。掘形は一辺0.8mの隅丸方形のものと直径0.4mの円形のものがある。柱根が遺っているもののが存在する。その柱は一辺20cmの角材である。当建物は、建物9と重複しているが、切り合い関係は認められなかった。

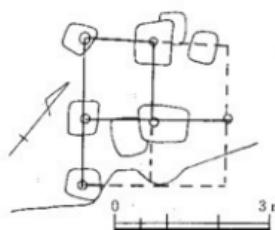


図-9 堀立柱建物-11

◎堀立柱建物-11(図-9)

2次調査区W区中段、すなわち、1次調査区で建物-1・2が建っていた平坦面の南端に位置する。南側が後世の水田で削平されているため明確ではないが、桁行2間(2.9m)×梁行2間(2.9m)の縦柱建物と考えられる。当建物が立地している平坦面は、埋没谷-2'にあたる。この平坦面からは、他に土坑や、炭層面を検出したが、遺構の時期・性格等は、明確にすることはできなかった。

3. 井戸

井戸は、1次調査区W区上段に井戸-1、中段に井戸-2が位置する。規模は、井戸-1が大きく、井戸-2は小形の施設である。井戸-3は、石組みのもので集水施設と考えられる。

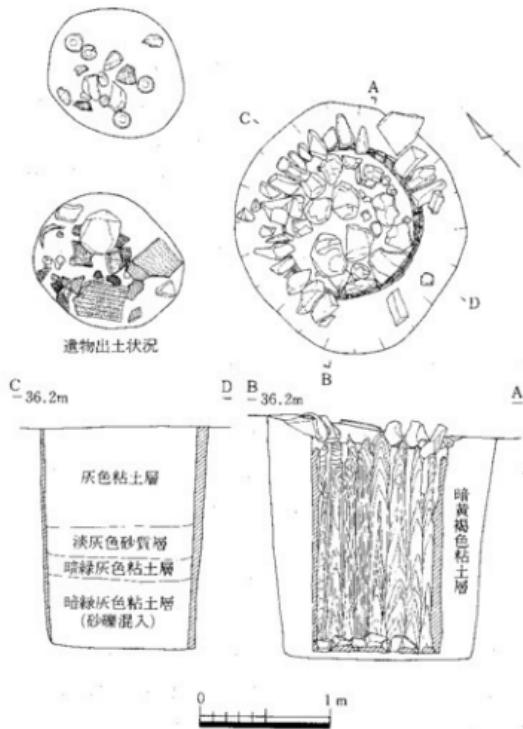


図-10 井戸-1

◎井戸-1(図-10)

掘形は、長径1.9m、短径1.8mでほぼ円形を呈し、直径1.1mの円形板組の井戸である。井戸枠は、幅15~20cm、厚さ60~80cmの細長板材32枚を縦に組んでいる。枠材の高さは、1.6~1.7mで、その上に20×10cm大の石を小口積みにし円形に配している。井戸底には、30×30cm大の板状の石を敷き、床面とする。井戸の堆積土は、上層より植物遺体を多く含む灰色粘土、淡灰色砂、暗緑灰色粘土、暗緑灰色粘土(砂礫を含む)の順となっている。掘形の裏込めは、暗黄褐色粘土を入れつき固めている。遺物は、淡灰色砂、淡緑灰色粘土層内より土師器⑩・⑪~⑬・⑯・⑰~⑲、須恵器④・⑯・⑰、木

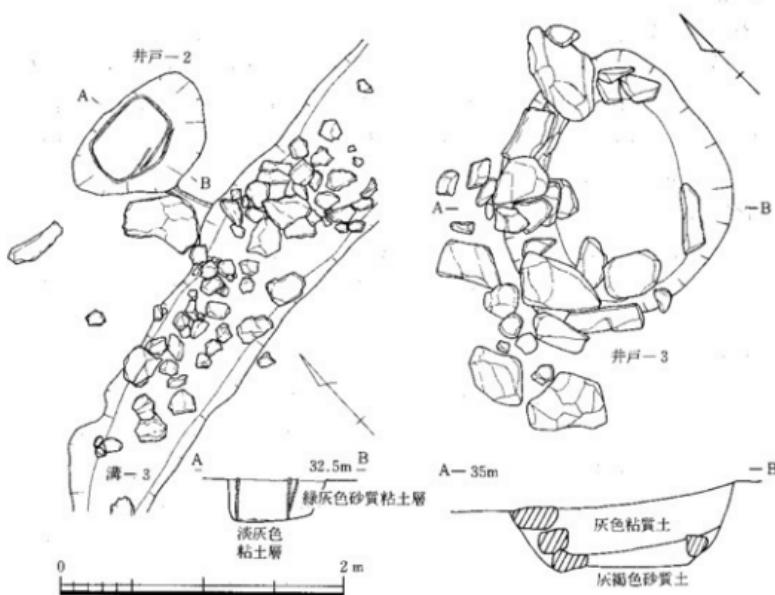


図-11 井戸-2・3

器@～@、@～@)、最下層の暗緑灰色粘質土内に多量の平瓦@・@、九瓦@が出土した。淡灰色砂質土出土の土器が9～10世紀初頭の年代を示すことから、井戸の廃絶期は平安時代中期(10世紀以後)と考えられる。井戸の上限を示す遺物はきわめて少量である。その年代を厳密に決定することは困難だが井戸の構造、出土器種からみると、掘立柱建物群とほぼ同時期と考えることが最も妥当である。

◎井戸-2 (図-11)

1次調査区中段の溝-3に付属して、井戸-2が位置する。掘形は、長径1.1m×短径0.7mで楕円形を呈した内に、淡灰色粘土層が堆積する。井筒は、長径60cm×短径40cmの折敷の側板を用いている。遺物は、斎串@が1点出土したのみ。時期は、溝-3に付属することから7世紀末～8世紀前半と考えられる。

◎井戸-3 (図-11)

1次調査区E区上段、溝-1東側に位置する井戸で、掘形は長径2m×短径1.7mの楕円形を呈する。井戸は、東側地山部分以外に40×20cm大の石材を横積み又は小口積にして構築している。深さは50cm前後で、出土した遺物から8世紀代のものと考えられる。

4. 構列

◎構列-1・2

掘立柱建物-1の東側に位置し、北側に構列-1、南側に構列-2が一直線上に並ぶ。構列-1の柱間は、2間で柱間寸法は2.1mである。柱穴は、一辺80cmの隅丸方形の掘形内に柱痕が遺存するものがある。構列-2は、柱間が2間で柱間寸法が2.1mである。柱穴の形状は、構列-1と同じ。時期は、建物-1と同時期で7世紀末頃と考えられる。

◎構列-3

掘立柱建物-2の東側に位置し、柱間2間の柵で、柱間寸法が3mである。柱穴は、一辺40~60cmで円形や隅丸方形の掘形に、直径24cmの柱痕が遺存する。建物-2とほぼ同じ方位であることから、同時期の所産と考えられる。

◎構列-4

井戸-1の位置するW区上段の平坦面南側に位置するL字形の柵である。柱間寸法は、東西4m、南北1.5mである。柱穴は、一辺40~50cmの隅丸方形又は円形を呈し、直径20cmの柱痕跡を遺す。掘立柱建物である可能性も高いが、南北部が削平されているため明確ではない。

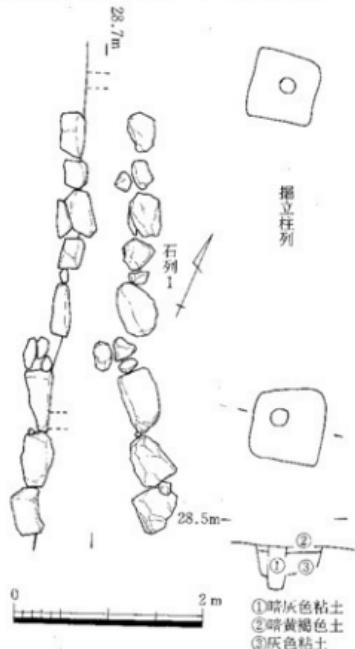


図-12 掘立柱列・石列-1

5. 掘立柱列 (図-12)

2次調査区E区下段、埋没谷-2'内に作られたもので、集石造構除去後に検出したものである。1間分のみしか検出し得なかつたため果してこのような柱列が谷に沿って並んでいたかは不明である。掘形は一辺80cmの隅丸方形を呈し、深さは40cmである。径18cmの柱痕跡も認められた。この柱列は、建物等の主軸方向が南北あるいは東西を取っているのに対しN-27°-Wと主軸がずれている。この方位は、次に述べる石列等と一致している。

6. 石列

◎石列-1 (図-12)

2次調査区集石造構の石除去後に検出したもので南北に約7m続いている。約50cm大の石を横長に使用し石列の東と西では段差が30cmある。石列の西辺は一直線にそろえられており、西から見られることと、この石列より東にある空間(E区下段)を意識して並べられている。

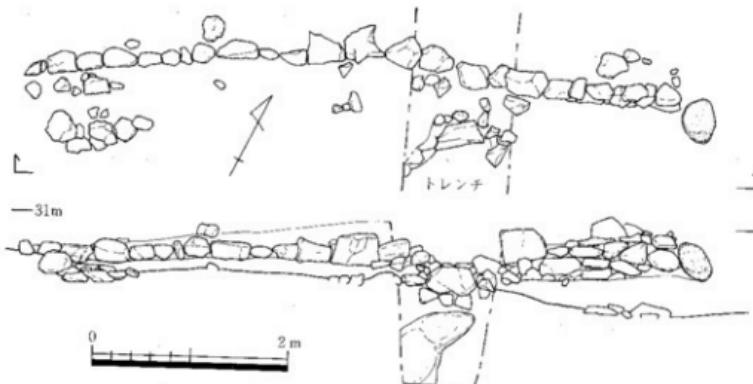


図-13 石列-2

◎石列-2 (図-13)

2次調査区W区中段で検出したもので東西 8 m の石列である。当石列は、埋没谷-2の埋立てと同時に築かれており、その根石には、1m 近い石を使用している。石の使用法は、場所によって異なっており、西半分では、石を横長に使用し1段しか並べていないのに対し、東半分では、扁平な石を2~3段積みあげている。この石列の方向は、建物とはずれているが構築された時期が、谷の造成時期と同じであることから7世紀中頃から後半にかけてのものと考えられ、建物との関係において注意を要する。

7. 土坑 (図-14)

◎土坑-1 1次調査区上段溝-1の東側に位置する幅1m×長さ3.8mの細長い橢円形を呈する。深さは、20cmほどあり暗灰色砂質土の単層である。土坑内には、土器の他に直径80cm大の自然石が内包されていた。遺物は、土師器⑩・⑪、須恵器⑫~⑯が多量に出土した。時期は7世紀前半と考えられる。

◎土坑-2 1次調査区上段溝-1の東側に位置する幅80cm×長さ2mの隅丸方形を呈する土坑である。深さは15cmほどあり灰色砂質土が堆積する。当土坑の北側には、30×20cm大の花崗岩を配する。遺物は、土師器・須恵器⑩・⑪が出土した。時期は、7世紀前半頃と考えられる。

◎土坑-3 1次調査区下段西側トレンチ際で検出された土坑で、存在長2.8m、幅40~50cmを測る。深さは、50cmほどであり上層から灰褐色土、暗灰褐色土、灰褐色砂質土の順で堆積している。遺物は、土師器・須恵器・瓦・施釉陶器が多量に出土した。時期は、8世紀代と考えられる。またピット12によって切られていることから建物に先行するものである。

◎土坑-4 上段のピット群内の中央部に位置する直径約1.6mの円形を呈している。深さは、

30cmほどあり、 $10 \times 20\text{cm}$ 大の自然石が多量に投棄されている。堆積層は、上層より灰褐色土・灰色粘質土・暗灰色土の順である。遺物は、土師器・須恵器が少量出土した。時期は7世紀前半頃と考えられる。

◎土坑-5

2次調査区下段で検出された土坑で長径1.8m、短径1.2m、深さ0.28mを測る。土坑内には、土師器・須恵器の他に植物遺体も多く見られた。時期は7世紀末頃と考えられる。

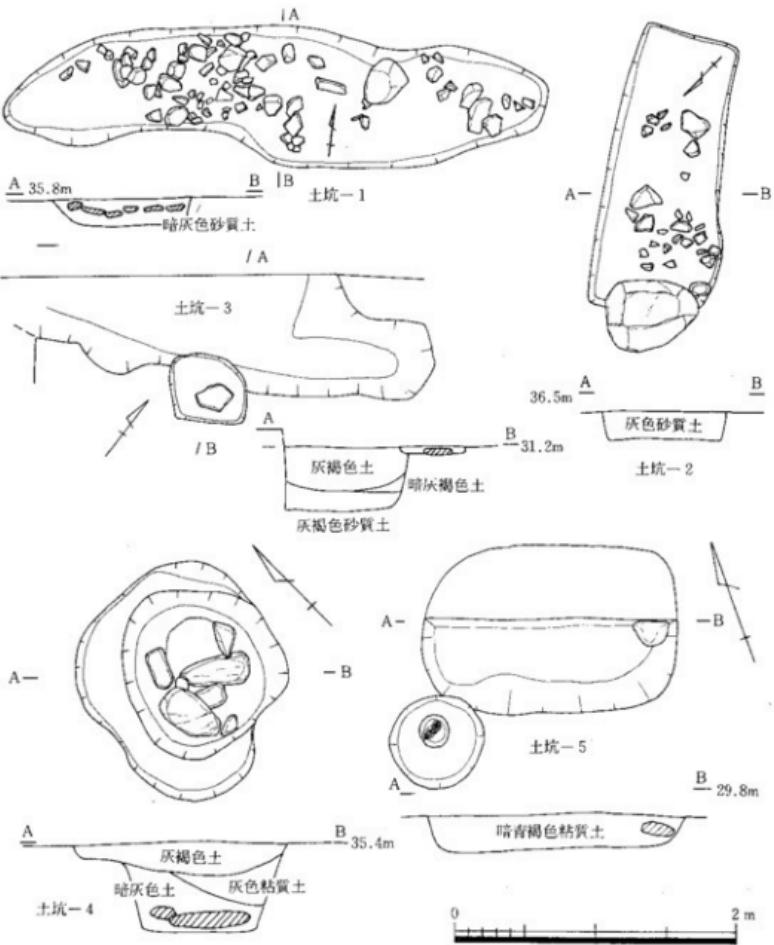


図-14 土坑-1・2・3・4・5

8. 溝

◎溝-1

1次調査区E区上段に位置する幅2~3m、長さ18mの南北溝である。地形的にも、10G区が標高36m、11D区が標高37mであり、その間に存在する、本来は、谷-2の一部である。溝の東側肩部は西側に比べて50~80cmほど高くなっている。溝-1は、上層より灰褐色砂質土・灰色砂・暗灰褐色砂質土の順で堆積している。層内には、50×60cm大的花崗岩の自然石が多量に内包されている。遺物は、土師器⑯~⑰、須恵器⑮~⑯、埴輪⑯~⑰が多量に出土した。その量は、コンテナ25箱分である。溝-1は、井戸-3と切り合い関係があり、井戸-3に先行する。溝-1から出土した遺物には6世紀前半~7世紀前半のものがあるが、特に7世紀前半の遺物が最も多い。溝-1の廃絶は、おそらく7世紀後葉前後と考えられる。

◎溝-2 (図-15)

溝-2は、1次調査区W区中段の古墳北側8mに位置する幅40~80cm、残存長6.2mの東西溝である。深さは、20cmほどで東側から西側に向かって4cmほど下っている。埋土は、灰色砂質土の単層で、多量の埴輪⑯・⑰・⑯~⑰・⑯~⑰、須恵器⑯が出土した。またP-13と切り合い関係があり、P-13が後出す。溝-2の時期は5世紀後半で古墳の周溝である可能性が高い。

◎溝-3

掘立柱建物-2の東・北・西側にコ字状に配された排水溝で、建物-2の北端より4mの距離を測る。溝の幅は70~80cm、深さ20cmで断面V字形を呈し、灰褐色砂質土が堆積する。遺物は、土師器⑥・⑨~⑫、須恵器⑦、製塙土器⑤、瓦類⑯、轍の羽口⑧が出土した。溝の時期は、7世紀末頃に開削されており、その年代と溝の配置から掘立柱建物-2に付属する施設である。また、当溝内に掘られた井戸-2の南側には、約3mに渡って10×15cmの石材を配している。

◎溝-4

2次調査区E区下段で掘立柱建物-8の北側に位置し、段下にそつて東西に伸びる。幅0.2~1m、長さ11mの溝である。建物-8の北では深さ約50cmを測る。埋土は暗青灰色粘土で、土師器・須恵器の他に、大量の植物遺体や獸骨等が混入していた。また建築部材と考えられるぼぞ穴を穿った角材や、焼けた柱等も混入している。時期は建物-8と同じく、7世紀後半のものである。



図-15 溝-2

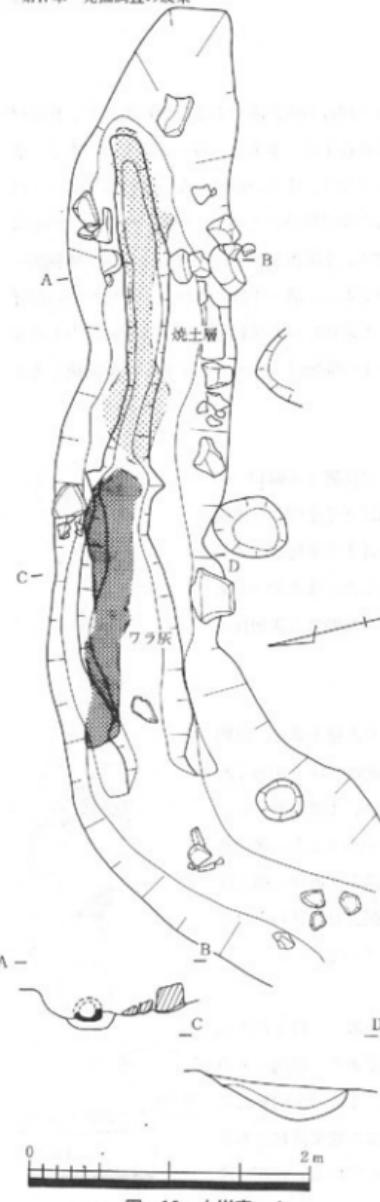


図-16 木炭窯-1

8. 木炭窯

◎木炭窯-1 (図-16)

1次調査区W区上段に位置し、小尾根に直交して作られており、標高36.5mである。窯は、現在長約6m、幅1.1mの掘形内に焚口、焼成室、煙道がある。焚口部分は、窯主軸がL字状に屈曲しており、多量の焼土と共に土師器⑩・須恵器⑪・⑫が出土した。焼成室は、幅70cm、長さ2.2m、深さ20~30cmを測る。窯体内からは、藁灰が 0.4×2 mの範囲に検出され、厚さ15cmほど堆積していた。その藁灰は、窯主軸に直交して並べてある。煙道は、直径15~20cm、残存長2mで細長い。窯壁は、スサ入りの灰色粘土を用いており、煙道部分ではその厚さが3cmほどであった。この窯の性格は、L字状になる形態・藁灰の出土から、木炭窯と考えられる。時期は、7世紀の中葉～後葉に位置づけられる。おそらく、造寺に伴う小鋳冶用の木炭窯であろう。

◎木炭窯-2

2次調査区E区下段、掘立柱建物-8の東辺に沿ってつくられている。長さ7m、幅1.5mで焚口の部分は0.8mと狭まる。地面をU字状に浅く掘りくぼめ、その上にドーム状に窯壁が存在していたと考えられる。床面には粘土を貼った様子はなく、地山の直上に白色の灰と炭化した藁灰が2~3重の互層を成していた。出土遺物には、土師器・須恵器等があるが、これらは後の大規模な整地の際に混入したものと考えられる。時期は、建物-8を意識してつくられていることから考えると、建物-8より後出すことがわかり、7世紀の後葉に位置づけられる。

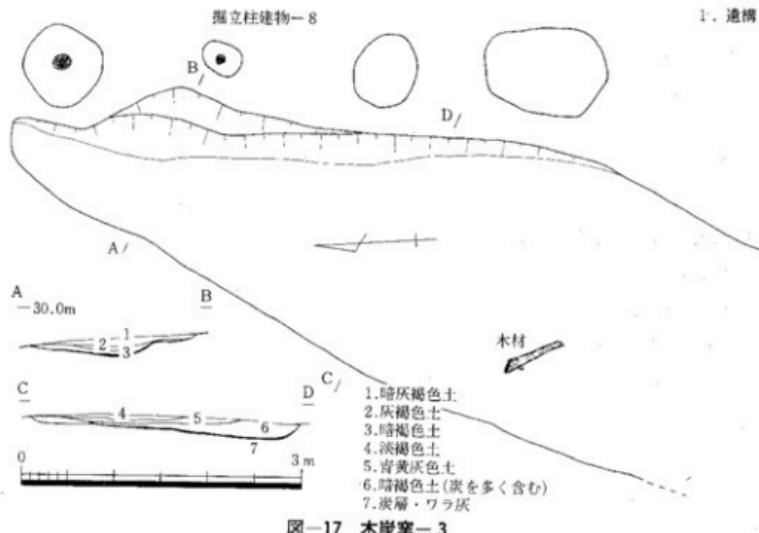


図-17 木炭窯-3

◎木炭窯-3 (図-17)

2次調査区下段掘立柱建物-8の西辺に沿ってつくられている。長さ約8m、最大幅3.5mで、北に行くほど狭くなっていく、東側立ちあがりは、約20cmで明確であるが西側の立ちあがりは不明瞭である。窯内には、スサ入りの窯壁が落ち込んだ状況が確認できた。また、木炭窯-2同様、床面には、粘土を貼った様子ではなく、地山直上に、墓灰の堆積が見られた。窯廃絶後の埋土内には、土師器や須恵器の他に建築部材と考えられる一端が炭化した木材と鉄釘等も混入している。時期は、木炭窯-2と同様、7世紀後葉と考えられる。

9. 集石遺構 (図-18)

◎集石遺構-1

1次調査区掘立柱建物-1・2等が立地した平坦面と、2次調査区掘立柱8・9等が存在した平坦面を東西に大きく分ける位置に存在する。南北20mにわたる大規模な溝に、多量の石が集められているものである。石は、20cm大のものから2m大のものまで種々雑多である。石材も、花崗岩や砂岩等が主であるが、数多くの種類があるようである。石の配列には規則性は全くないが、一部で人為的に積まれたと考えられる部分も見られる。この集石は谷-2を埋めて作られており、谷埋土内には、6世紀後半から7世紀中葉の遺物が、またこの集石溝内からは7世紀末から8世紀初頭の遺物が出土している。このことから、この集石溝が、掘立柱建物1・2等と同じ時期に存在していたことがわかる。また、1次調査区と2次調査区を区画する役割と同時に、下段と上段をつなぐ通り道として利用されたとも考えられる。このことは、石列2がこの集石以前につくられており当溝を人が通ることを意識していることからも窺える。

◎集石造構－2

2次調査区下段で検出されたもので、掘立柱建物9廃絶後に作られている。東西約6m、南北約4mの方形区画内に20~50cm大の石が無秩序に集められている。方形区画を呈することから建物の基礎とも考えられるが、この上面は、後世の水田による削平を受けているため、明確ではない。時期は集石造構－1と同じ時期で7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

10. 地山整形・整地層

◎地山整形

1次・2次調査区では、建物を建てる平坦面を確保するために大規模な地山整形がおこなわれており、古代における造成工事の一端を窺うことができる。1次調査区では、南北尾根の先端部に6世紀末には横穴式石室を有する古墳が築かれていたが、7世紀後半には、この古墳を破壊し、谷筋をうまく利用してなるべく土木量をおさえて広い面積を得るように考えられている。2次調査区においては、東西25mにわたって2mの段が削り出されており、下段に平坦面がつくられている。この平坦面は調査範囲外に広がるものであり、この造成をおし進めた力が非常に大きなものであったことがわかる。またこの地山整形の段階で、1次調査区にあった谷は埋めたてられている。この埋土には、6世紀末から7世紀初頭の遺物が多く含まれている。また炭層や、獸骨、木材等も多量に混入しており、6世紀代から人々の生活が営まれていたことが窺える。

◎整地層

2次調査区下段全域に見られるもので、掘立柱建物や炭焼き窯廃絶後に行なわれたもので高さ2mの段を埋めつくしている。上部は水田による削平を受けているため造構の確認はできなかった。この整地層はまず最初に段上から段に沿って粘土と地山ブロックを混ぜた土を、約5cmずつ積み重ね、50cm位の厚さになった段階で、約1~3cm厚で水平に版築をおこなっている。調査区東隅ではこの版築をおこなう前段階で炭がうすく広がる層が検出されたこの炭に混じって多量の土師器・須恵器・木製品・鉄製品が検出された。特にこれらの遺物は、浅い落ち込み状の部分に多く見られ、一括して廃棄されたものと考えられる。

11. 古墳 (図-19)

1次調査区下段の西南部に位置する古墳で、横穴式石室を有する。石室の掘形は、幅2.2m残存長3.5mで南へ開口している。石室は、西側側壁の根石3列しか遺存していないが、石抜取り穴が検出されており、内法1.2×2.4mの無袖式横穴式石室と考えられる。奥壁部に奥壁と思われる石材を埋めた石の落し穴が検出された。そのため、床面は破壊されており、南半分のみ石敷の床が検出された。床面上には、鉄釘(図-19)・刀子(図-17)・土器(図-18)・鉄滓等が多量に出土した。その年代から、古墳は6世紀後半に造墓され、7世紀後半~末頃に造寺に際して削平され破壊されている。墳形は、おそらく円墳であろう。



図-18 集石遺構・整地層

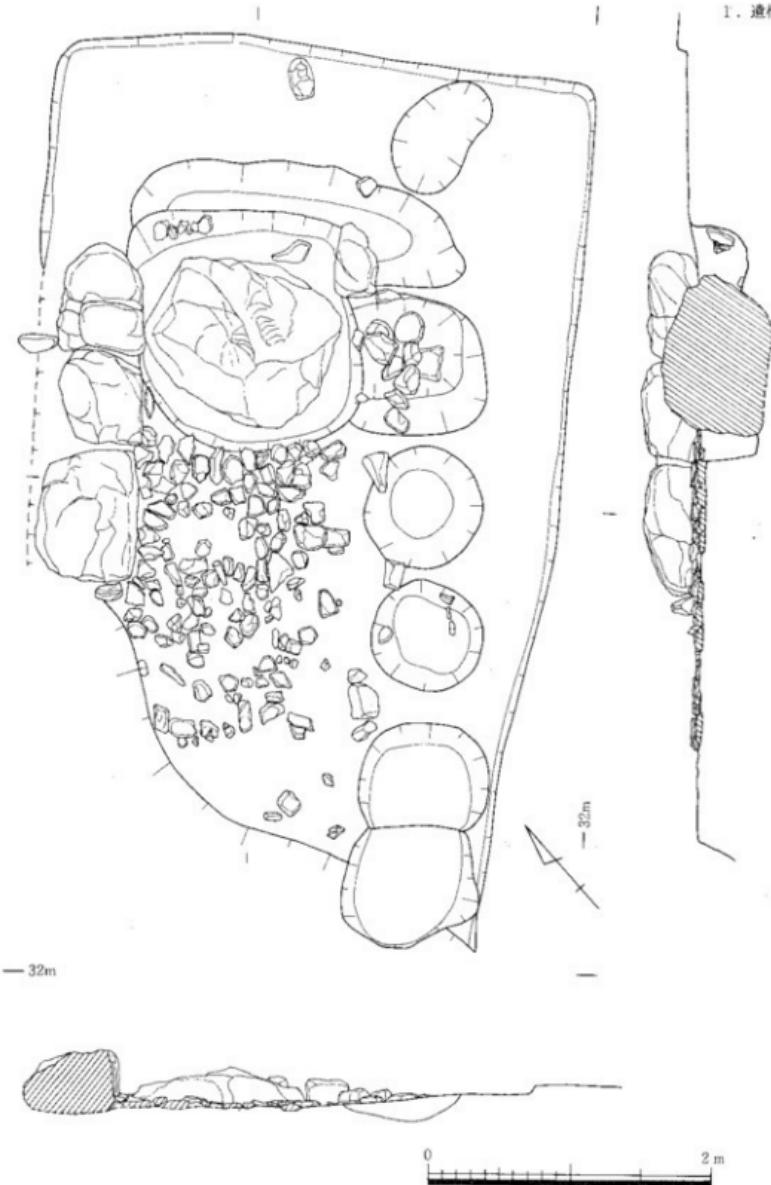


図-19 古墳

2. 遺物

遺物は、土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器などの土器類、軒瓦・丸瓦・半瓦・埠等の瓦類、鐵滓・銅滓・繩羽口などの鍛冶関係遺物、斎串・櫛・建物部材などの木製品がコンテナ 500 箱分ほど出土した。特に多いのは土器類でコンテナ 300 箱分ある。これらの遺物は、7世紀後半から8世紀代の寺院関連のものが大半を占めるが、6世紀から7世紀前半の寺院に先行する時期のものも多量に出土している。これらの遺物を遺構ごとに順次、説明を加える。

1) 土器類

◎掘立柱建物出土の土器 (図-20)

建物の掘形内より出土した遺物は、建物-1 (①)、建物-2 (②～④)、溝-3 (⑤～⑫)、建物-3 (⑬・⑭・⑯)、建物-4 (⑮)、建物-5 (⑯～⑰・⑲)、建物-8 (⑳～㉓)、で図示できるものは少ない。以下、建物順に出土遺物を説明する。

- 建物-1、土師器の杯 (①) で口径21cm、器高2.8cm。外面ヘラ磨き、底部ナデ調整。内面螺旋状十二段斜方射状暗紋を施す。色調は黄灰色。焼成は良好。胎土はあまり砂粒を含まない。
- 建物-2・溝-3 ②は、土師器の杯で丸い底部に外反した口縁部を有する。端部は、外側に外反させる。焼成良好。色調は黄灰色。胎土には少量の石英・長石を含む。③は、土師器の杯で、外面ヘラ磨き、底部指押え調整。内面には斜方射状暗紋を施す。④は、須恵器の杯で貼付け高台を有する。内外面横ナデ調整。色調は青灰色。焼成良好。⑤は、製塙土器で外面に指押え痕を遺す。内面は横ナデ。色調は赤褐色。焼成は良好。胎土には長石・石英を含む。⑥は、土師器の杯で外面にヘラ磨き、内面に螺旋状十二段斜方射状暗紋を施す。色調は赤褐色。焼成良好。⑦は、扁平な宝珠つまみを持つ須恵器の蓋である。内面のかえりは、口縁端部より下にさがらない。天井部は、回転ヘラ削り、内面はナデ調整。⑧は、繩の羽口で直径7cm器壁1.5cmを測る。外面は、先端部が黒褐色、末端部が黄灰色を呈し、2次焼成の温度差を示す。胎土には長石・石英・雲母を多く含む。⑨は、高杯の脚部で、外面をヘラ削りによって14面カットにする。襷部は、ヘラ磨きをおこなう。内面には明瞭な絞り目が認められる。杯部と脚部は、貼付けによる接合をおこなう。⑩は、土師器の皿で、外面に横ナデ、内面に螺旋状十斜方射状暗紋を施す。底部は、ヘラ削り調整。色調は黄灰色。焼成良好。⑪は、口縁部を外反させ水平方に端部をつまみだす。体部は、指押え後ナデ、内面は横ナデ。色調は黄灰色。焼成は良好。⑫は、土師器の鉢で外面にヘラ磨き、内面は横ハケ調整の後に体部上半をナデ消す。底部はヘラ削り。色調は赤褐色。焼成良好。

- 建物-3 ⑬は、須恵器の平瓶で底部はヘラ切りをおこなう。体部内外面は横ナデ調整。色調は灰褐色。焼成良好。⑭は、土師器の小形高杯で内外面ともに指押え痕を遺す。⑯は、土師器皿で口縁端部が内側に肥厚する。体部外面横ナデ。色調は黄灰色。焼成良好。

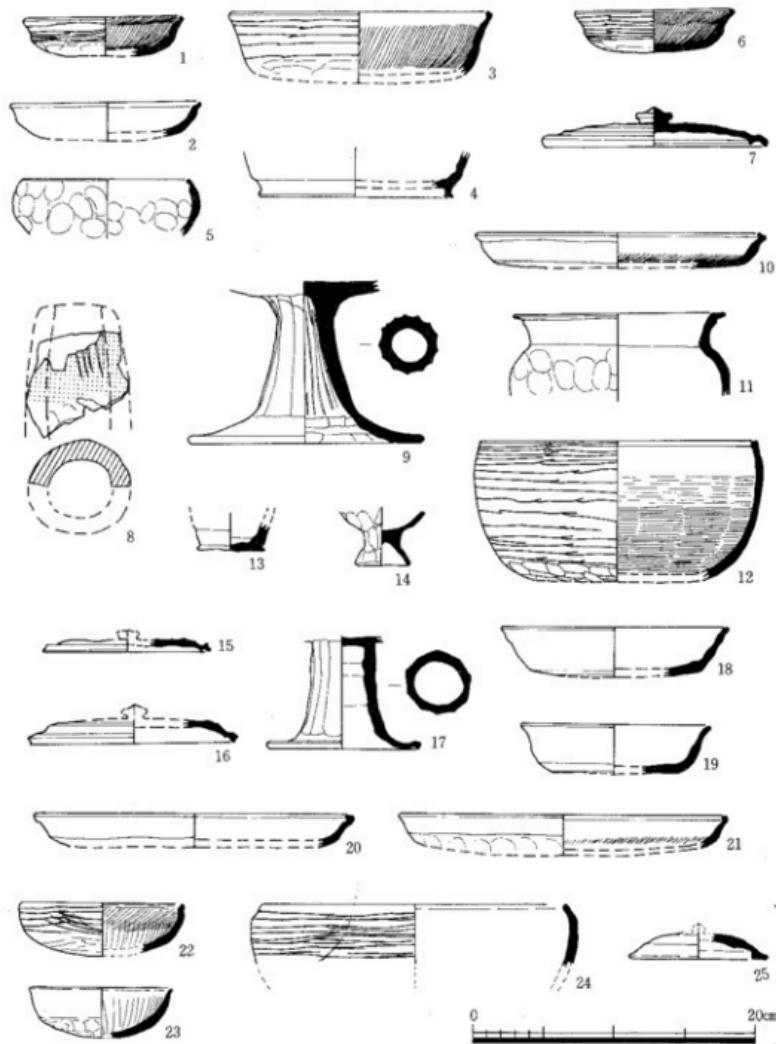


図-20 挖立柱建物・溝-3出土土器

建物-1 ①、建物-2 ②~④、建物-3 ⑪·⑫·⑯

建物-4 ⑮、建物-5 ⑬~⑯·⑰、建物-8 ⑲~⑳

溝-3 ⑤~⑭

- 建物-4・5 ⑯・⑰は、須恵器の杯蓋で口縁部が内側に屈曲した後に端部を外反させる。天井部はヘラ削り。他は横ナデ調整。色調は明青灰色。焼成良好。⑯は、土師器の高杯で脚部外面をヘラ削りによって12面カットにする。裾部は横ナデ調整。杯部内面には螺旋状暗紋を施す。脚部内面に粘土の縫目が認められ、その状態から成形の際に脚部を下にして粘土紐を巻き上げたことが明らかである。色調は赤褐色。焼成良好。⑰は、須恵器の杯身で内外面ともに横ナデ。底部は、左回りのヘラ切り痕を遺す。胎土には、石英・長石を少し含む。色調は灰褐色。焼成良好。⑯は、須恵器の杯で体部と底部の境が丸くなり、不明瞭である。底部はヘラ切り、他は横ナデ調整。色調は灰褐色。焼成良好。胎土には長石・石英を含む。⑰は、土師器の皿で口縁端部が内側に肥厚する。体部外面は横ナデ。内面は斜方射状暗紋を施す。底部は指押えとナデ調整。色調は黄灰色。焼成は良好。
- 建物-8 ⑮・⑯は、土師器の杯身で、⑮は、口縁端部内面に段を有し、外面ヘラ磨き、内面には、斜方射状+方射状暗紋を施す。胎土は精良。色調は乳赤茶色。焼成は良好。⑯は、口縁端部が短かく外反するもので、外面は横ナデ、内面には荒い方射状暗紋を施す。胎土は精良。色調は灰黄色。焼成良好。⑰は、土師器の鉢で、口縁部は内彎し端部は丸くおさめる。体部外面はヘラ磨き、内面は横ナデ調整。胎土は精良。色調は暗褐色。焼成良好。⑱は、須恵器の杯蓋で、内面に短かい返りを有する。胎土には長石を含む。色調は青灰色。焼成は良好。

これら出土土器の年代から、建物-8が7世紀後葉、建物-1・2が7世紀末、建物-3・4が8世紀後葉以後に建てられたことがわかる。また建物-2・4・5の切合い関係から、建物-2→5→4の順に変遷がたどれることから、建物-5は8世紀中頃と考えられる。

◎井戸-1 内出土土器 (図-21・22)

器種は、土師器の椀A①～⑩・⑪～⑭、椀B⑮～⑯・⑰、椀C⑯、杯A⑦・⑧、杯C⑯、皿A⑯、皿C⑯・⑰、皿D⑯～⑰、甕C⑯・⑰、鉢B⑯、羽釜A⑯、羽釜B⑯、小形壺⑯と須恵器の瓶子⑯、長頸壺⑯、杯B⑯、皿A⑯がある。

椀Aは、丸底の底部から外上方へ直線的に開く口縁部となり、端部を丸くおさめる。口縁部は内外面とも強い横ナデ調整をおこなう。体部と底部は指押え痕を外面に明瞭に遺す。また、粘土紐を外面に遺すものがあり、粘土紐を右上に巻き上げて成形し、指押えの後に横ナデ調整する技法を復元することができる。胎土は、0.2cm以内の石英・長石を少量含む。色調は黄灰色。焼成良好。数個体であるが底部に焼成後、穿孔をおこなうもの⑯・⑰・⑯が出土している。また、「寺」と云う文字を墨書きするもの⑯等もある。椀Bは、断面三角形の高台を有するもので、技法・胎土・色調・焼成は椀Aと同じである。特に、体部に「鳥坂寺」と墨書きされたもの

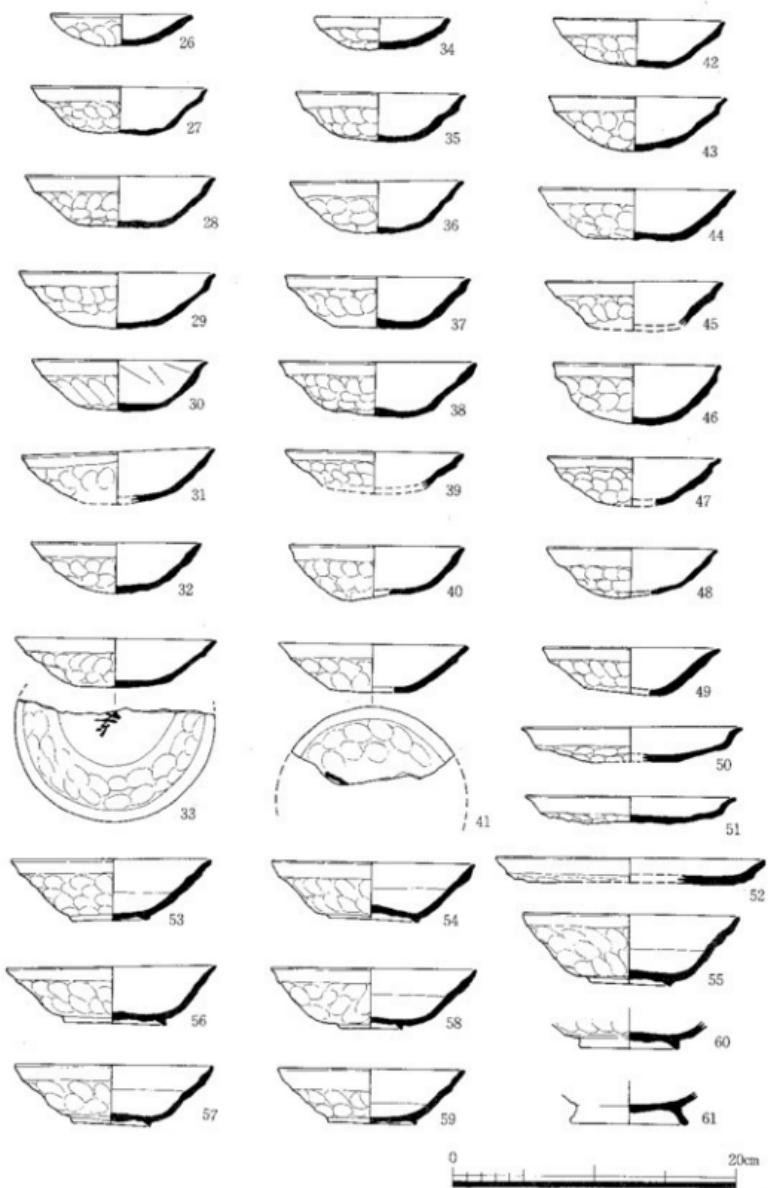


図-21 井戸-1出土土器①

⑩がある。椀Cは、椀Bと同様に高台を持つもので、高台の形態が器高1cmある高いものである。胎土は、少量の砂粒を含む。色調は黄灰色、焼成は良好。

杯Aは、外面にヘラ磨きを施すもの⑪、横ナデを施すもの⑫と、手法は異なるのであるが、内面は、ともに1段斜方射状暗紋を施し、底部外面にヘラ削りをおこなう。色調は赤褐色。焼成良好。杯Cは、外面にヘラ磨き、内面に2段の連弧紋を施す。胎土・色調・焼成は、杯Aと同様。

皿Aは、外面にヘラ磨き、内面は斜方射状暗紋を施す。胎土には砂粒を含まず、色調は暗褐色。焼成良好。皿Cは、外面を指押え、内面は横ナデ調整をおこなった後に口縁部を横ナデする。胎土・色調・焼成は、椀Aと同様である。皿Dは内外面は、横ナデで底部に指押えをおこなうきわめて粗雑な土器である。他は全て、椀Aと同じ。

甌Cは、口径24cm前後の大型甌で、口縁部内外面は横ナデ調整。体部外面はともに縦ハケを施すが、内面は、ハケ調整のもの⑬とヘラ削り調整のもの⑭の2つの手法がある。胎土は、0.1cm以内の少量の長石・石英を含む。色調は黄灰色。焼成は良好。

鉢Bは、くの字状に屈折した口縁部を持ち、端部を軽くつまみあげる。体部には、1対の三角形の把手を持つ。口縁部は、外面横ナデ、内面は横ハケの後にナデ消し調整。体部は、外面を縦ハケ、内面には横ハケとナデをおこなう。底部は欠損しているため不明であるが、遺存する部分から、扁平な底部に復元できる。胎土には、0.2cm以内の多量の砂粒を含む。色調は淡茶褐色。焼成は良好。

羽釜Aは、ほぼ直立した体部にかるく外反した口縁が付く。体部上半には鈎が全周にめぐる。口縁部は内外面ともに横ナデ。体部は外面に縦ハケ、内面は縦方向のナデ上げをおこなう。体部外面は、多量の煤が付着している。胎土は、長石・石英・雲母・角閃石を含む。いわゆる、生駒西麓産の土器である。色調は茶褐色、焼成は良好。羽釜Bは、丸い体部上半に鈎がめぐりその上に大きく外反した口縁部がある。口縁部は、体部成形後に貼付けされた口縁で、内外面ともに横ナデ。体部は、内外面とともにナデ調整で、特に外面には、多量に煤が付着している。胎土は、0.4cm以内の石英・長石を多く含む。色調は黄灰色。焼成は良好。

これらの土器は8世紀前半～10世紀初頭のものが含まれる。特に⑯～⑰までは、完形品又はそれに順ずるものできわめて一括性が高い。これらは、藤井寺北岡遺跡の土坑—2出土品と同様のもので9世紀末～10世紀初頭に位置づけられるものと考えられる。⑯～⑰のものは、細片であるが8世紀代のもので井戸の上限を示すものといえよう。このことから、井戸の掘削がおそらく8世紀前半または、それ以前と考えられ、井戸の廃絶が10世紀中頃以後と考えられる。また椀Aの底部に2次的な穿孔をおこなうものがあり、井戸に対する祭祀的なものと推察される。特に「鳥坂寺」・「寺」の墨書き土器の出土により、平安中期まで俗称として鳥坂寺の呼び名が用いられていたことがわかる。

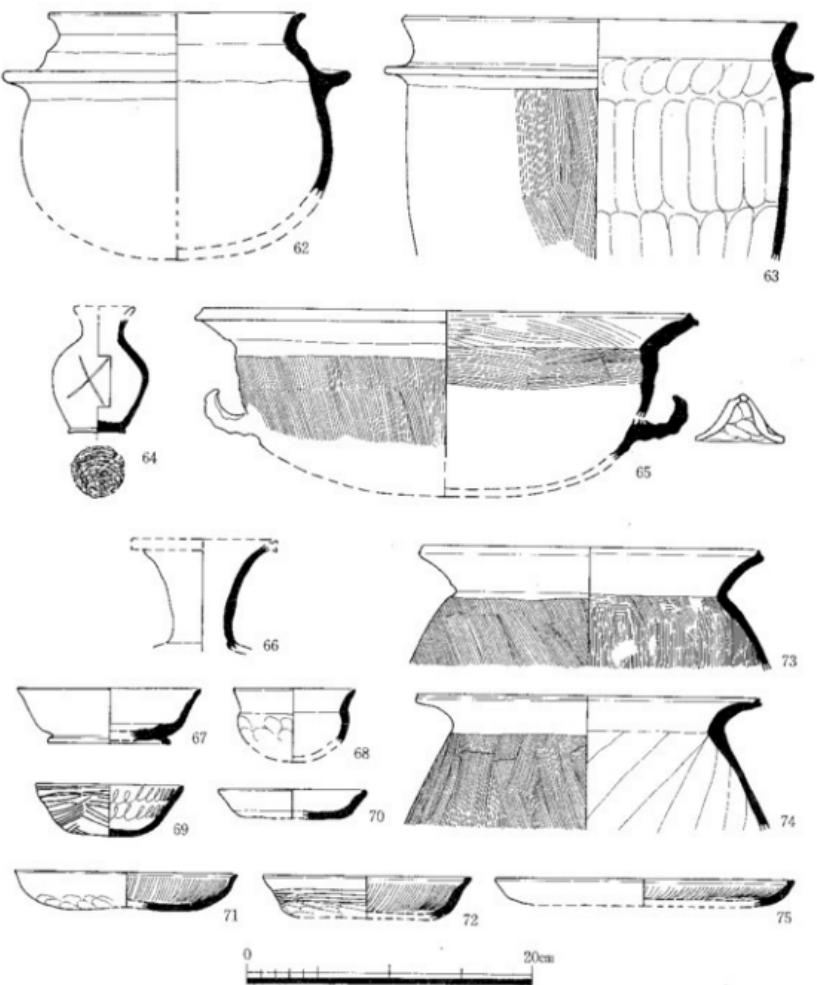


図-22 井戸-1 出土土器②

◎満—1出土の土器 (図-23・24・25)

土器は、土師器・須恵器がコンテナ50箱分出土しており、須恵器がその大半を占める。遺物の時期は、6世紀～7世紀前半のものばかりで、それらを器種・器形ごとに分類し、順次その特徴を示す。

●土師器

器種は、杯C (⑥～⑦・⑧～⑨)・杯D (⑩・⑪)・杯E (⑫～⑬)・杯F (⑭・⑮)・皿A (⑯)・高杯A (⑰・⑱)・把手付椀 (⑲)・甕A (⑳・㉑)・甕B (㉒)・鉢A (㉓・㉔)・甌 (㉕・㉖)・羽釜A (㉗)・移動式竈 (㉘)・小形土器 (㉙・㉚・㉛)がある。

杯Cは、体部・底部が半楕形を呈し、口縁となり端部を外方向へつまみ出す。法量によってヘラ磨き、底部はヘラ削り調整。内面は、1段方射状暗紋⑥・⑦・⑧、2段方射状暗紋⑩・⑪、1段方射状十連弧状暗紋⑫を施すものがある。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。焼成は良好、色調は赤褐色。杯Dは、杯Cとほぼ同形態で、外面に横ナデ、内面に螺旋状+1段方射状暗紋を施す。胎土・焼成・色調は杯Cと同じ。杯Eは、内彎する口縁部に外方向へつまみ出す壠部がつく。体部外面は、上半をヘラ磨き、下半をヘラ削り⑲又はナデ㉑によって調整する。内面は1段方射状暗紋を施す。胎土・焼成・色調は杯Cと同様。また、同形態のもので把手を付けるものがある。杯Fは、丸い底部・体部に、ほぼ直立した口縁部が付く。口縁部は、端部を軽く外反させ面となし、内外面とも横ナデ調整。体部外面は、ナデ又は指押え痕が明瞭に残る。内面は板ナデ又は横ナデをおこなう。胎土はほとんど砂粒を含まない。色調は黄灰色。焼成良好。

皿Aは、外面に横ナデ、内面に斜方射状暗紋を施す。底部は指押え、胎土・焼成・色調は杯Cと同様。

高杯Aは、半楕状の体部に直立する口縁部からなり、口縁端部を外方に拡張するもの⑰と丸くおさめるもの㉖がある。脚部の形態は、棒状の筒部となるもので、高杯Bとは区別される。体部は、外面にナデ、内面に螺旋状+1段方射状暗紋を施す。口縁部は、内外面とも横ナデ。成形は、脚部と杯部を分割しており、断面に粘土板の縫目が残る。胎土・色調・焼成は、杯Cと同じ。

把手付椀は、口縁部が欠損しているが把手と体部・底部が残る。外面は、下半をヘラ削り、上半をヘラ磨きで調整。内面には、2段の斜方射状暗紋を施す。把手の接合法は、椀体部に把手を貼付ける。胎土・色調・焼成は、杯Cと同じ。

甕Aは、球形を呈する体部に外反した口縁部が付く。外面はナデ、内面は板ナデ又はナデ調整。体部外面に2次的な煤が付着する。胎土は、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は黄褐色。焼成良好。甕Bは、外面を縦ハケとナデ調整をおこなう。口縁部は、内外面とも横ナデ。

2. 遺物

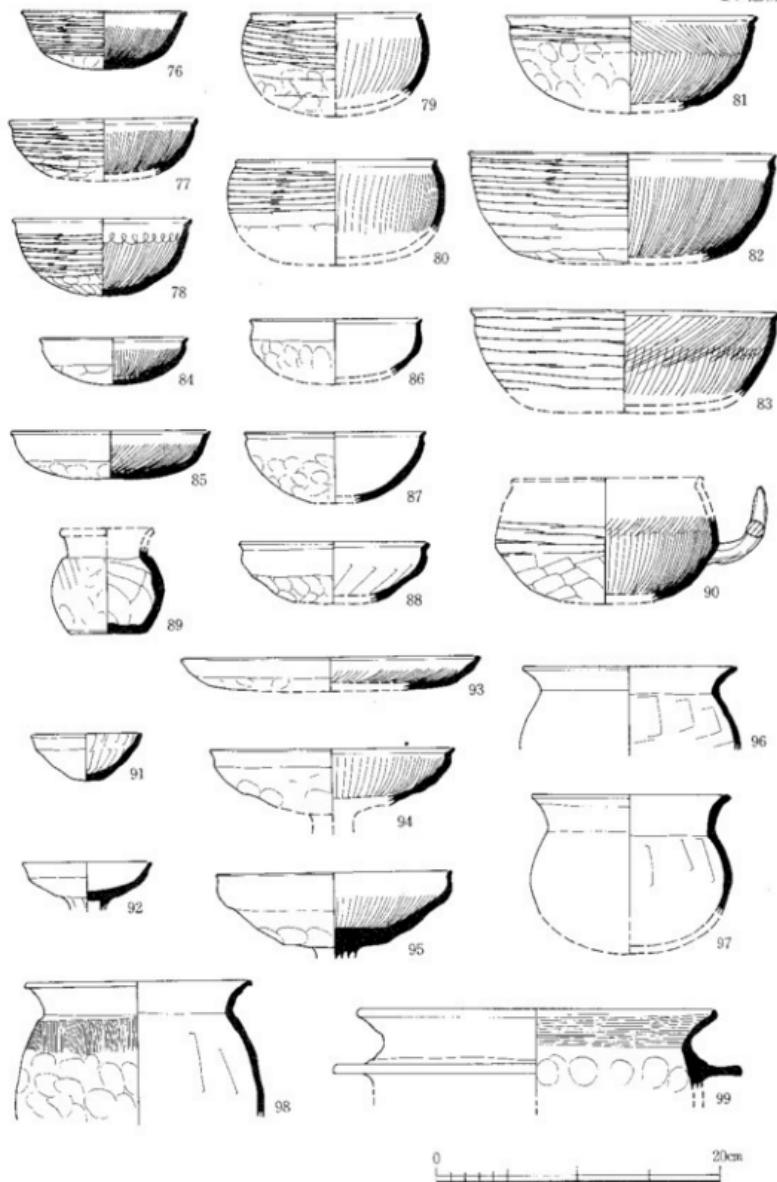


図-23 满-1出土土器①

鉢Aは、く字状に外反した口縁部は、内外面とも横ナデ。外面はナデ、内面は横ハケの後に横ナデ調整。胎土は、砂粒を殆ど含まず。焼成は良好、色調は灰褐色。

甌は、直立する口縁部・体部だけで、外面は縱ハケ、内面には横ナデ調整を施す。口縁端部は平坦な面をなす。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。焼成は良好、色調は橙色。

羽釜Aは、口縁部が外反し外面に横ナデ、内面に横ハケをおこなう。薄い器壁には、突出が3cmほどの鈎がめぐる。内面は、かるい指揮え痕を遺す。胎土は、長石・石英・角閃石・雲母を多く含む、いわゆる生駒西麓産の土器。色調は暗褐色、焼成は良好。

移動式甌は、底面に付属する突起の破片で、甌の左側の部分のものである。突起は、底面より25cmほどであり、焚口部の幅3cmの突帯につらなる。外面は縱ハケ、内面は横ハケ調整。胎土・色調・焼成は、羽釜Aと同様。

小形土器、⑧は手捏ねの壺で、内外面ともナデ。⑨は口径8cm、器高3.5cmで皿状を呈し、外面はナデ、内面は板ナデ調整。⑩は小形高杯の杯部で内外面とも横ナデ。⑪～⑫の胎土は、ほとんど砂粒を含まず。焼成は良好。色調は灰褐色。

●須恵器

器種は、杯H（⑬～⑭）・杯Hの蓋（⑮～⑯）・杯Gの蓋（⑰）・高杯A（⑱）・高杯Aの蓋（⑲）・高杯B（⑳・㉑）・台付長頸壺（㉒・㉓・㉔）・平瓶（㉕・㉖）・提瓶（㉗）・甌（㉘）・横瓶（㉙）・甌（㉚）・器台（㉛・㉜～㉝）・杯（㉞）がある。

杯Hの口縁部は、たちあがりが短く内傾し、受部を水平につまみ出す。底部は、左回りのヘラ削りで器壁を薄くする。外面は横ナデ、内面は横ナデの後に底面に仕上げナデをおこなうものが一般的である。胎土は、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色。焼成は良好。

杯Hの蓋は、天井部と体部の境が不明瞭で丸くなっている。天井部は、左回りのヘラ削り。口縁部は内外面とも横ナデ調整。内面は、底面に当具痕（同心円紋）を遺すもの⑯、仕上げナデをおこなうもの⑰がある。胎土・焼成・色調は、杯Hと同様。杯Gの蓋は、口径10cmで器高は達存高2.6cmあり、深い天井部をもつ。天井部は、ヘラ削りの後に仕上げナデをおこなう。胎土は、0.2cm以内の少量の石英・長石を含む。色調は灰褐色、焼成良好。

高杯Aは、無蓋高杯で杯Hに脚部が付いたもので、他はほとんど同じ特徴を持つ。脚部は、3方に長方形のスカシ孔があり、裾部に段が付く脚部は内外面ともに横ナデ。

高杯Aの蓋は、杯Hの蓋と同形態・同手法で、天井部に扁平なつまみが付く。

高杯Bは、無蓋高杯で脚部に長脚2段スカシ孔を持つ。㉑は、杯部で外面を2条の棱線によって区分し中央部に紋様帶をつくり、列点状の刺突紋を施す。底部は、左回りのヘラ削り。内面は横ナデ調整。㉒は、脚部で凹線によって上・下を区分し、上半部に3方スカシ孔、下半部を裾部としている。調整は内外面とも横ナデ調整。色調は灰褐色。焼成は良好。

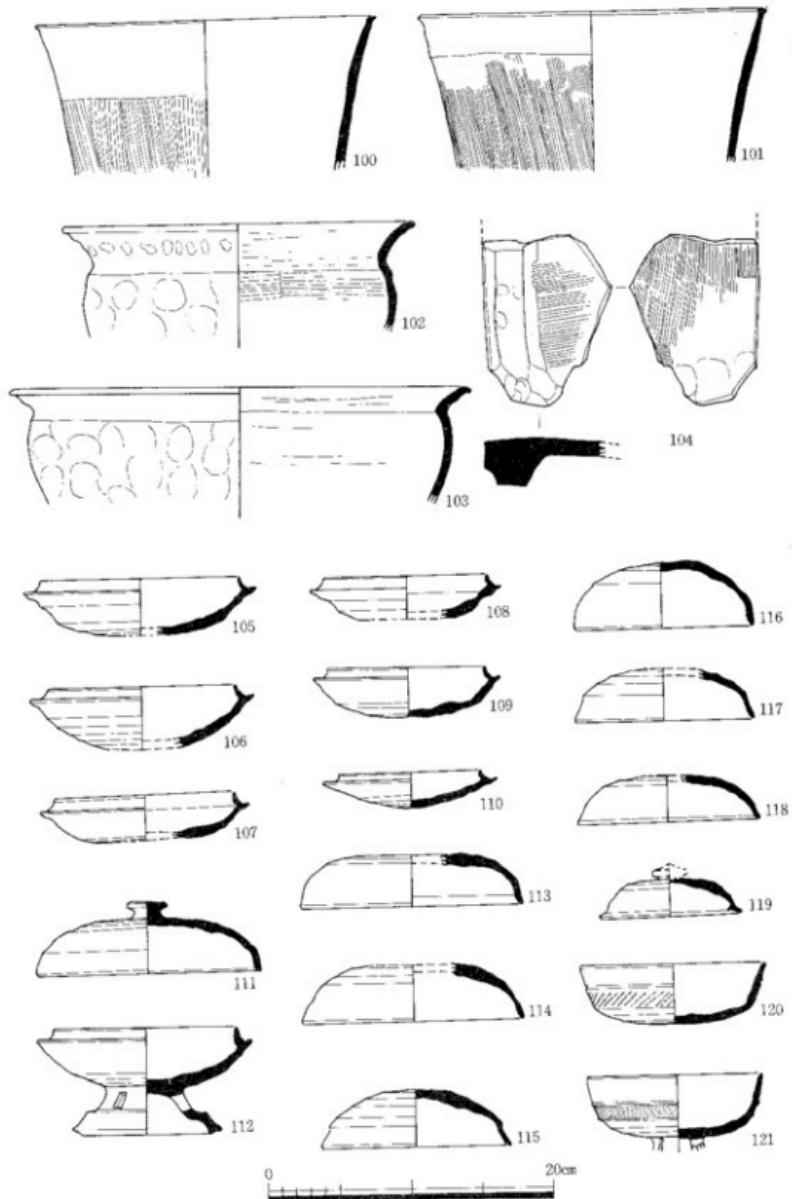


図-24 溝-1 出土土器②

台付長頸壺は、完形品がなく、⑩は口縁部、⑪は脚部、⑫は体部片である。直立しやや外方向へ外反する。内外面は横ナデ。体部は凹線によって大きく区分され、中央部を刺突紋による紋様帶とする。下半部はヘラ削りの後ナデ調整、上半部は横ナデをおこなう。内面は右回りの横ナデ。脚部は、有段となりさらに外方向へ外反させる。内外面は横ナデ。胎土には、0.2 cm以内の石英・長石を含む。焼成は良好。色調は灰褐色。

平瓶は、体部が腰をなすもの⑬と丸くするもの⑭とがある。外面には、⑬がカキ目、⑭には横ナデ調整で底部がヘラ削り。共に内面は、横ナデ。⑩の口縁部は、有段となり直立し、平坦な端部をつくる。胎土は、0.1 cm以内の石英・長石を多く含む。焼成は良好、色調は暗灰色～灰褐色。

堤瓶は、ほぼ完形品で丸く扁平な体部に大きく外反した口縁部がつく。口縁部は、端部を面状におさめ凹線をめぐらす。内外面ともナデ調整。把手は、先端部が下方に向く簡単なものである。胎土・色調・焼成は、平瓶と同様。

甌は、口縁部のみで端部が欠損している。外面は凹線によって区分された紋様帶にはヘラ描き状の櫛状紋を施す。内面はナデ調整。胎土は、0.1 cm以内の石英・長石を含む。色調は青灰色、焼成は良好。

横瓶は、口縁部のみで端部に2段の凸線をめぐらす。内外面は横ナデ、体部内面は、当具痕を遺す。胎土・焼成・色調は、平瓶と同様。

甌は、口縁部片で外面にカキ目、内面ナデ調整をおこなう。

器台は、杯部⑮・⑯と脚部⑰・⑱片があり、完形品はない。⑩は口縁部を直立させ、端部を内・外面に拡張し面をつくる。外面は、凹線を狭んで上・下にカキ目を施す。内面は横ナデ。⑩は、外反した口縁部を再び外方に屈折させる。杯部は、叩き成形で外面に撫子子叩き目、内面に当具痕を遺す。口縁部外面は、カキ目、内面は横ナデ調整。⑰は脚部。凹線で区分された紋様帶に波状紋を施した後に三角形と長方形スカシを3方に穿つ。内面は横ナデ調整。⑯は、脚部で凹線によって6段に区分され、その中に長方形スカシ孔を4方に穿つ。内外面とも横ナデ。脚部は、叩き目痕跡があり、叩き成形によって作られている。胎土は、0.1 cm以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色。焼成は良好。

杯⑮は、高杯Bの杯部と同様の形態であるが脚を持たないものである。

以上、これらの土器の時期は6世紀後半から7世紀初頭にあたるもので、6世紀後半のものには、高杯・横瓶・堤瓶・器台といったような、古墳に副葬される遺物が多い。また、これらの遺物は、後に述べる当満と一つ統きであったと考えられる谷一2内の土器等とともに、寺院造営以前の当地の生活を示す貴重な遺物である。

2. 遺物

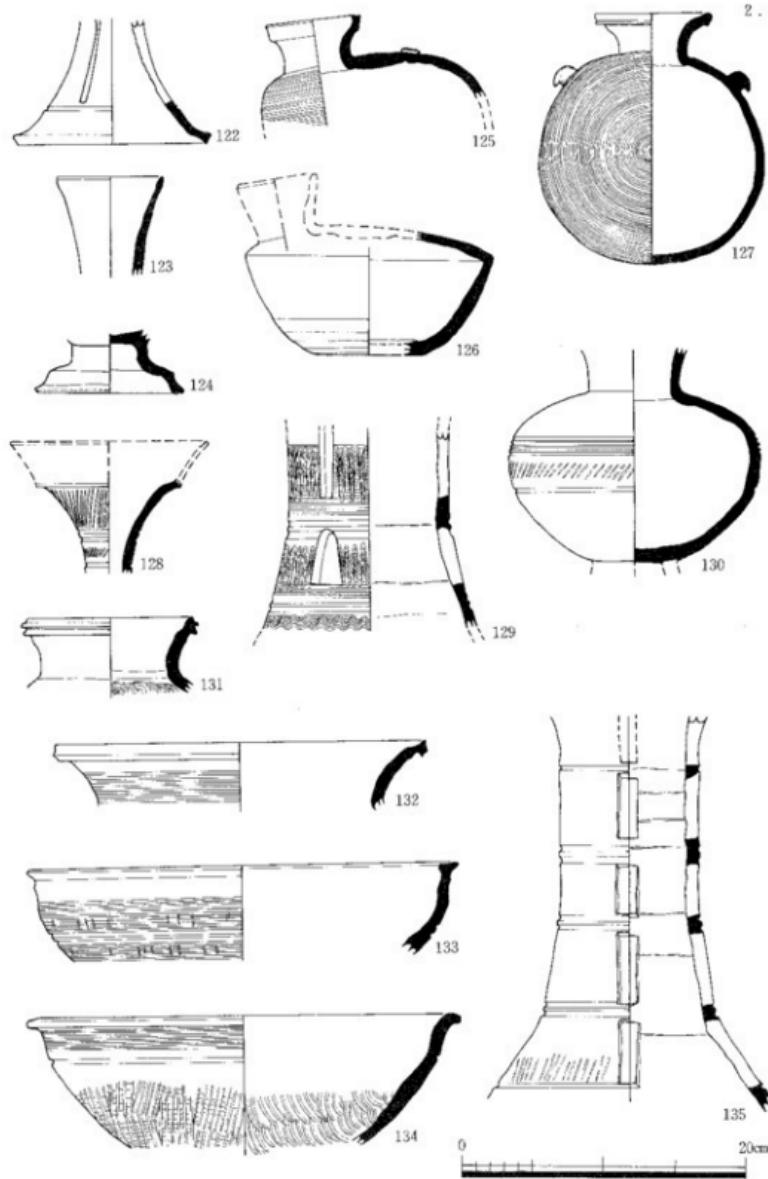


図-25 溝-1 出土土器③

◎土坑-1・2、木炭窯-1、谷-1・2出土土器(図-27・28)

土坑-1から出土したものは、須恵器の杯Gの蓋㊀～㊂、土師器の杯C㊃、高杯A㊄がある。蓋は、縦平な体部に宝珠がつくもので内面のかえりが口縁端部より下がらないもの。天井部は、左回りのヘラ削り、他は横ナデ調整。内面には仕上げナデを施す。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は青灰色、焼成は良好。杯Cは、外面に横ナデ、内面には正方射暗紋を施す。高杯Aは、外面に横ヘラ磨き。内面には正方射暗紋を施す。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。色調は黄灰色、焼成は良好。時期は7世紀中葉。

土坑-2から出土したものは、須恵器の杯B㊅、皿B㊆がある。断面台形状の高台を有する杯で、内外面横ナデ調整。胎土には、砂粒を含まない。色調は灰褐色、焼成は良好。時期は、8世紀代のものである。

木炭窯-1からは、須恵器の杯A㊇、杯H㊈と土師器の杯C㊉がある。杯Aは、直立した口縁部に丸い底部につづく。内外面は横ナデ。底部は右回りのヘラ切り調整。内面の底部は、横ナデの後に仕上げナデ調整。底部には、ヘラ切り痕を留める。内面には凹凸をなくすため仕上げナデをおこなう。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。杯Cの外面は、ナデ、横ナデ調整。内面には斜方射状暗紋を施す。色調は黄灰色、焼成は良好。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。

谷-1出土遺物には土師器の高杯B㊅・杯H㊈・皿A㊉・皿B㊆・甕A㊊・甕B㊋・鉢A㊌、須恵器の杯Bの蓋㊍、甕㊎、製塙土器㊏がある。高杯Bは、脚部を12面カット、裾部に横ヘラ磨きをおこなう。内面は横ヘラ削りで器壁を薄くする。胎土には、砂粒を含まない。色調

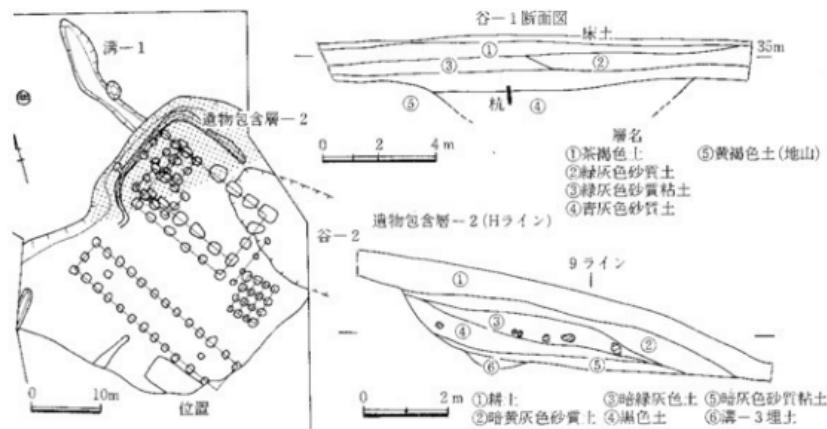


図-26 谷-1・遺物包含層-2 土層断面図

2. 遺物

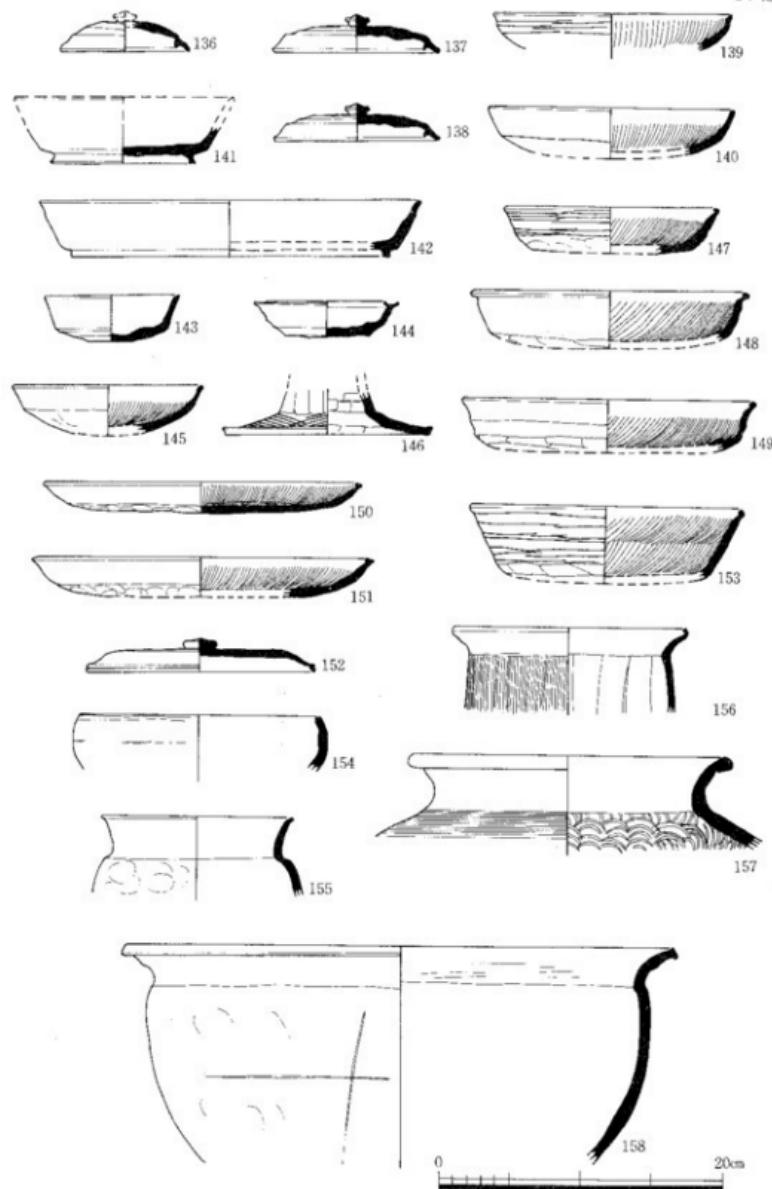


図-27 土坑-1・2、木炭窯-1、谷-1出土遺物

は赤褐色、焼成は良好。杯Aは、外面に横ヘラ磨きのもの⑩・⑪と横ナデのもの⑫・⑬がある。内面は、1段の正方射暗紋のもの⑭～⑯と2段正方射暗紋のもの⑰が認められる。底部はヘラ削り調整⑭・⑮・⑯とナデ調整⑯である。口径の割に器高の高いもの⑰と低いもの⑭～⑯があり、時期的な差と考えられる。色調は黄灰色、焼成は良好。皿Aは、2個とも同手法で外面を横ナデ、内面に螺旋状+斜方射状暗紋を施す。底部は、指搾え痕、木葉痕を留める。色調は黄灰色、焼成は良好。胎土には、砂粒を含まない。甕Aは、く字状口縁で端部を内側に肥厚させる。体部は、ほぼ直立させ外面に継ハケ、内面に継削り調整をおこなう。口縁部は内外面とも横ナデ。色調は橙色、焼成は良好。甕Bは、内外面ともにハケ目調整をおこない、丸い体部に外反した口縁部を持つ。体部外面は指搾え又はナデ、内面はナデ調整。色調は赤褐色、焼成は良好。胎土にはほとんど砂粒を含まない。鉢Aは、く字状に外反し端部を面的におさめる。口縁部・体部外面は、横ナデし「十」のヘラ記号をつける。内面は、ナデと横ナデ調整。色調は橙色、焼成は良好。胎土には、0.2 cm以内の石英・長石を含む。杯Bの蓋は、扁平な宝珠つまみを持ち、器高1.5 cmと低い。口縁部は、直立気味に外反し凹線を施す。外面はナデ、天井部はヘラ切り後、横ナデをおこなう。色調は灰褐色、焼成は良好。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。甕は、口縁をく字状に彎曲させ丸い端部とする。外面は叩きの後カキ目を施す。内面には同心円の当具痕を遺す。色調も青灰色、焼成は良好。胎土には、0.2 cm以内の石英・長石を多く含む。製壠土器は、口径16.4 cmで丸い体部をなし、内外面ともに横ナデ調整。外面には、粘土紐の繼目が明瞭に遺っており、きわめて粗雑な作りである。色調は黄灰色、焼成は良好。胎土には、0.2 cm以内の石英・長石を多く含む。土器の時期は、⑰を除くと7世紀末～8世紀中葉のものである。

谷一2埋土からは、土師器の杯C⑩・⑪、高杯⑯、皿A⑭、須恵器の杯H⑯・蓋⑯が出土した。杯Cは、外面は、横ナデ、横ヘラ磨き、内面は正方射暗紋を施す。底部は指搾えの後にナデ調整。色調は赤褐色、焼成は良好。胎土には、砂粒をほとんど含まない。高杯Aの外面は、横ナデ、内面には正方射状暗紋を施す。色調は赤褐色、焼成は良好。胎土には、砂粒をほとんど含まない。皿Aは、外面横ナデ、内面には正方射状暗紋を施す。底部はナデ調整、色調は赤褐色、焼成は良好。胎土には、0.2 cm以内の少量の砂粒を含む。須恵器の杯身Hは、たちあがりが内傾し、受部が外反する。底部は浅く扁平で、ヘラ削りを施す。内面は横ナデ。蓋は、口縁部と体部との境は丸くなり天井部となる。内外面は横ナデ、天井部はヘラ削り調整。胎土には、共に0.2 cm以内の少量の砂粒を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。これらの土器の年代は全て7世紀前半のもので、2次調査で検出した谷一2'出土土器とほぼ同一時期のものである。7世紀後半にはこの谷が埋められてその上に掘立柱建物一2が建てられている。このことから谷が埋められるのは、7世紀前半～中頃にかけての時期に限定できる。

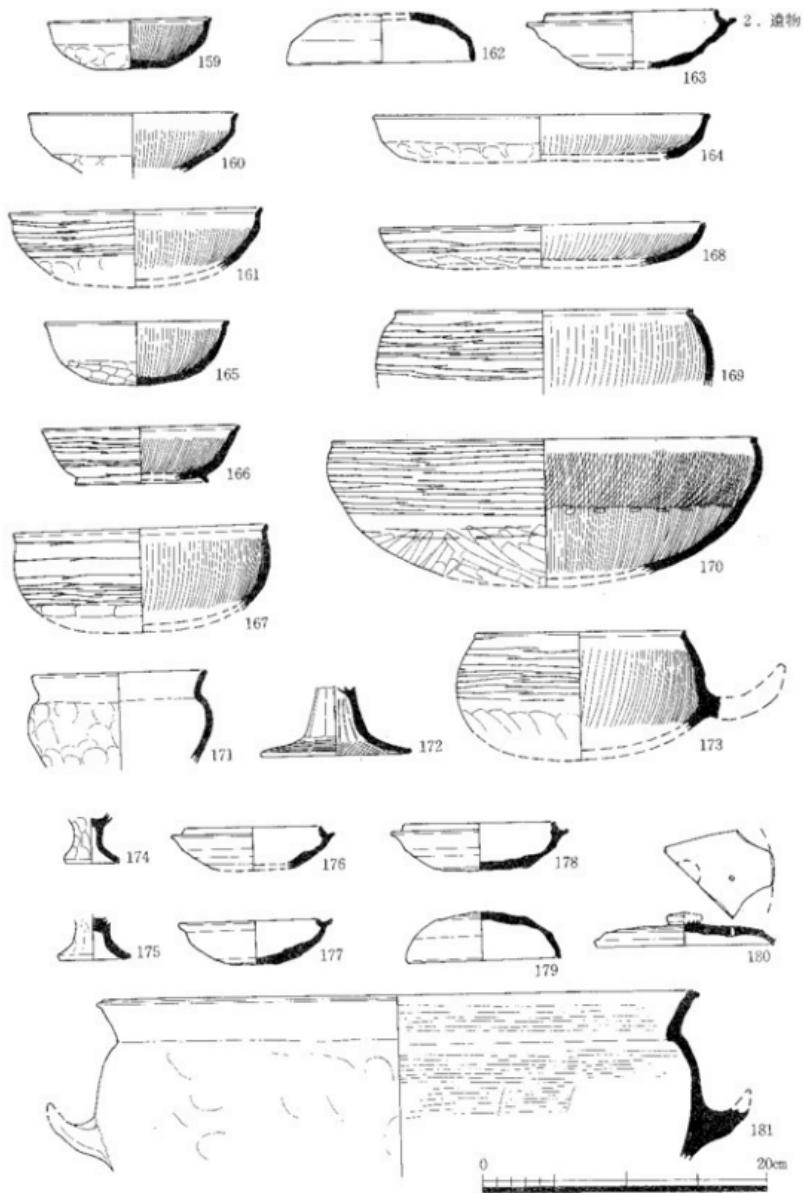


図-28 谷-2、遺物包含層-1出土土器

◎遺物包含層—2出土土器（図一29～35）

土器は、土師器・須恵器・施釉陶器（綠釉・三彩）がコンテナ100箱分出土しており、その大半を土師器が占める。遺物は、7世紀末から8世紀代を中心とするものがほとんどで、それらを器種・器形ごとに分類し順次その特徴を記す。

●土師器

器形は、杯A（⑩～⑯）・杯B（⑯～⑰）・杯G（⑰・⑱）・皿A（⑰～⑲）・皿B（⑲）・蓋A（⑲～⑳）・蓋B（⑳）・高杯B（⑳）・甕A（⑳～㉑）・甕B（㉑～㉒）・甕C（㉑～㉓・㉔）・鉢A（㉑）・鉢B（㉑・㉒・㉓）・鉢C（㉒）・鉢D（㉒～㉓）・壺（㉓）・盤A（㉓）・盤B（㉓・㉔）・羽釜A（㉓～㉔）がある。

杯Aは、外傾する口縁部と平らな底部からなる。口縁端部は内側に巻き込むのが一般的である。外面は、ヘラ磨きのもの⑩～⑯・⑯～⑰とナデ調整のもの⑰～⑲・⑲～㉑がある。内面には、螺旋状+2段方射状暗紋のもの㉑・㉒・㉓・㉔・㉕、螺旋状十方射状+連弧状暗紋のものの㉑・㉒・㉓、螺旋状十斜方射状暗紋のもの㉓～㉔・㉔・㉕～㉖がある。底部は、ヘラ削りのものが主体である。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。色調は赤褐色～黄灰色、焼成は良好。杯Bは、杯Aに断面台形の高台がつくもので、外面はヘラ磨き、内面は螺旋状+斜方射状+連弧状暗紋を施す。胎土・焼成・色調は、杯Aと同様。杯Gは、丸い体部にやや内側に口縁端部をやや肥厚させる。外面はヘラ磨き、内面は横ナデのもの㉑と螺旋状+斜方射状暗紋を施すものの㉓とがある。

皿Aは、平底に内側した口縁部を持ち、端部を内側に肥厚させる。外面はほとんどが横ナデ。内面は、螺旋状十方射状暗紋を施す。底部はナデ調整のものが多い。胎土・焼成・色調は、杯Aと同じ。

蓋Aは、中窪みの扁平なつまみを持ち、口縁部・体部が扁平で内側に肥厚する。外面は、丁寧なヘラ磨き。内面は、螺旋状暗紋を施す。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。焼成は良好。色調は赤褐色。蓋Bは、直立した口縁部に扁平な天井部となり、2条の突帯がめぐる。外面はヘラ磨き、内面は螺旋状暗紋。天井部はヘラ磨き調整。胎土・焼成・色調は、蓋Aと同じ。

高杯Bは、脚部はヘラ削りによって14面カットをおこなう。握部は、ヘラ磨きを丁寧におこなう。杯部外面はヘラ磨き、内面は螺旋状暗紋を施す。胎土は、ほとんど砂粒を含まず。色調は赤褐色、焼成は良好。

甕Aは、く字状に外反する口縁部を持ち、球形の体部となる。外面は、口縁部は横ナデ、他はナデ、指捺え調整。内面は、板ナデ又は、ナデをおこなう。胎土は、0.1cm以内の少量の砂粒を含む。色調は黄灰色～赤褐色、焼成は良好。甕Bは、く字状に外反する口縁部を持ち、端部を上方につまみ上げる。口縁部は、外面を横ナデ、内面は横ハケ又は横ハケをナデ消す手法で

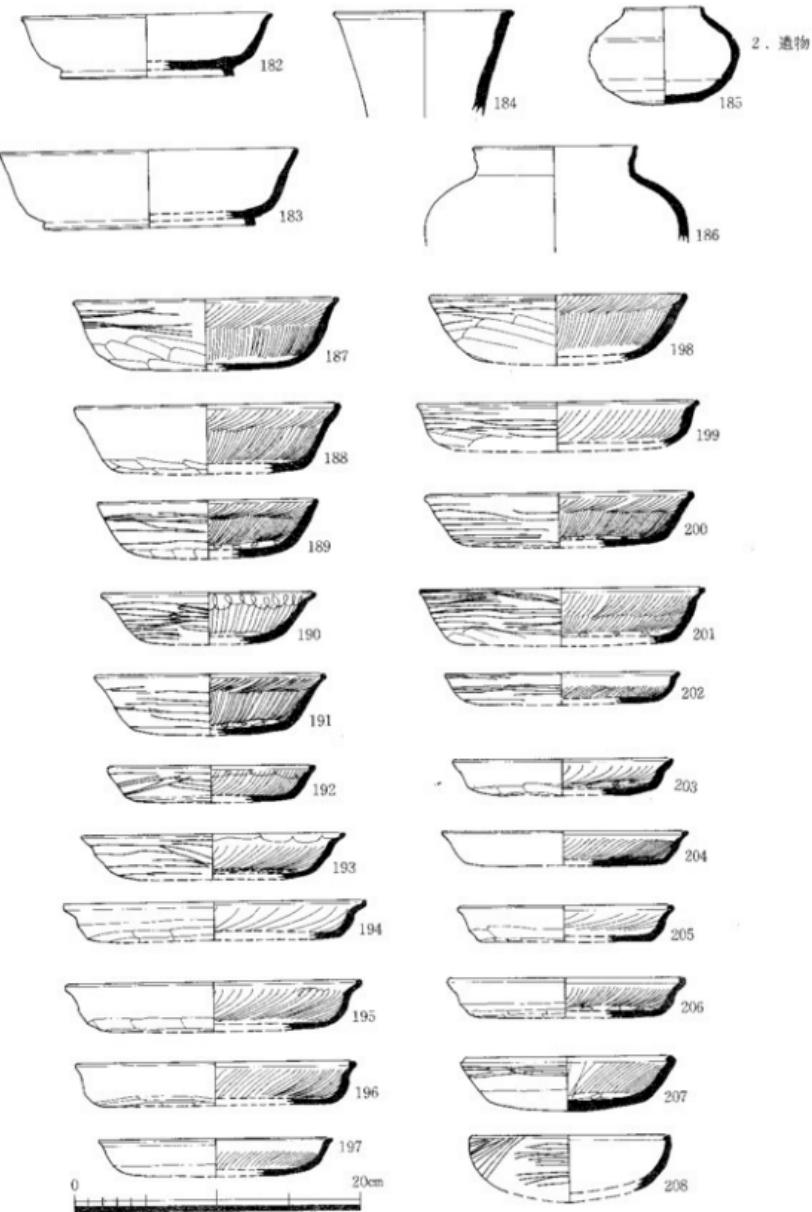


図-29 遺物包含層-1・2出土土器①

2. 遺物

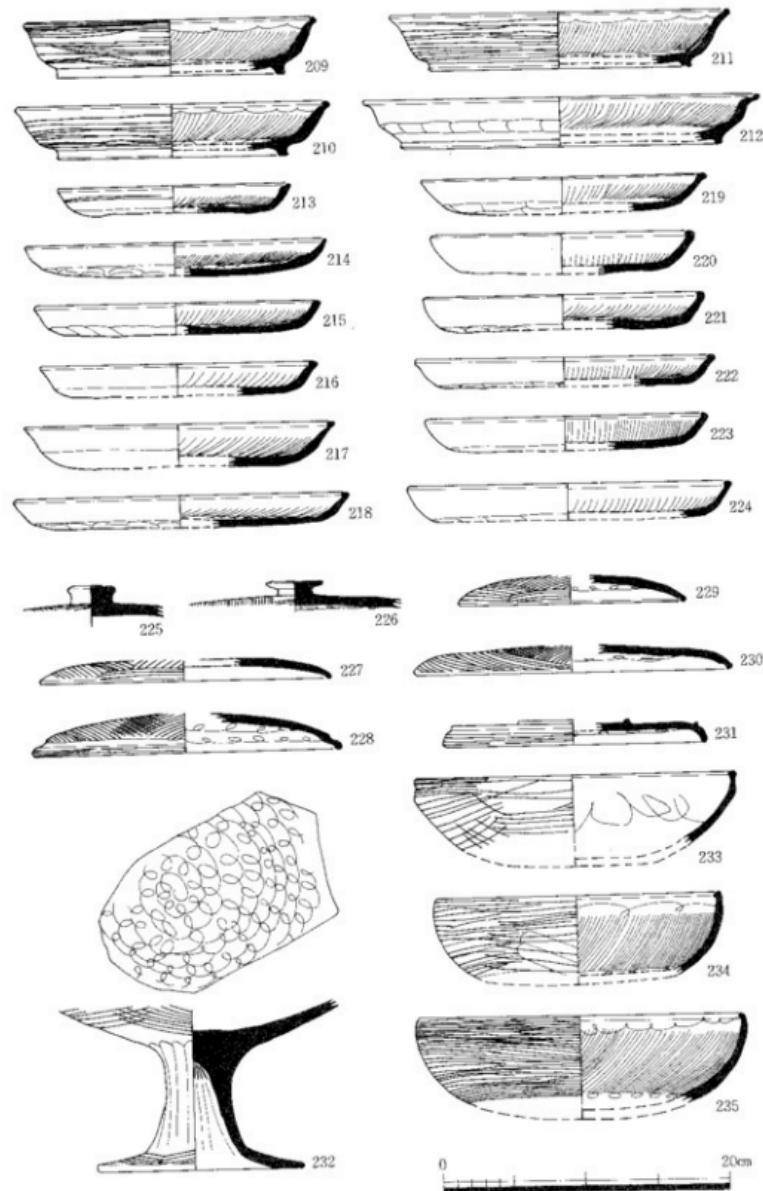


図-30 遺物包含層-2 出土土器②

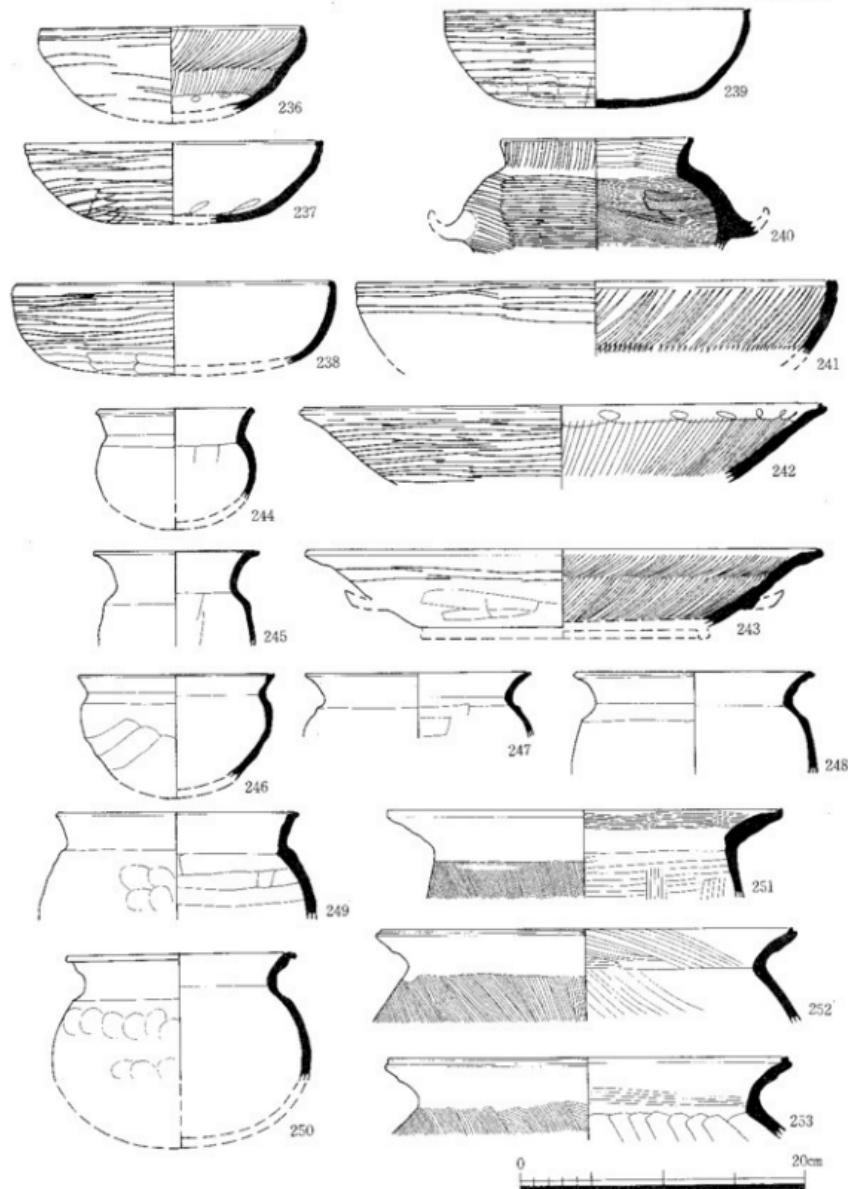


図-31 遺物包含層-2出土土器③

ある。体部は、外面に縦ハケ、内面にヘラ削りをおこない器壁を薄くしている。胎土・焼成・色調は、甕Aと同じ。甕Cは、口径が22~30cmの大形甕で、口縁部をく字状に外反させ端部を内側に肥厚させる。外面は、縦ハケ、内面は横ハケのもの⑩・⑪・⑫とヘラ削りのもの⑬との2種類の手法がある。胎土は、0.2cm以内の少量の石英・長石を含む。色調は黄灰色、焼成は良好。

鉢Aは、く字状に外反した口縁の端部が面をなす。外面は縦ハケ、内面は横ハケの後にヘラ削り調整。胎土は0.2cm以内の石英・長石粒を含む。色調は黄灰色。焼成は良好。鉢Bは、丸い体部にく字状に外反した口縁部が付く、端部は丸くおさめる。⑭は、外面をナデ又は横ナデ、内面は横ハケをナデ消す。⑮・⑯は、外面を指押えの後にヘラ削り、内面はナデ。胎土は、共に0.2cm以内の少量の石英・長石を含む。色調は黄灰色~赤褐色、焼成は良好。鉢Cは、丸い体部に外彎した口縁部が付き端部を丸くおさめる。外面はヘラ磨き、内面はナデ。胎土・焼成・色調は、鉢Aと同じ。鉢Dは、丸く平たい底部に内彎した口縁・体部が付き、口縁端部を内側に肥厚させる。外面はヘラ磨き、内面は螺旋状十方射状+連弧状暗紋を施すもの⑰・⑱、螺旋状暗紋を施すもの⑲・⑳、横ナデ調整のもの㉑・㉒の手法がある。胎土・焼成・色調は、杯Aと同じ。

壺は、体部に1対の把手を持つ短頸壺である。口縁部は、外面に縦ヘラ磨き、内面に横ヘラ磨きを施す。体部は、外面に細かい横ヘラ削り、内面には横ハケをおこなう。把手の接合は、体部内に挿入して貼付ける。胎土・焼成は、杯Aと同じ。

盤Cは、口径36cm前後の大型品で底部に高台を持つ。外面は、ヘラ削り後にヘラ磨き。内面は、2段斜方射状暗紋のもの⑳と斜方射状+連弧状暗紋のもの㉓とがある。体部には、1対の把手があるもの㉔が認められる。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。色調は赤褐色。焼成は良好。

羽釜Aは、口縁部のみ細片で口径26~30cm前後で、かるく外反した口縁端部を丸くおさめる。口縁部の外面は横ナデ、内面はハケをナデ消すものが多い。体部外面は縦ハケ、内面はナデ又は指押え痕を遺す。鉢は、突出高3.5cmで横ナデ調整。胎土は、0.2cm以内の石英・長石・角閃石・雲母を含む。焼成は良好。色調は暗茶褐色。

●須恵器

器形は、杯A (⑩~⑫)・杯B (⑬~⑯)・杯C (⑰・⑱)・杯D (㉑)・杯E (㉒~㉓)・
・杯Bの蓋 (㉔~㉖)・蓋C (㉗)・皿A (㉘・㉙)・皿B (㉚・㉛・㉜)・稜楕 (㉖)・短
頸壺A (㉗)と短頸壺Aの蓋 (㉘)・短頸壺B (㉙)・短頸壺C (㉚)・瓶子 (㉛)・長頸壺
(㉕~㉗・㉙)・鉄鉢 (㉘~㉚)・平瓶 (㉛・㉜)・壺 (㉖)・鉢 (㉗・㉙~㉛)・すり鉢 (㉖)
がある。

2. 遗物

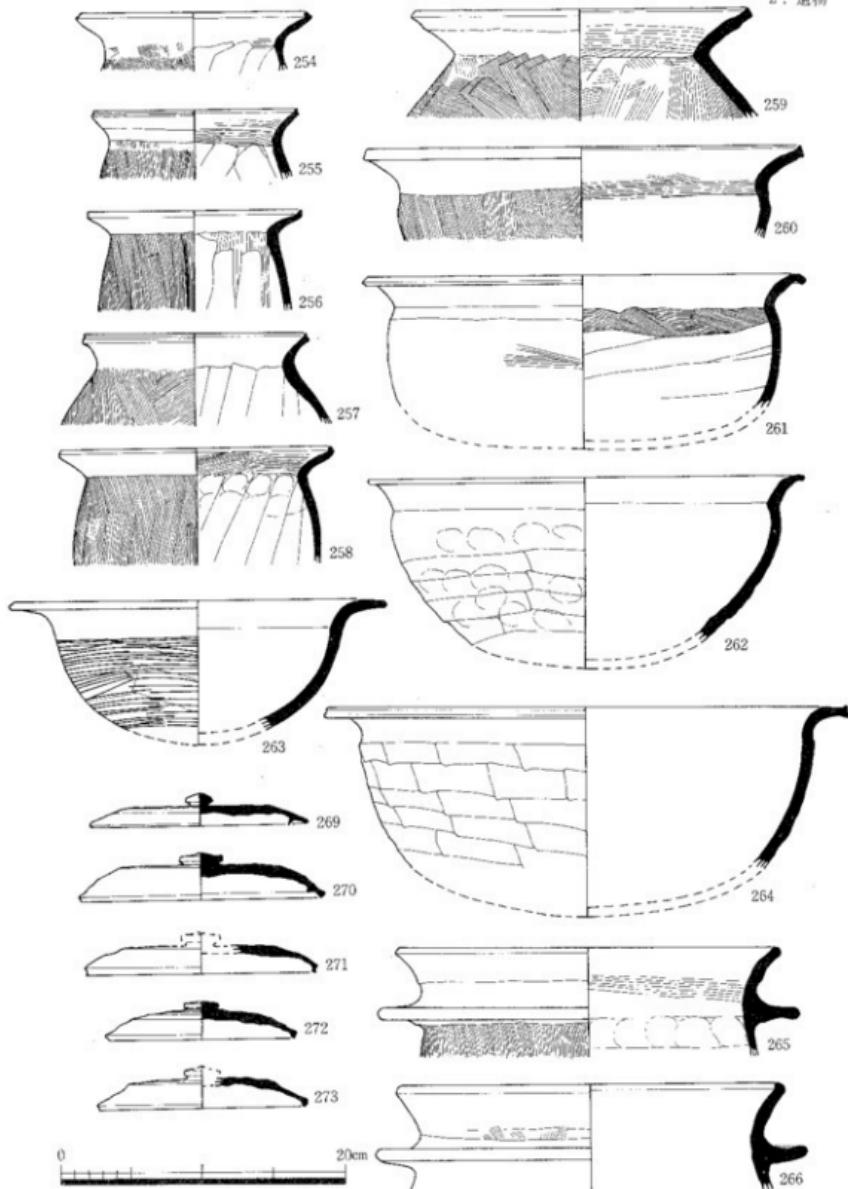


图-32 遗物包含层-2出土土器④

杯Aは、平たい底部に開いた口縁部がたちあがる。口径によって、11cm前後のもの⑩・⑪、13~15cm前後のもの⑫~⑬、19cm前後⑭がある。口縁部内外面は、横ナデ調整。底部は、左回りのヘラ削りをおこなう。胎土は、0.2 cm以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色、青灰色、焼成は良好。杯Bは、杯Aの底部外周に高台をつける器。口径によって11cm前後のもの⑮・⑯、14~16cm前後のもの⑰・⑱・⑲~⑳、18cm前後のもの㉑に分けられる。高台は、断面台形を呈し外方向へふんばる。内外面は、横ナデ。内面の底部に仕上げナデをおこなう。底部は、ヘラ削りの後に高台を付ける。胎土・焼成・色調は、杯Aと同じ。杯Cは、土師器の杯Aを模倣したもので口縁端部を内側に巻き込む。内外面は横ナデ、底部は左回りのヘラ削り調整。胎土、焼成・色調は、杯Aと同様。杯Dは、体部が半椀状を呈し口縁端部を丸くおさめる。体部外面はヘラ磨き、内面は横ナデ調整の丁寧な作りである。胎土は、砂粒を含まず。焼成は良好。色調は灰褐色。杯Eは、平たい底に開いた口縁部がたちあがり、端部を外側へ屈折させる。内外面は横ナデ、底部は左回りヘラ切りをおこなう。胎土は、ほとんど砂粒を含まず。色調は灰褐色。焼成は良好。

杯Bの蓋は、扁平な頂部の中心につまみをつけ縁端部が短く直立する。直径によって、13cm前後のもの㉒、15~17cm前後のもの㉓~㉔・㉕~㉖、18~19cm前後のもの㉗・㉘がある。それらは、口縁部の形態によって3種類が認められる。1. 口縁部にかえりを有するもの㉒・㉔、2. 口縁端部を下方に直立させるもの㉓~㉔、3. 口縁部を1度上に屈曲させ、再び端部を外反させるもの㉕・㉖等の特徴をもつものがあり、1が7世紀末、2が8世紀前半、3が8世紀後半の時期に位置づけられる。口縁部、体部内外面は横ナデ、天井部は左回りのヘラ削りをおこなう。胎土は0.2 cm以内の少量の砂粒を含む。色調は灰褐色、青灰色。焼成は良好。蓋Cは、平たい天井部にほぼ直立した口縁部がつく。内外面は、横ナデ、天井部は左回りのヘラ削り調整。胎土・色調・焼成は、蓋Bと同じ。

皿Aは、平らな底に短い口縁がつく。口径は22~23.5cmで器高3 cm前後である。内外面は横ナデ、底部は、左回りのヘラ削りをおこなう。胎土は、0.1 cm以内の少量の長石・石英を含む。焼成は良好。色調は灰白色、青灰色。皿Bは、皿Aの外周に高台をつける。内外面は横ナデ、底部は、左回りのヘラ削りの後に高台をつける。胎土・焼成・色調は、皿Aと同じ。

棱橢は、口径14.5cm、器高5 cmで、体部にかるい段をなす。体部下半は左回りのヘラ削りによって段をつける。他は横ナデ調整。高台は、断面台形をなし突出高0.8 cmを測る。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。色調は灰白色。焼成は良好。

短頸壺Aは、短い広口の口縁部をもつ扁平な体部に高台をつけたもので、底部をヘラ切りする。内外面は横ナデ。短頸壺Aの蓋は、口径8 cmで口縁部が直立し扁平な天井部となる。調整は内外面とも横ナデ。短頸壺Bは、短い広口の口縁部に肩部が稜角をなす体部をもつ。調整は左回りの横ナデ。短頸壺A・Bは、胎土・色調・焼成は、杯Aと同じ。短頸壺Cは、肩部が張

2. 遺物

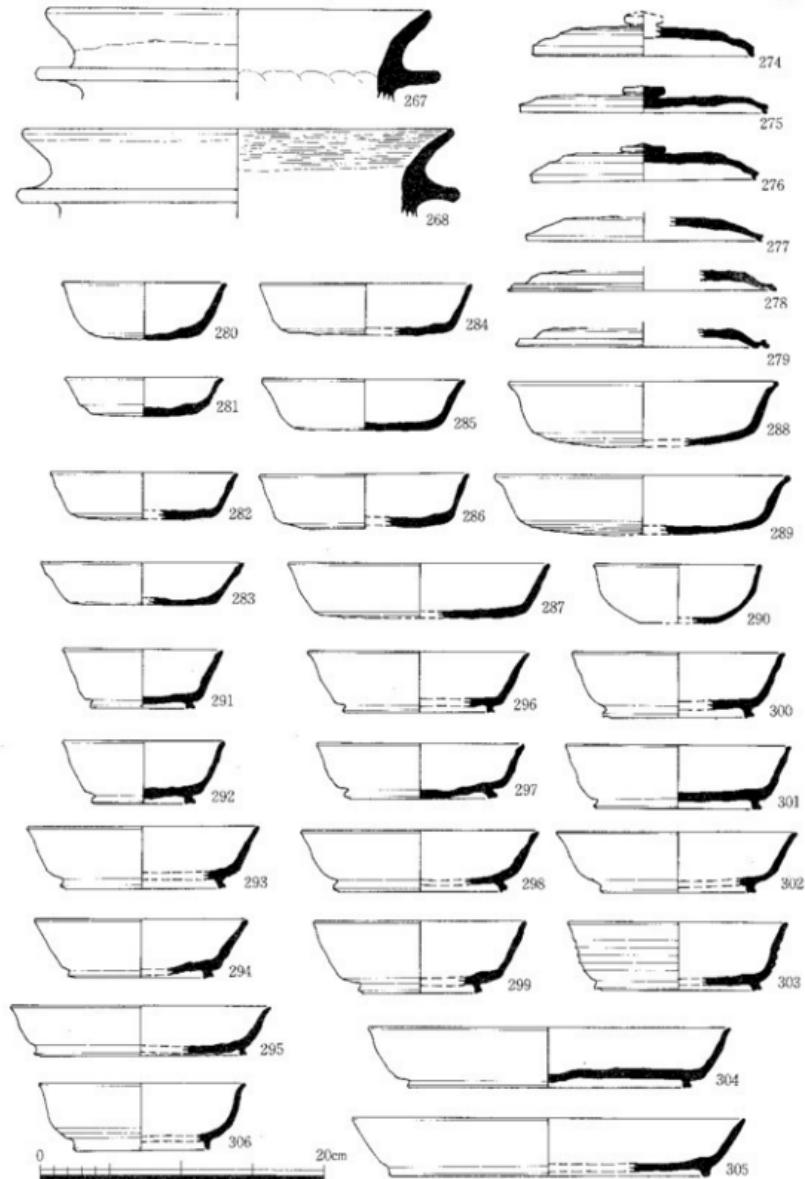


図-33 遺物包含層-2 出土土器(5)

り稜角をなす低い体部に、断面台形を呈す高台がつく。内外面は横ナデ。長頸壺は、細長い口縁部と肩部が張り稜角を呈する体部からなり、平底で高台を有する。瓶は、断面台形を呈する高台に胴長の体部がつく。底部はヘラ切りの後に高台をつける。他は横ナデ。

鉢は、内彌する口縁からなるいわゆる鉢形の器で、底部は平たく丸い。口縁部から下をヘラ削りで調整し、器の外面を横ナデ。胎土は、砂粒を含まない。色調は灰白色、青灰色。焼成は良好。

平瓶は、扁平な平底の体部背面に、広口の口縁部と逆U字形の把手を付す。いずれも体部背面中央の開口部を円板で塞いだ後、中心をはずした部分に円孔を切り、注口をつけるものである。底部は未調整、体部は横ナデを施す。胎土は、0.1cm以内の少量の石英・長石を含む。色調は灰褐色～灰白色。焼成は良好。

甕は、く字状に外反した口縁部を面状におさめる。内外面とも横ナデ。胎土は0.2cm以内の少量の砂粒を含む。色調は青灰色、焼成は良好。

鉢は、外反する短い口縁部を上位で肩の張る体部からなる。底部は平底であるが高台をつくるもの⑩・⑪とつけないものがある。高台は、台形で端面は外傾する。内外面は、横ナデや叩き目調整をおこない、下半部にヘラ削りをおこなう。胎土は、0.2cm以内の石英・長石粒を多く含む。色調は青灰色、灰褐色。焼成は良好。

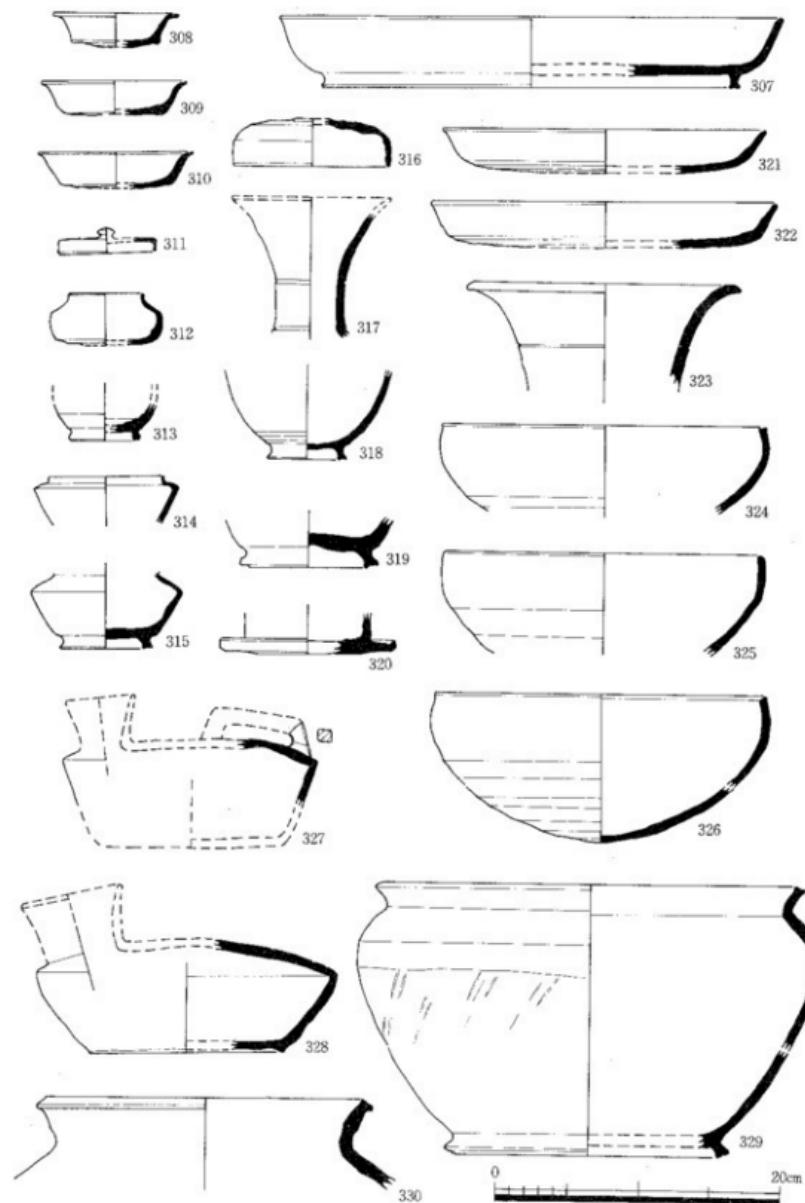
すり鉢は、直径12.5cmの円盤に直立した体部を接合する。内外面とも横ナデ調整。胎土は、0.1cm以内の少量の石英・長石粒を含む。色調は青灰色。焼成は良好。

これらの土器は、藤原宮跡・平城宮址から出土するものと同じで、平城宮編年の第Ⅰ～V期のものが含まれており7世紀末から8世紀後半代のものが多い。

◎遺物包含層一出土土器（図-28・29・35）

1次調査区内の各地区から出土したものでコンテナ40箱分ある。その内で20個体を図示した。器種は、土師器の杯C（⑩・⑪）、杯E（⑫）、杯B（⑬）、皿A（⑭）、把手付椀（⑮）、鉢E（⑯）、甕A（⑰）、高杯B（⑲）、鉢A（⑳）、小形土器（㉑・㉒）と須恵器の杯H（㉓～㉔）、杯Hの蓋（㉕）、杯Bの蓋（㉖）、杯B（㉗・㉘）、平瓶（㉙）、短頸壺A（㉚・㉛）がある。

●土師器　杯Cは、外面を横ナデするもの⑩とヘラ磨きのもの⑪があるが、内面は共に方射状暗紋を施す。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。色調は赤褐色、焼成良好。杯Eは、口縁・体部が彌曲するもので、外面にヘラ磨き、内面に方射状暗紋を施す。胎土・色調・焼成は杯Cと同じ。杯Bは、断面三角形を呈する高台を有する杯で、外面にヘラ磨き、内面に螺旋状十方射状暗紋を施す。皿Aは、口径23cmの皿で、外面にヘラ磨き、内面に方射状暗紋を施す。底部はヘラ削り。把手付椀は、杯Eに把手のついたもので、外面にヘラ磨き、内面に方射状暗紋を



圖—34 遺物包含層—2 出土土器⑥

施す。底部はヘラ削り。杯B・皿A・把手付椀は、色調・焼成・胎土は杯Cと同様である。鉢Eは、口径29.5cmの大形のもので、外面にヘラ磨き、内面に斜方射状+連弧状+大方射状暗紋を交差させる。底部はヘラ削り。色調は赤褐色、焼成良好。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。甕Aは、く字状に外反する口縁を持つ甕で、体部外面に軽い指押えを施す。内面はナデ調整。高杯Bは、外面を12面カットし、内面に絞り目を造す。縁部は外面ヘラ磨き。内面には8本/cmの布目痕を造す。色調・焼成・胎土は、鉢Eと同じ。鍋Aは、く字状に外反する口縁部の端面を凹状にする。体部外面に1対の把手を有し、内面は横ハケをナデ消す。胎土には、0.3cm以内の石英・長石・クサリ礫を含む。焼成良好。小形土器は、共に高杯で、内外面と指押えをおこなう。色調・焼成・胎土は、鉢Aと同じ。

●須恵器 杯Hは、口径9~10cmの小形の杯で、内傾した短いたちあがりを有し、受部は外方へのびる。外面は横ナデ、内面は横ナデの後一部仕上げナデ。底部は左回りのヘラ削りをおこなう。色調は青灰色、焼成良好。胎土には、0.2cm以内の少量の石英・長石を含む。杯Hの蓋は、体部と天井部の境が不明瞭で丸くなる。内外面は横ナデ調整。天井部は左回りのヘラ削り。色調は青灰色、焼成良好。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。杯Bの蓋は、口径8.5cmで扁平な天井部に1孔の穴をあける。内面は横ナデ調査。底部はヘラ削り調整。杯Bは、断面台形の高台に外方向へ開いた口縁部がつく。内外面は横ナデ調整。底部はヘラ削り調整。色調は灰褐色、焼成良好。胎土には、0.2cm以内の少量の砂粒を含む。平瓶は、口縁部のみで外上方へ開いた口縁端部を平坦におさめる。内外面とも横ナデ。胎土はほとんど砂粒を含まず。

◎中世の土器（図-35）

鎌倉時代の土器は、全て遺物包含層に混入していたもので、1次調査区上段部に集中する。土器は、土師器⑩、須恵器⑪、瓦器⑫・⑬・⑭~⑯、磁器⑰~⑲がある。⑩は土師器の皿で、内外面は横ナデ、底部は指押え痕を造す。色調は橙色、焼成は良好。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。⑪は須恵器の鉢で、内外面とも横ナデ調整。口縁部は上方につまみあげ端面は直立する。色調は灰褐色、焼成は良好。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。⑫は、瓦器の皿で内外面は横ナデ、底部には指押えを施す。⑬~⑯は瓦器の椀で、外面に横ヘラ磨きを施すもの⑬・⑭とナデ調整のもの⑮がある。内面は横ヘラ磨きで、底面に斜格子状暗紋を施すもの⑯がある。高台は3個体とも断面三角形を呈する。色調は黒灰色、焼成は良好。胎土には、ほとんど砂粒を含まない。時期は12世紀代のものと考えられる。磁器は、楕⑰~⑲、水注⑳と㉑が青磁で他は白磁である。⑰は、高台が台形状を呈し、体部と口縁部の境が丸くなっている。㉑は、高台を削り出し、突出した平底状をしている。内面には、一条の凹線がめぐる。㉒は、高台幅0.4cm前後で、1cmほど突出している。㉓の注口は、直径2cm、残存長4.5cmを測る。これらの磁器の胎土は、灰色の良質粘土を用いている。

2. 遺物

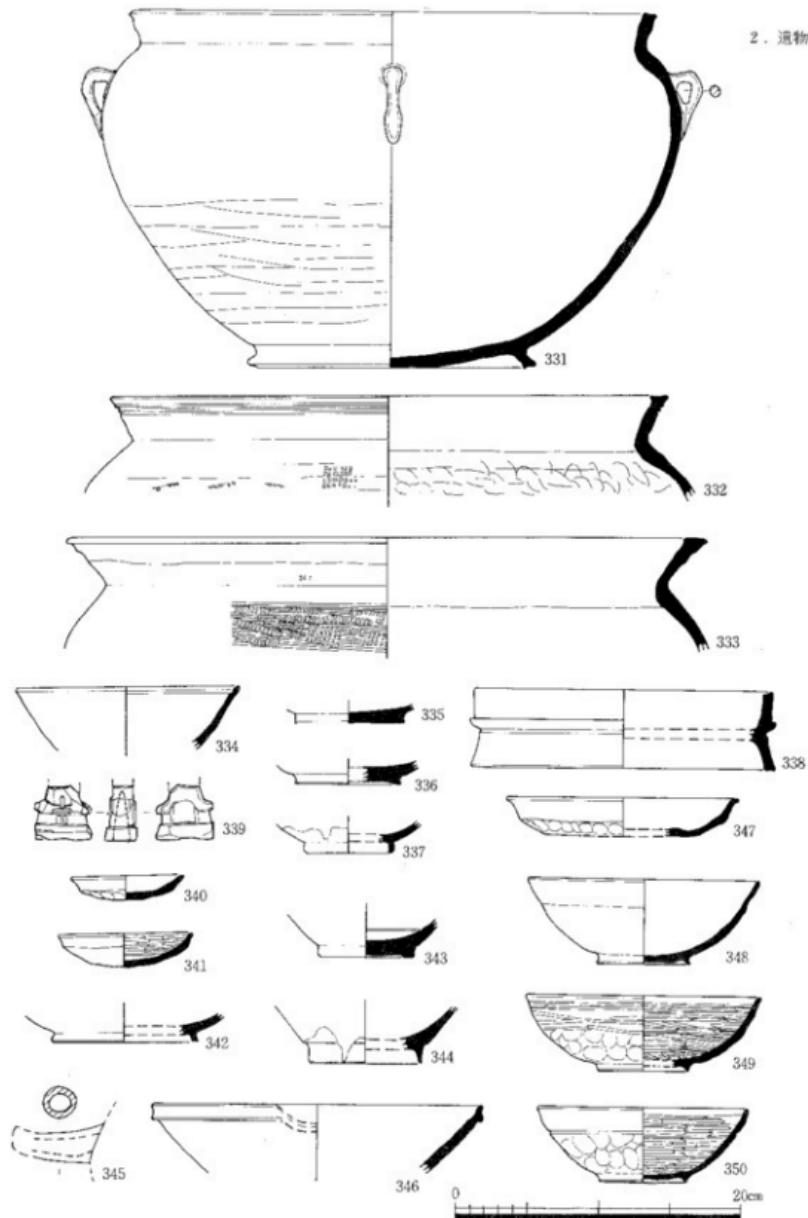


図-35 遺物包含層-1・2出土土器

◎谷—2'内出土遺物 1次調査区と2次調査区に広がる谷—2'の埋土は、大きく下層・上層・集石造構上層に分けることができる。以下、谷—2'下層出土土器から順次記述する。

● 谷—2'下層遺物

● 土師器 器種には杯A@・@、杯C@～@、鉢D@～@、壺@、小形高杯@、高杯@、甕B@、甕C@、把手付鉢@の他に移動式甕や、甑等がある。

杯Aは、口縁端部に内傾する面を有するもので、体部は底部より直線気味に立ちあがる。外側はヘラ磨き調整、内面には斜方射状十方射状暗紋@、斜方射状十螺旋状十方射状暗紋@を施すものがある。杯Cは、底部より内側気味に体部が立ちあがり、口縁端部を軽く外方へつまみ出すものである。外面は横ナデ、内面は、横ナデ調整のもの@・@、方射状暗紋のもの@、不規則な斜方射状十方射状暗紋のもの@等がある。鉢Dは、球形の体部に内側する口縁部が続くもので口縁端部を軽く上方へ曲げるもの@・@と丸くおさめるもの@がある。両者は口径及び、調整にも差が見られる。@・@の外面はヘラ磨き、内面には方射状暗紋を施す。@の外面はヘラ磨き、内面には、斜方射状十方射状暗紋を施す。小形高杯は手捏ねである。高杯は、杯部のみで、杯部が外方へ大きく広がるものである。外面には縦ハケ目が遺る。内面には、横十方射状暗紋を施す。甕Bは、口縁端部が上方へ短くあがるもので体部外面には縦ハケ目、内面にはヘラ削りを、また口縁部外面は横ナデ、内面にはハケ目を遺す。甕Cは、球形の体部にくの字状に広く口縁部が続くもので、口縁端部は面を有する。体部外面には指押えが見られる。把手付鉢は平底で、樽形をしており体部中央に角状把手がつく。内面にはヘラ削りを施す。

● 須恵器 器種には、杯蓋H@～@、杯身H@～@、高杯@、甕@等がある。

杯蓋Hは、天井部と体部との境は明瞭ではなく、丸味をおびている。口径 13 cm前後の大形のものと、10 cm前後の小形のものがある。杯身Hは、約 1 cmの低い立ちあがりを有するもので、口縁端部は丸くおさめる。高杯は、杯身Hに脚部がついたものである。甕は、口縁部が短く直立し、端部は下方へ屈曲する。体部外面にはカキ目、口縁部外面には縦ハケ目をとどめている。以上、これらの土器は、6世紀末から7世紀前半に位置づけられるものである。また土器の他に、獸骨や木材等も多量に出土した。

● 谷—2'上層遺物 (図-37)

● 土師器 器種には、杯A@、杯C@、皿A@、小形高杯@、高杯B@等がある。

杯Aは、底部より直線気味に外傾する体部を有するもので口縁端部は軽く内側に巻き込む。内面には斜方射状十螺旋状十方射状暗紋を施す。杯Cは、口縁端部を軽く内側に巻き込むもので、内面には方射状暗紋を施す。皿Aは、口縁端部を丸くおさめる。外面はヘラ磨き、内面には斜方射状十方射状暗紋を施す。小形高杯は手捏ねで、杯部は丁寧に仕上げる。高杯Bは、脚部を10面カットするものである。

● 須恵器 器種には、杯蓋@・@、杯身A@、杯身B@、短頸壺@等がある。

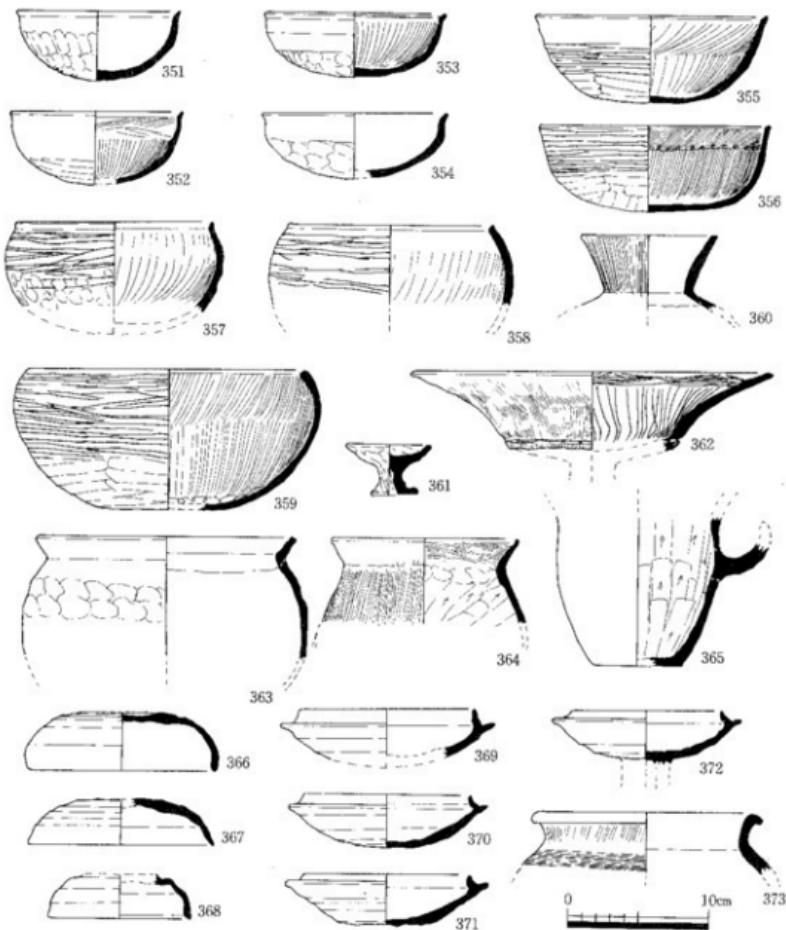


図-36 谷-2'下層出土土器

杯蓋は、内面に返りを有するもので、⑩では、大井部に宝珠形つまみが造っている。杯身Aは、平らな底部から直線的に立ちあがる体部を有するもので、やや深めである。杯身Bは、外方を大きくつぶった高い高台を有するものである。短頸壺は、肩部に凹線がめぐるもので、口縁端部は丸く仕上げる。以上、谷上層遺物の時期は7世紀後半から末にかけてのものと考えられる。

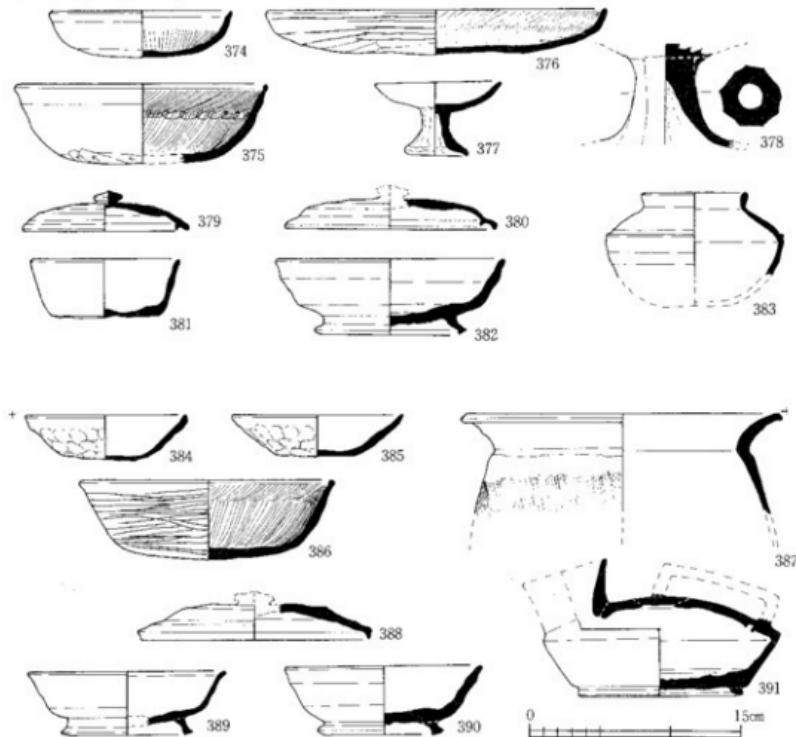


図-37 谷一'上層・集石造構出土遺物

◎集石造構上面土器（図-37）

- 土師器 器種には、杯身A⑧、椀A⑨・⑩、壺C⑫等がある。

杯身Aは、口縁端部が内側に巻き込むもので、外面はヘラ磨き、内面には斜方射状十方射状暗紋を施す。椀Aは、平底で、体部は大きく外方に広く。体部外面には明瞭な指押えが遺る。壺Cは、口縁部が外縁気味に聞くもので体部外面には縦ハケを施す。口縁部内外面は横ナデ。

- 須恵器 器種には、杯蓋⑪、杯身B⑬・⑭、平瓶⑮等がある。

杯蓋は、かえりが消失したので、口縁端部が短かく下方へたれきがる。杯身Bは、ともに高くてしっかりした高台を有するものである。⑬の杯部は非常に薄手であるのに対し⑭は非常に厚手のものである。平瓶は、低い高台を有するもので、上面には緑色の自然釉が付着している。胎土は非常に精良である。これらの遺物は、8世紀から9世紀代のものである。このことから集石造構がこの時期に存在していたことが窺える。

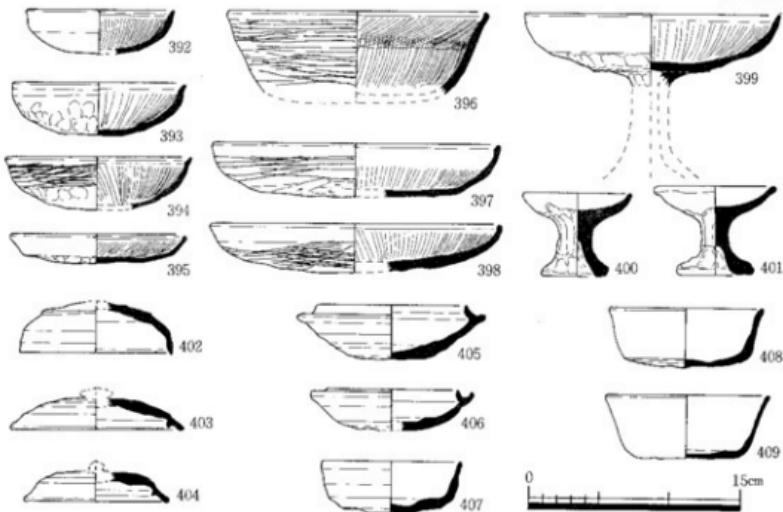


図-38 E地区炭層内出土遺物

◎炭層内出土土器 この炭層は、E地区の建物が建てられていた面に広がっていたものである。

●土師器 杯A@は、体部は直線気味に外傾し、口縁端部は内側に軽く巻き込む。外面ヘラ磨き、内面には斜方射状+螺旋状+方射状暗紋を施す。杯C@は、体部は内彎気味に立ちあがり口縁端部内傾面には段を有する。外面ヘラ磨き、内面には方射状暗紋、見込み部に螺旋状暗紋を施す。杯D@・@は、器形は杯Cと同様。外面体部は横ナデ、内面には方射状暗紋を施す。皿A@・@は、口径約20.4cmで、体部は内彎気味にたちあがる。@では口縁端部を内側に軽く巻き込む。外面体部はヘラ磨き、底部は削り。内面には方射状暗紋を施す。皿C@は、口径12.2cmと小形で体部は直線気味に外傾する。口縁端部は内側に軽く巻き込む。体部外面横ナデ、内面には、斜方射状+方射状暗紋、見込み部には螺旋状暗紋を施す。高杯A@は、口径17.8cmで、体部は内彎気味に立ちあがる。底部及び脚部接合部に指押え。内面には方射状暗紋を施す。小形高杯@・@は、ともに手捏ねで、杯部には、丁寧なナデを施す。

●須恵器 杯H@・@は、低い立ちあがりを有するもので、@の受部は短かくたちあがる。杯Hの蓋@は、天井部に、ヘラ削りの痕跡を遺す。杯G@は、体部が底部より、やや外傾気味にたちあがる。杯Gの蓋@・@は、内面に短いかえりを有する。@の天井部は扁平であるが、@のそれは、丸みをおびる。杯A@・@は、体部は、やや外彎気味に立ちあがる。器高は約4cmと高い。体部内外面には丁寧な横ナデを施す。以上の他に、土師器では、甕、鍋、甑、移動式竈等、須恵器では、甕等が出土している。時期は、7世紀中頃から末にかけてのものと考えられる。整地層は、この炭層のうえに積みあげられている。

◎E地区整地層内土器① (図-39)

2次調査区E地区で検出した整地層内には多量の土器が混入していた。特に調査区東端では、一括して埋められたと考えられる状態で検出したものもある。ここでは、これらの資料を先に紹介する。

- 土師器 器種には、杯A⑩・⑪、杯C⑫、杯D⑬・⑭、鉢E⑮、皿A⑯・⑰、甕A⑲、甕B⑳、羽釜㉑、移動式甕㉒等がある。

杯Aは、口縁端部を軽く内側に巻き込むもので、外面はヘラ磨き、内面には、斜方射状+螺旋状十方射状暗紋を施すもの⑩と、斜方射状+横線十方射状暗紋を施すものがある。杯Cは、口縁端部を丸くおさめるもので、外面、ヘラ磨き、内面には斜方射状十方射状暗紋を施す。杯Dには、口縁端部を内側に軽く巻くもの⑪と、丸くおさめるもの⑫がある、ともに外面横ナデ、内面には、方射状暗紋を施す。鉢Dは、口縁端部が短く直立するもので、外面はヘラ磨き、内面には、斜方射状十方射状暗紋を施す。また見込みには螺旋状暗紋を施す。皿Aは、口縁端部を丸くおさめるもの⑯、内側に巻き込むもの⑰がある。⑯外面は横ナデ、⑰はヘラ磨き。内面は⑯が斜方射状暗紋、⑰は方射状暗紋。甕Aは、完形で球形の体部に外反する口縁部が続く。体部外面は指押え、内面はヘラ削り、口縁部は横ナデ調整。甕Bは、口縁端部を上方へつまみあげるもので、体部外面には縦ハケ、内面にはヘラ削りを、又口縁部外面は横ナデ、内面には横ハケ目を施す。羽釜は貼り付けの鉢を有するもので、体部外面には縦ハケ、内面には指押えを施す。口縁部外面は横ナデ、内面は横ハケである。移動式甕は、從来知られていない無底となるもので、釜が乗る縁はヘラ削り調整、焚口になる縁はナデ調整。羽釜・甕とともに胎土に雲母、角閃石を含み、暗茶褐色を呈する。

- 須恵器 器種には、杯蓋㉓～㉔、杯身H㉕、杯身A㉖・㉗、高杯㉘、すり鉢㉙・㉚、壺㉛、甕㉜等がある。

杯蓋は内面に短かい返りを有するもので、口縁端部より下方へ下がらない。㉓には、形のくずれた宝珠形つまみが遺っている。杯身Hは、短かい立ちあがりを有するものである。杯身Aは、平底で、内縁気味に立ちあがる体部を有する㉔と、体部上半が外方へ大きく開くもの㉗がある。高杯は長脚で、スカシは無い体部には列点紋がめぐる。脚部には、凹線が3本めぐっている。すり鉢は、円形のしっかりした台を有するもので体部は外方上へ大きく開く、又体部には凹線が施される。㉙には、底部に径2mmの焼成前穿孔が施されている。壺は、長頸壺の体部で、肩部に2本の凹線がめぐる。頸は直立気味に立ちあがる。頸部にも2本の凹線がめぐる。甕は、球形の体部に外反する口縁部が続くもので、口縁端部は、やや下方へ短かくつまみ出す。体部外面は平行叩き目、内面には同心円紋压痕が遺る。この甕は、径約50cm大的の石の下でまとまって出土したものである。今回は図示し得なかったが、完形に復元できるものである。以上これらの一括資料は、6世紀末から7世紀末までのものを含み込んでいるものであるが、完形

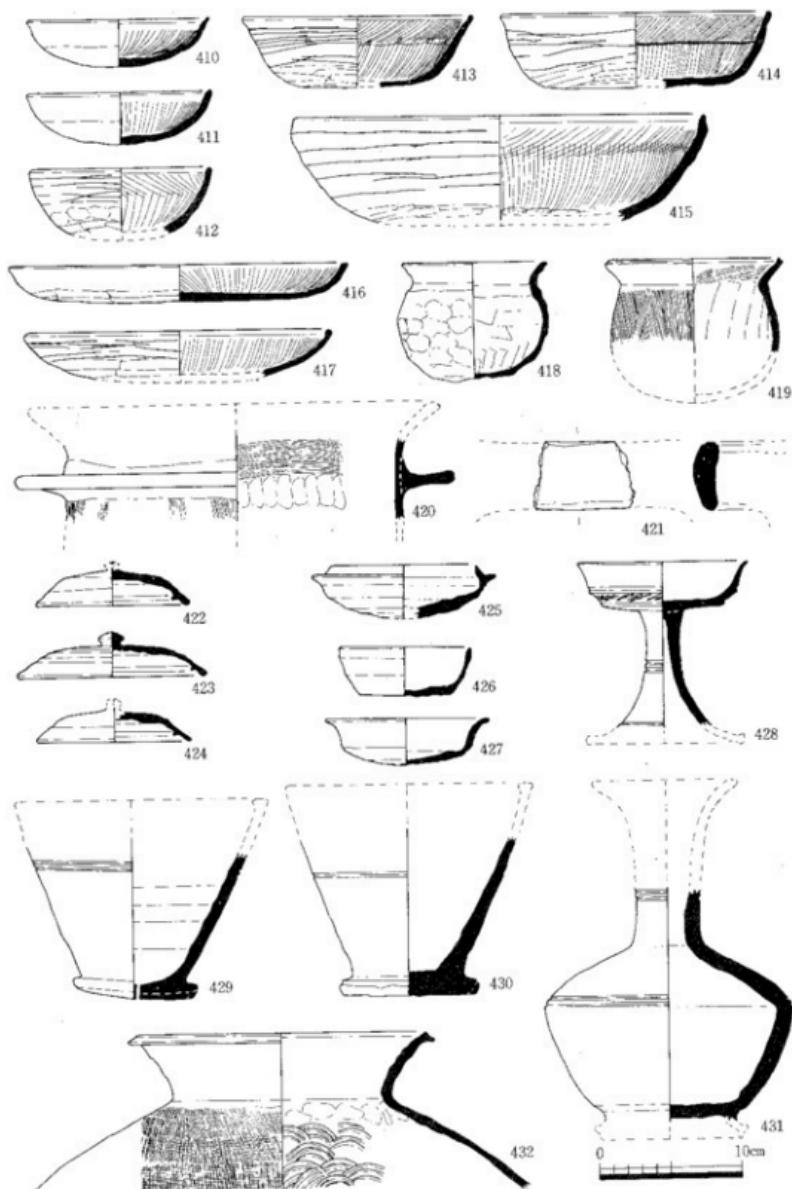


图-39 E地区整地层内出土土器①

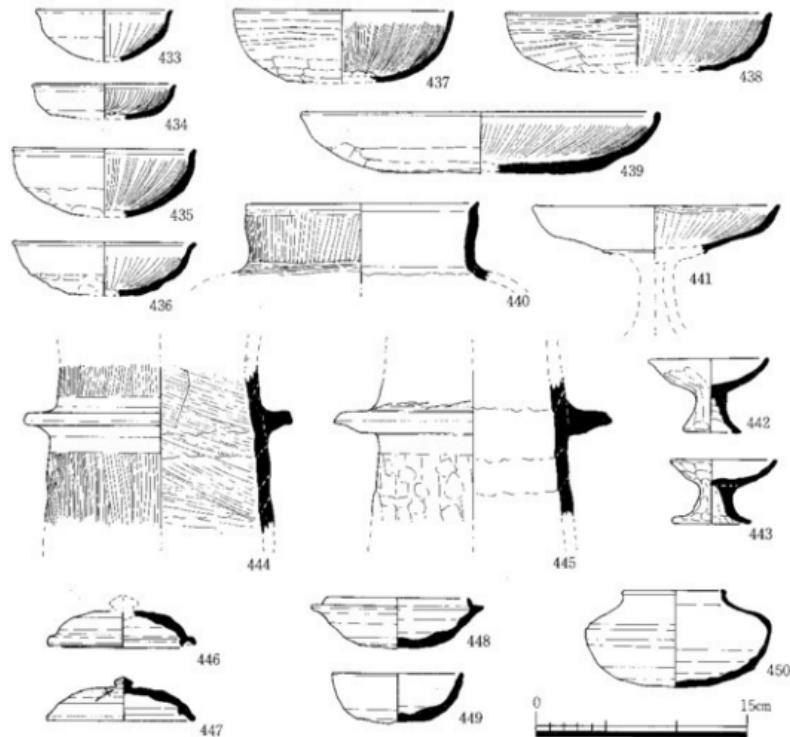


図-40 E地区整地層内出土土器一②

になるものが多いことが特徴的である。次に整地層内に並列的に混入している土器を紹介する。

土師器には杯A@・@、杯C@～@、皿A@、壺@、高杯A@、小形高杯@・@、羽釜@・@等がある。この他、鍋、甕、移動式竈等も出土している。この中で特異なものとして@・@の羽釜がある。ともに短かく広がる鋸を有するもので、内面には煤が付着している。また、粘土紐の継ぎ目も顯著に見られる。胎土は精良で、色調は黄灰色を呈する。

須恵器には杯蓋@・@、杯身H@、杯身A@、短頸壺等がある。杯蓋は、内面に短かい返りを有するもので、@は口縁端部より下方へたれ下がるが、@は、下方へ出ない。また@は小さな宝珠形つまみを有し、天井部には「メ」のヘラ記号がある。杯身Hは、短かい立ちあがりを有するもので、口縁端部は丸い。杯身Aは小形で体部は内縁気味にたちあがる。短頸壺は、肩部にわずかに凹線が認められるが明瞭ではない。口縁端部は外方へ肥厚する。以上、整地層内の土器は7世紀代のもの、特に末のものが多く見られる。

◎墨書き土器（図-41・42）

墨書き土器は、全体で44点出土している。その内文字と考えられるものは28点、記号と考えられるものは26点である。

文字は「寺」・「鳥坂寺」等の地名又はその場所を示すもの（@1～@2）、「三昧」等の仏教用語を示すもの（@3～@5）、記号又は性格不明の習書（@6～@8）の他に「大」・「十」・「京」・「美家」？・「油□」・「鳳」・「諸氏」・「玉麦」？がある。「寺」・「鳥坂寺」は、当地の寺院名を記したもので、「寺」13点、「鳥坂寺」1点がある。「寺」を墨書きした器種は、杯・皿・椀で底部に記す場合が最も多く。全て土師器である。時期は8世紀代のものがほとんどであるが、1点9世紀末前後のもの（@9）がある。「鳥坂寺」を記した土器は、井戸1内より出土したもので椀の体部に墨書きしている。土器は完形品で、口径14.5cm、器高4.9cmの法量である。口縁部は、外方に直線的に広がり、壠部を丸くおさめる。底部には、貼付け高台を有する。外面は指押えを明瞭に遺す。内面はナデ調整。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好。胎土は0.2cm以内の石英・長石粒を少量含む。時期は、9世紀後半～10世紀初頭と考えられる。「三昧」は、2文字が明確に記されているもの4点、1文字のもの3点がある。器種は、土師器の杯・皿類の底部である。時期は8世紀代。@1は、土師器の杯又は皿の底部に「玉麦」の文字。@2は、土師器の鉢底部に「鳳」。@3は、土師器の杯の底部に「大」の文字。@4・@5は、土師器の皿底部、@6は杯内面に墨書き。@7は、土師器の杯の底部に「京」の墨書きをおこなう。杯は平らな底部にやや外半し肥厚した口縁端部を持つ。外面は、横ナデ、底部はヘラ削りをおこなう。内面は、螺旋状+斜方射状暗紋を施す。色調は、赤褐色。焼成は良好。胎土はほとんど砂粒を含まない。時期は、8世紀中～後葉と考えられる。@8・@9は、土師器の鉢の底部に「十」の墨書きをおこなう。@10は、土師器の皿底部に「美家」の墨書きをおこなう。皿は、平たい底部に内側に口縁端部がつき、内側に肥厚する。外面は横ナデ、底部は指押え痕を遺す。内面は斜方射状紋を施す。色調は黄灰色、焼成は良好。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。時期は8世紀代。@11は、2次調査区整地層内より出土したもので「園□」と判読できる。

以上のように、墨書きされた器種は、土師器の杯・皿・椀・鉢が多く、須恵器に墨書きされたものは、1点である。土器の時期も@10・@11を除くと全て8世紀代のものばかりである。また「寺」・「鳥坂寺」の墨書き土器の出土は、当調査区が、従来文献史学の立場からしか推論し得なかった、河内六寺の位置を決定づけるものとして非常に貴重なものであると同時に、今回調査した区域が、主要伽藍が立ち並ぶ尾根筋と谷を一つはさんで東側に広がるのであるが、その地が寺域の内に含まれている、あるいは、寺と強い結びつきにあることを窺わせるものである。主要伽藍が地形に大きな制約を受けて立てられていること等から、当寺院の他の伽藍である経棧・鐘楼・僧房・食堂等も、地形上の制約を受け、一定のきまりの中に隨機応変に建てられたと考えるならば、「鳥坂寺」の墨書き土器は、当調査区を僧房・食堂に比定するのに有力な資料である。



図-41 墨書き土器①

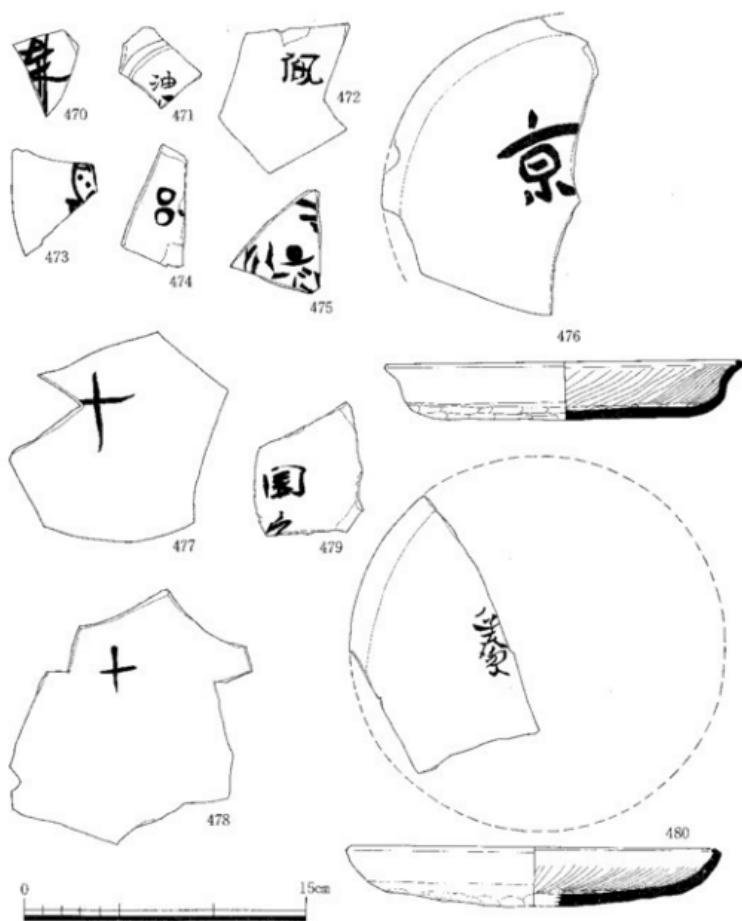


図-42 墨書き土器②

2) 瓦類

瓦類は、第1次調査において谷—2 包含層中から多量に検出された。

①軒丸瓦 (図-43・44)

軒丸瓦は、従来から知られる12種類の内4種9個体があり、その特徴は、次の通りである。
 ⑩は、素弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、弁は幅が広く短い。復元径4cmの大きい中房を配す。胎土は0.2cmの石英・長石粒を含む。焼成は良好、色調は暗黒灰色。
 ⑪～⑬は、重弁八弁蓮華紋軒丸瓦で1段高く突出した中房を配し、間弁は非常に反りが強く、先端は中房より高くなっている。胎土は、0.1cm以内の石英・長石粒を多く含む。焼成は良好、色調は灰褐色。
 ⑭は、重弁八弁蓮華紋軒丸瓦で径の大きな中房に1+8の蓮子を配し、そのまわりに8弁の重弁紋と珠紋を配している。胎土は、0.3cm以内の石英・長石・雲母粒を含む。焼成は良好、色調は青灰色。
 ⑮・⑯は、複弁蓮華紋軒丸瓦で外縁と内縁とに分かれ、内縁には32個の珠紋、外縁には24個の線鋸歯紋が配されている。胎土には、0.4cm以内の石英・長石・クサリ礫を含む。色調暗黄灰色
 焼成は良好。これらの軒丸瓦を先の報告書に従い分類すると、⑩は第I型式、⑪～⑬は第V型式、
 ⑭は第VI型式、⑮・⑯は第VII型式となる。特に第V型式のものが多く出土している。

②軒平瓦 (図-44)

軒平瓦は、2重弧紋のもの⑩・⑪・⑫、3重弧紋のもの⑬が出土しており、前者が多い。2重弧紋は、型押しによる紋様で直線彎を呈している。凸面には、叩き目T類(平瓦の章参照)を有する⑩・⑪がある。凹面は、9～11本/cmの布目痕を遺す。胎土は、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、黄褐色。焼成は良好。3重弧は、直線彎に粘土を貼り付けることによって、下部に一重をめぐらせた段階型式である。重弧紋は、ヘラ状工具によって粘土を削り取って紋様とする。凸面は、11本/cmの布目、凹面はナデ調整。胎土には、0.1cm以内の石英・長石を多く含む。色調は暗青灰色、焼成は良好。これらの軒平瓦は2重弧紋が第I型式、3重弧紋が第II型式に分類される。

③平瓦 (図-45～55)

瓦類で最も多く出土したのは平瓦で、コンテナ100箱分ある。その平瓦の凸面には、各種の叩き目紋様があり、それは鳥坂寺の平瓦で最も特徴的なものである。紋様は、叩き板に刻線を刻むものと原体に繩を巻くものの2種類に大別される。叩き板に刻線を入れる紋様は、細別すると25種以上である。その紋様は、有輪で左右対象形のもの(A類・B類・E類・F-1類・F-2類)、紋様反復に規則性のあるもの(C-1類・C-2類・D-1類・D-2類・G-1類・G-2類・R類・U類)等が認められ、さらに刻線全体の紋様が明らかでない(S類・T類)もあり、バラエティーに富む。これらの叩き目は、1個体の平瓦に2種類以上の異なる原体を用いるものが多く、まず各種の単位紋様を明らかにし、次に平瓦の諸特徴を述べることにする。(図-45)

A類は、 $1.5 \times 2\text{ cm}$ の正格子を原体に刻むもの。B類は、幅 0.3 cm の平行線を6~7条ほど刻む。C類は、平行線を刻んだ後に部分的に直交線・斜行線を入れるもので、紋様によってC-1類とC-2類に細別できる。D類は、2条の平行線によって3区の紋様帯を作り、中央部に「△」、左右に「ミ」の紋様の反復をするD-1類と、中央部先端に「△」を1ヶ所に削むD-2類がある。E類は、幅 7 cm の無軸の縞衫紋を刻むもの。F-1類は、有軸線を狭んで左右対象形で、中央部に菱形の区画を作り平行線を刻む。左側は、右下りの斜行線、右側に左下りの斜行線を刻む。F-2類は、中央の菱形部はF-1類と同じであるが、先端部側に三角形の紋様区を作り、縞衫状に刻線を入れるもので左右はほぼ対象形である。G-1類は、Y字状の中央線の両側に斜線を入れるもの。G-2類は、中央線の配置はG-1類と類似するが、左側の紋様に「E」の紋様反復をおこなう。H類は、無軸で斜行線によって紋様区を作り、中央部に「△」の紋様を配す。K類は、有軸線の両側に方射状に刻線を入れるもの。U類は、有軸の中央線を挟んで左右に紋様区を作り斜線を刻む。I類・J類・L類・M類・N類・O類・P類・Q類は左右対象形の紋様反復をおこなわず、きわめて不規則な刻線紋様を施すもの。R類は、下半部が不明であるが、上半部に4条の平行線を入れる。S類・T類は、上半部に長軸と平行した1条の刻線を入れ方射状に紋様を配す。縄目叩き板は、おそらく長軸と並行して縄を巻いたものと考えられ、板状の原体を使用しているものと考えられる。

㊂・㊃は、凸面に縄目叩きの後に抉端部の縄目を 23 cm ほどナデ消しとそのままのもの㊄がある。凹面は、6本/cmの布目痕が認められ幅 $2.5 \sim 3\text{ cm}$ の模骨痕が明瞭に遺る。側面調整はヘラ切り。胎土は、 0.2 cm 以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。㊂は、凸面に長軸方向に縄目叩きの後に1部横方向に縄目叩きをおこなう。凹面は、6本/cmの布目痕の下に糸切り痕が認められる。側面はヘラ削りによって調整されている。胎土には、 0.4 cm 以内の石英・長石を多く含む。色調は黒褐色、焼成は良好。㊃は、凸面に幅 $0.3 \sim 0.4\text{ cm}$ の平行線の叩き目B類が認められる。凹面は、8本/cmの布目痕を遺す。側面は内側に分割裁断面がある。胎土には、 0.2 cm 以内の石英・長石を多く含む。色調は黒色、焼成は良好。㊄は、凸面にG-1類の叩きの後にC-1類の叩き目をおこなう。凹面は、8本/cmの布目痕を遺す。側面は内側に分割裁断面が認められる。胎土には、 0.4 cm 以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。㊅は、凸面にH類の叩き目が遺る。凹面は、9本/cmの布目痕があり、布の縫目が認められる。側面は、内側に分割裁断面がある。胎土には、 0.3 cm 以内の石英・長石を多く含む。色調は黒灰色、焼成は良好。㊆は、凸面にC-2類の叩き目、凹面に10本/cmの布目痕を遺す。胎土には、 0.2 cm 以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。㊇・㊈・㊉は、凸面にR類の叩き目、凹面に8本/cmの布目痕を遺す。側面調整はヘラ削り。胎土には 0.2 cm 以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。㊊は、凸面にK類の叩き目、凹面に8本/cmの布目痕が認められる。側面は、内側に分割裁断面が遺る。胎土には、 0.2 cm 以内の長石・石英を

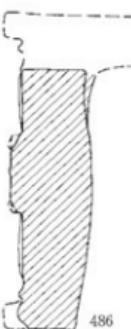
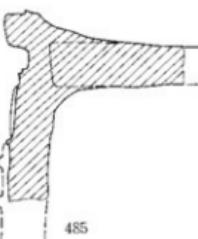
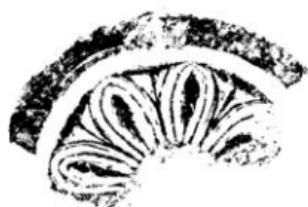
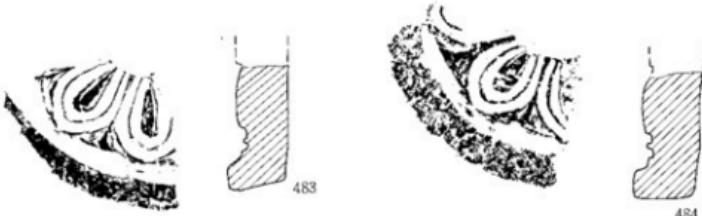
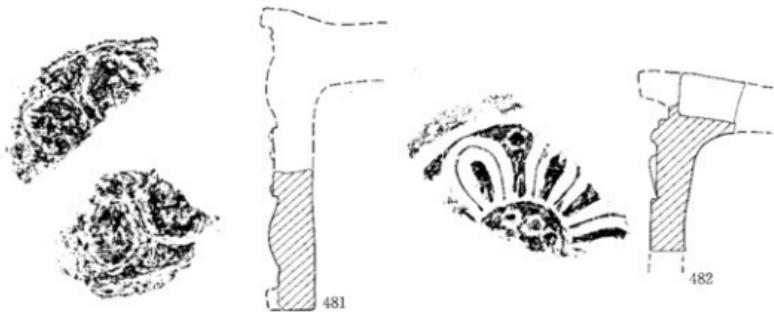


図-43 軒丸瓦

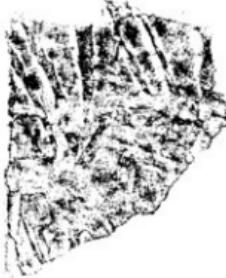
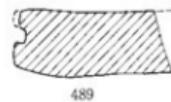
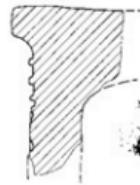
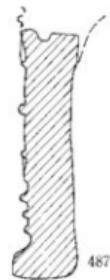
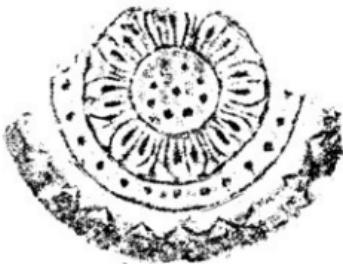


図-44 軒丸・軒平瓦

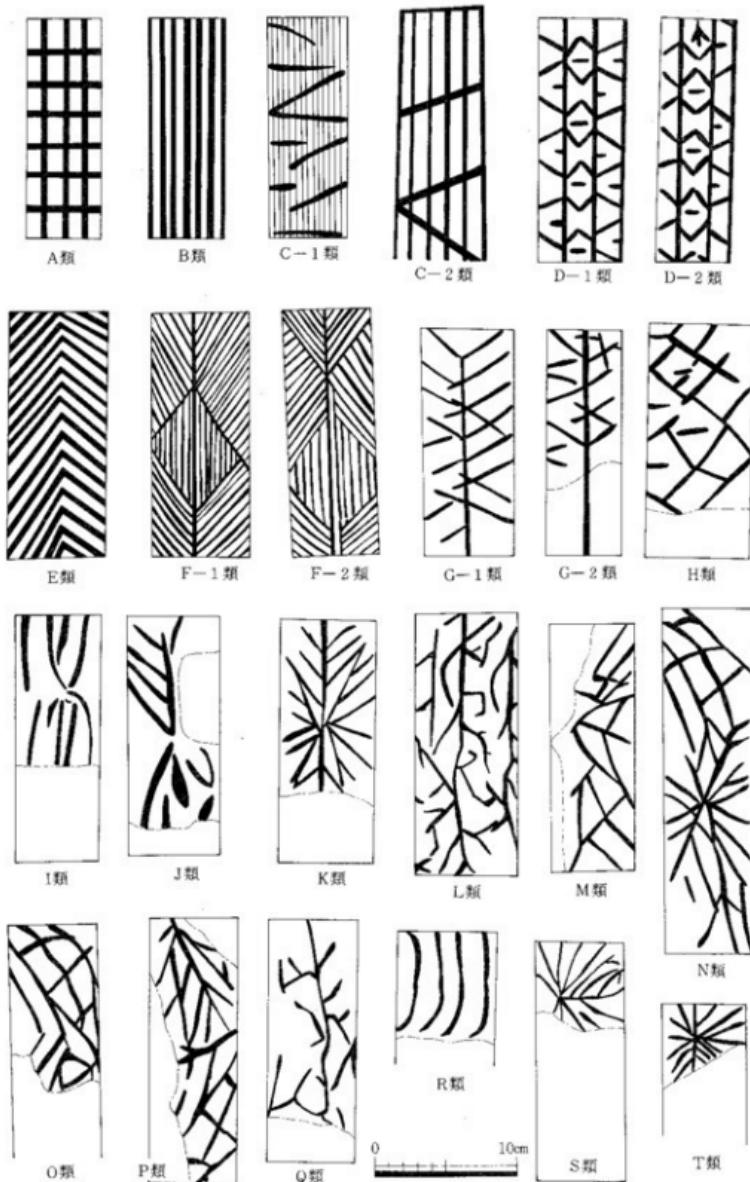
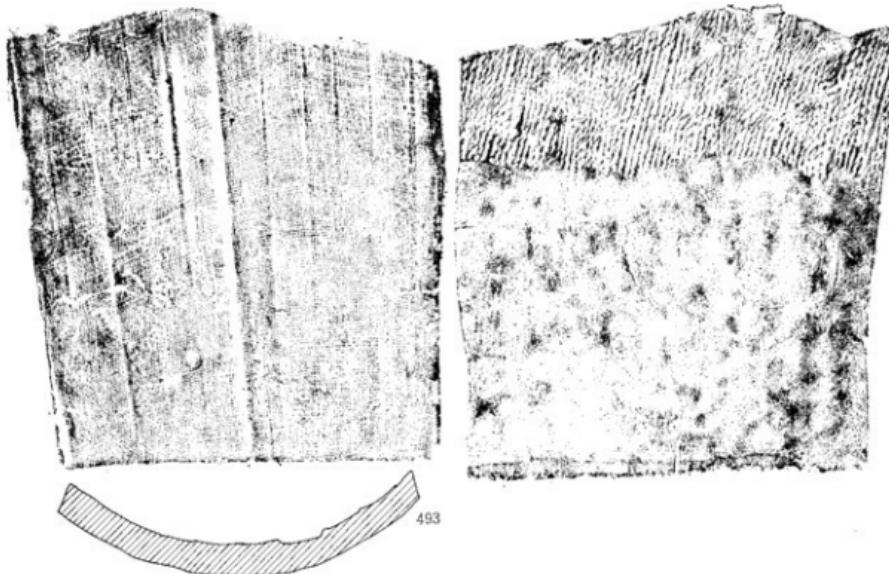
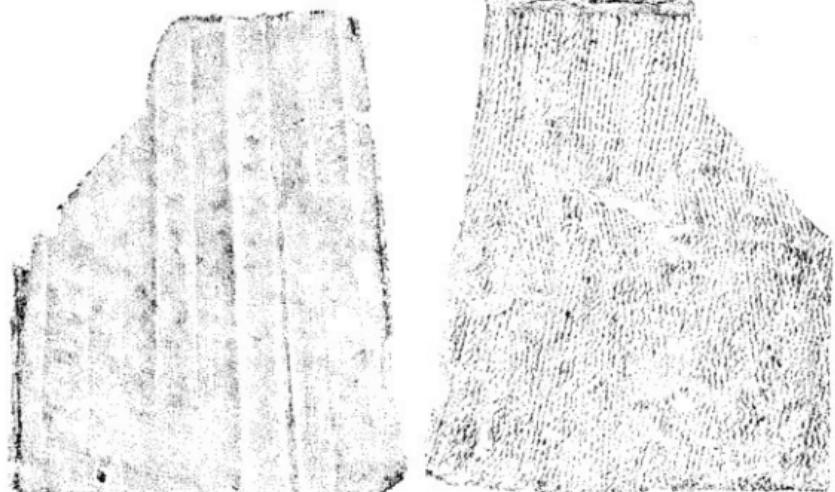


図-45 平瓦叩き板原体模式図



493



494



图-46 平瓦①

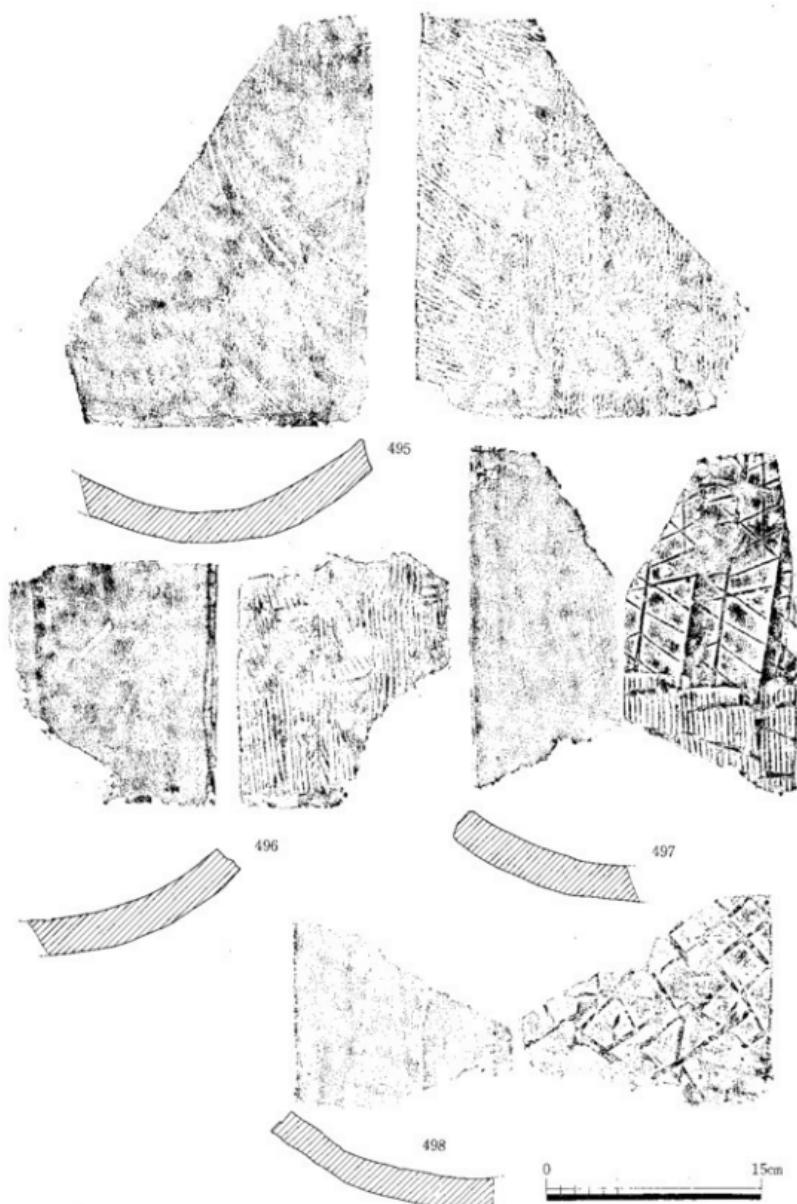


图-47 平瓦(2)

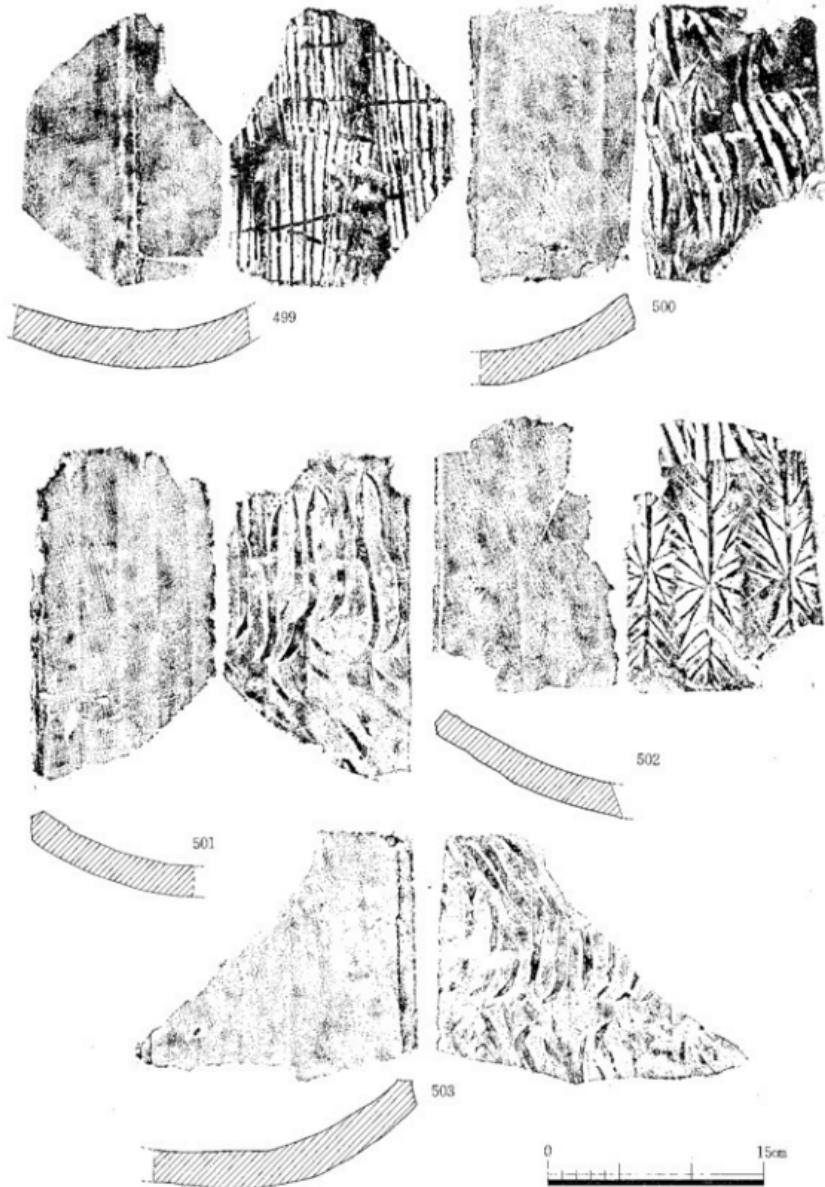


図-48 平瓦③

多く含む。色調は暗青灰色。焼成は良好。◎は、凸面にC—2類の叩き目、凹面に7本/cmの布目痕を遺す。側面調整はヘラ削り。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にC—1類の叩き目、凹面に8本/cmの布目痕の下に糸切り痕が遺る。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にD—1類の叩きの後にC—1類叩きを広端部側に施す。凹面は、糸切りの後に8本/cmの布目痕がある。さらに、幅3cm前後の模骨痕を留める。側面は内側に分割裁断面がある。胎土には、0.1cm以内の石英・長石を含む。色調は黒灰色、焼成は良好。◎は、凸面にK類叩き、凹面に9本/cmの布目痕を遺す。側面はヘラ削り。胎土には、0.2cm以内の石英多し。色調は暗灰褐色、焼成は良好。◎～◎は、凹面に1.2×2cmの正格子を持つ叩き目A類で長軸に木理り、粘土板巻き作りである。側面は内側に分割裁断面が認められる。胎土には、0.4cm以内の石英・長石を多く含む。色調は暗褐色、焼成は良好。◎・◎は、凹面にB類叩き目、凹面に8本/cmの布目痕がある。◎の凹面には粘土板の縫目があり右回りに粘土板を巻いている。側面は分割裁断面がある。胎土には、0.4cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にE類叩き目、凹面に糸切り痕の後に7本/cmの布目痕が遺る。側面はヘラ削り。胎土には、0.1cm以内の長石・石英・クサリ礫を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にD—1類・G—1類の叩き目が認められる。凹面は、糸切りの後に8本/cmの布目痕が遺る。側面は内側に分割裁断面がある。胎土には、0.3cm以内の石英・長石を含む。色調は黒灰色、焼成は良好。◎は、凸面にH類の叩き目、凹面に8本/cmの布目痕が遺る。側面内側には、分割裁断面が遺る。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は暗黒褐色、焼成は良好。◎は、凸面にG—1類の叩き目、凹面に8本/cmの布目痕が遺る。側面はヘラ削り。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎・◎は、凸面にM類叩き目、凹面には9本/cmの布目痕が遺る。側面内側には分割裁断面がある。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にK類叩き目、凹面に7本/cmの布目痕があり、幅3cmの模骨痕を留める。側面はヘラ削り。胎土には、0.4cm以内の石英・長石を多く含む。色調は青灰色、焼成は良好。◎は、凸面にM類叩きを3段に叩く。凹面は糸切りの後に8本/cmの布目痕を留める。また、布の縫目も認められる。側面内側には、分割裁断面がある。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は青灰色、焼成は良好。◎は、凸面にK類叩き目、凹面に9本/cmの布目痕を遺す。側面はヘラ削り。胎土には、0.1cm以内の石英・長石粒を含む。色調は黒褐色、焼成は良好。◎は、凸面にE類叩き目、凹面に幅2.5cm前後の模骨痕と糸切り痕を遺す。側面はヘラ削り。胎土には、0.1cm以内の長石・石英を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にF—1類の叩き目を何度も施す。凹面は糸切りの後に幅3cmの模骨痕が遺る。布目痕は9本/cmである。側面内側には、分割裁断面を留める。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にJ類叩き目、凹面に6本/cmの布目痕を遺す。側面はヘ

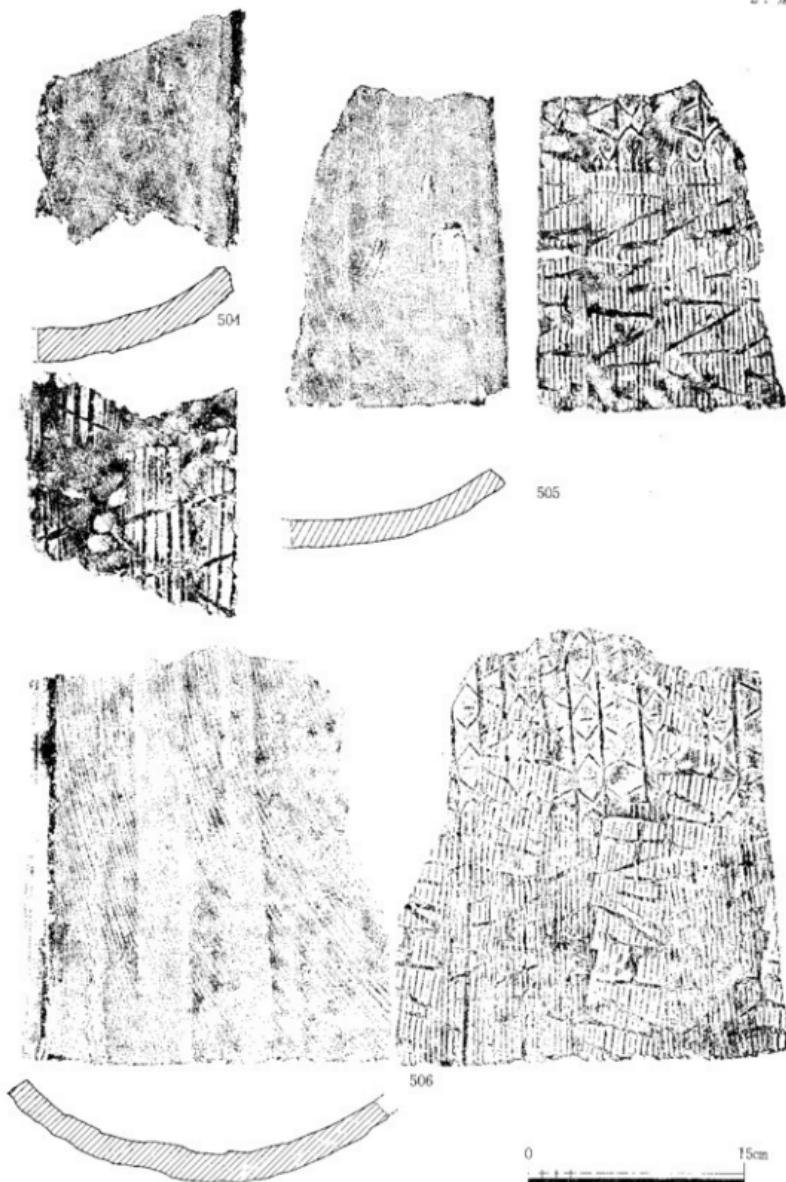


図-49 平瓦④

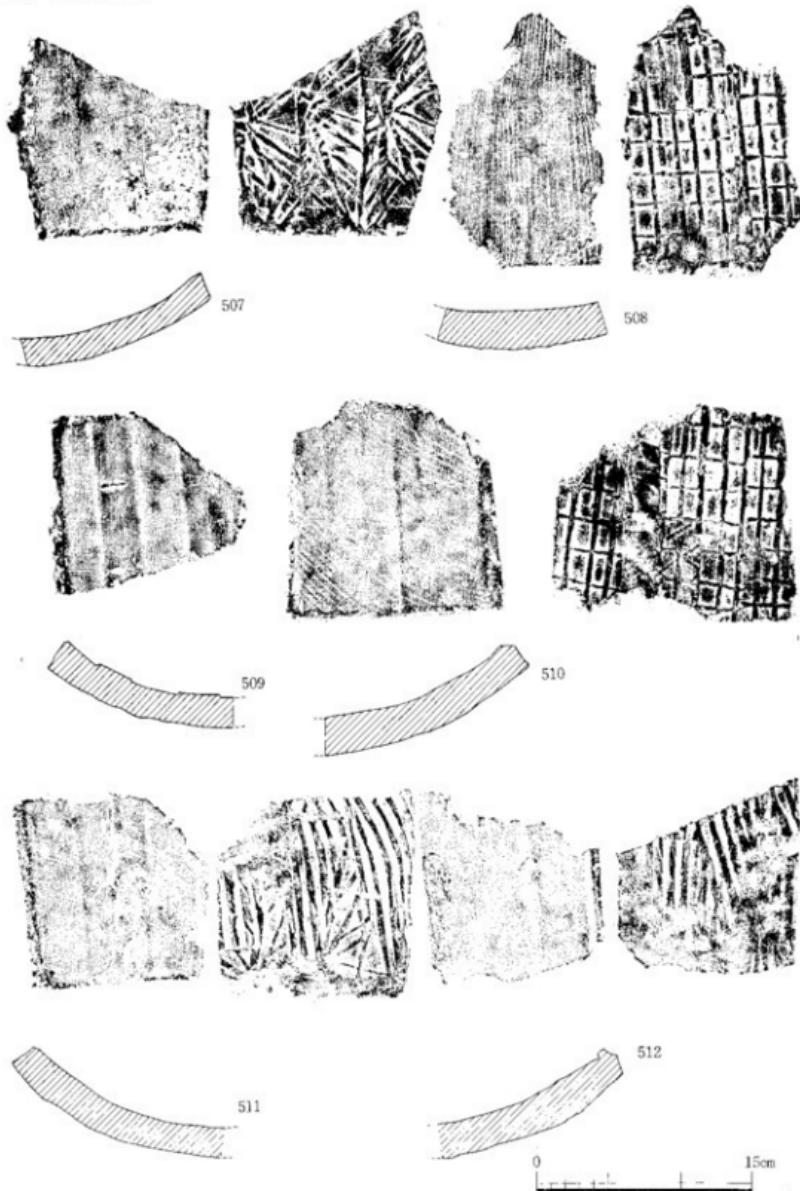


図-50 平瓦⑤

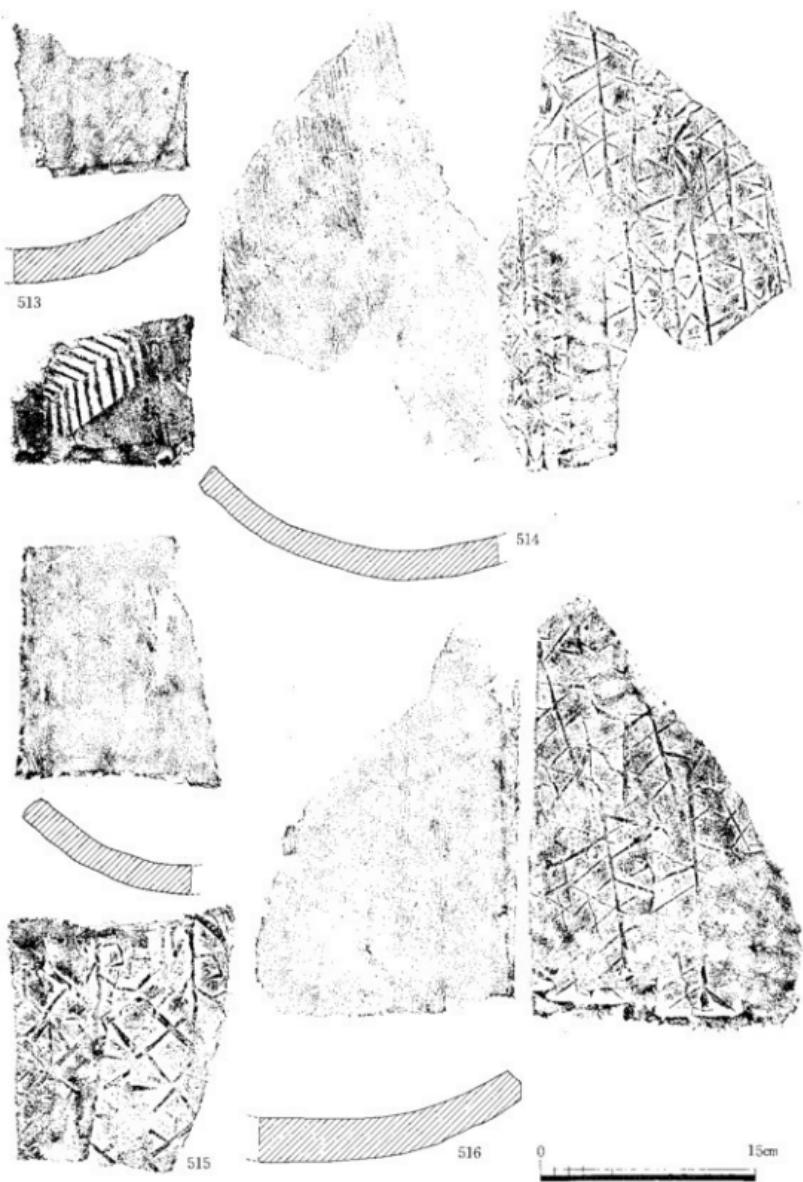


図-51 平瓦⑥

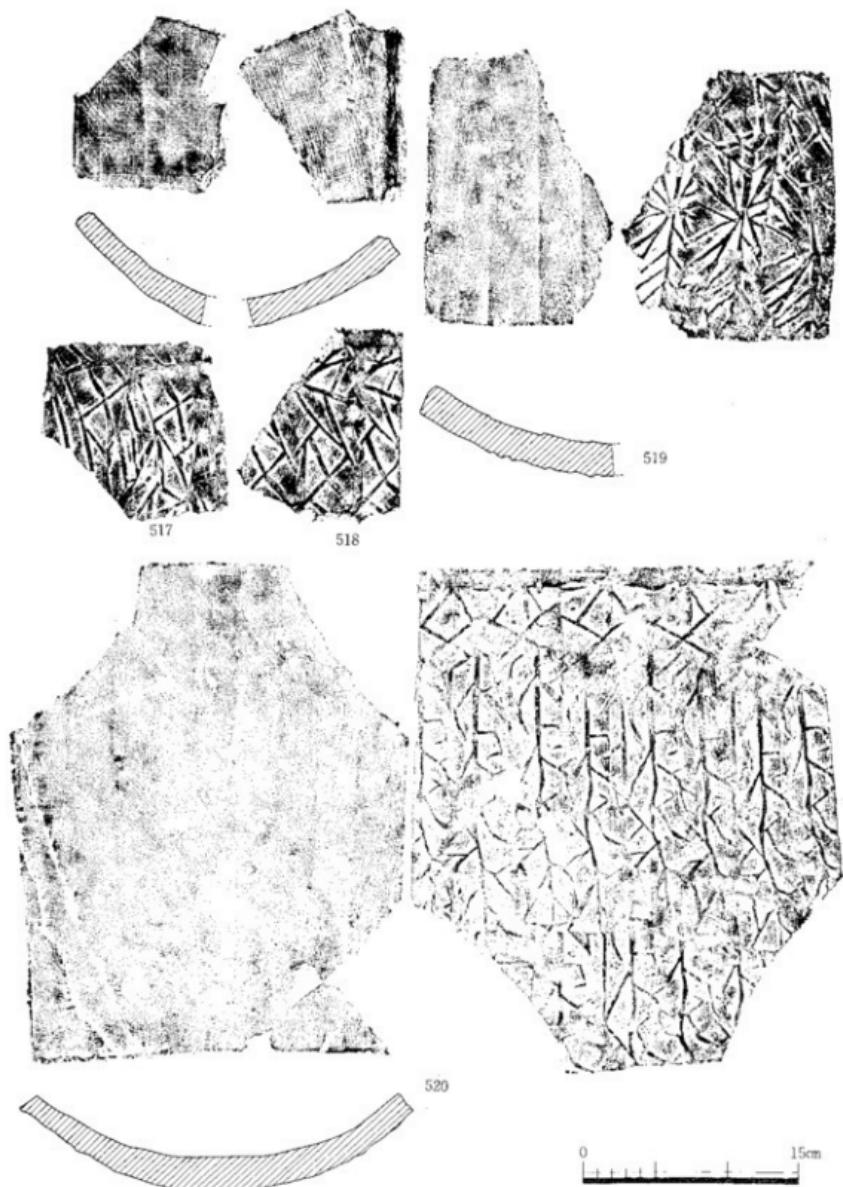


図-52 平瓦⑦

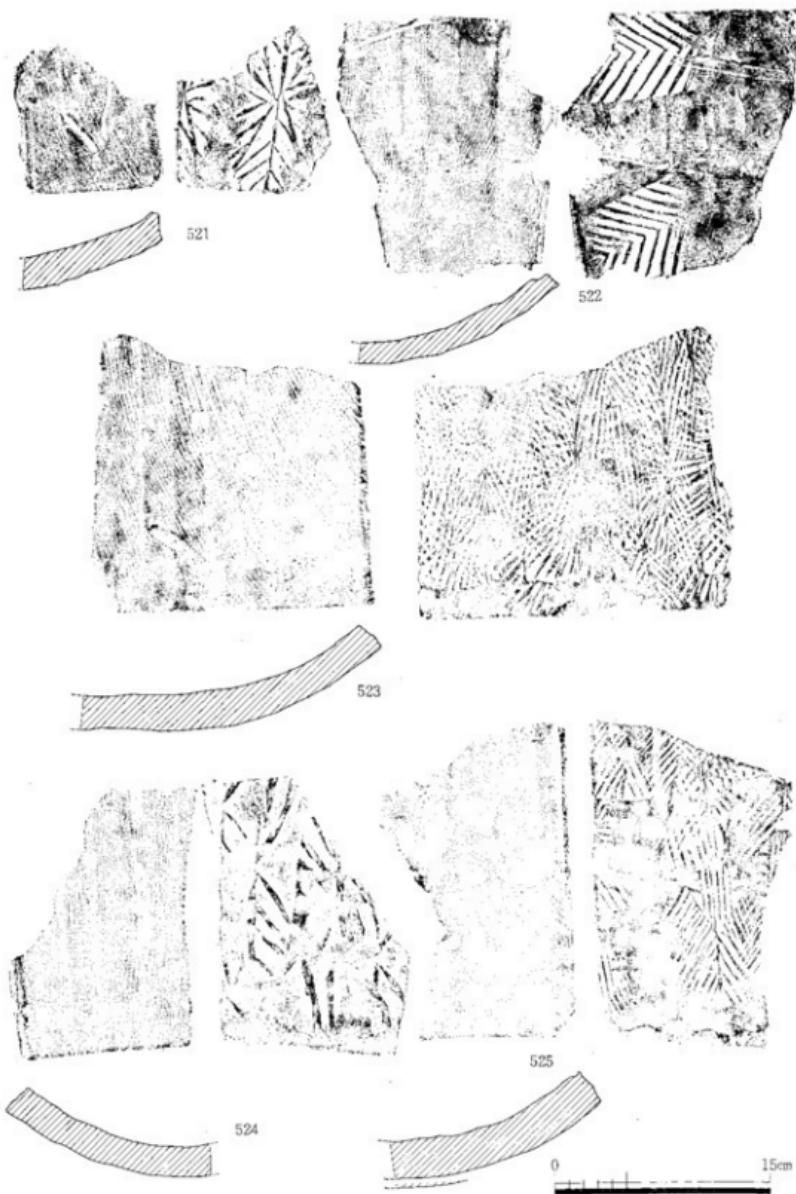


図-53 平瓦(8)

ラ削り。胎土には、0.1cm以内の少量の砂粒を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にF-1類の叩き目、凹面に幅3cmの模骨痕を遺し、布目は8本/cmである。側面内側には分割截断面を留める。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は赤褐色、焼成は良好。◎は、凸面にR類叩き目、凹面に9本/cmの布目痕を遺す。側面内側には分割截断面を留める。胎土には、0.3cm以内の石英を多く含む。色調は暗灰褐色、焼成は良好。◎は、凸面にM類叩き目を上・下に施す。凹面には10本/cmの布目痕と模骨痕が遺る。側面内側には分割截断面を留める。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は明黄灰色、焼成は良好。◎は、凸面にD-2類とT類の叩き目がある。凹面には、糸切り痕の上に6本/cmの布目痕が遺る。側面内側には分割截断面を留める。胎土には、0.3cm以内の石英・長石を多く含む。色調は暗黒灰色、焼成は良好。◎は、凸面にQ類叩き目、凹面に8本/cmの布目痕を遺す。側面内側には、分割截断面を留める。胎土には、0.1cm以内の石英・長石を多く含む。色調は暗青灰色、焼成は良好。◎は、凸面にU類叩き目、凹面に糸切りの後に9本/cmの布目痕を遺す。側面内側には、分割截断面を留める。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は赤褐色、焼成は良好。◎は、凸面に縄目叩き、凹面に幅3cmの模骨痕と6本/cmの布目痕がある。側面はヘラ削り。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を多く含む。色調は明茶褐色、焼成は良好。

以上のように、平瓦の成形は、糸切りの痕跡から粘土板桶巻作りのものがほとんどである。側面には、分割截断面を留めており、平瓦の彎曲から考えると4枚造りが主体を占める。模骨痕も幅2.5~3cmのものが多く原体の幅が3~3.5cm前後と考えられる。これらの平瓦の叩き目には、2種類の原体を用いるものがあることから、A~U類の刻線叩き板は、ほとんど同時期の所産と考えられる。

④丸瓦（図-46）

◎は、残存長19cm、厚さ2.1cm前後で凸面にU類叩き目を施す。凹面は14本/cmの布目痕が認められる。直径は18.4cmで側面に分割截断面が明瞭に遺る。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、残存長29cm、厚さ2.5cm前後で凸面に縄目叩きの後にナデ調整を施す。凹面には7本/cmの布目痕が遺る。側面はヘラ削り調整。胎土には0.4cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、直径13.3cm、厚さ1.5cm前後で凸面にC-1類叩き目を施した後にナデ調整。凹面は8本/cmの布目痕を遺し、側面調整はヘラ削り。胎土には、0.2cm以内の石英・長石・雲母を多く含む。色調は茶褐色、焼成は良好。◎は、直径14.2cm、厚さ2cmで凸面に叩き目A類又はC類が認められる。側面はヘラ削りで丁寧に調整する。凹面には8本/cmの布目痕が遺る。胎土には、0.4cm以内の石英・長石を多く含む。色調は灰褐色、焼成は良好。◎は、残存長23cm、厚さ1.8cm前後で凸面に縄目叩きを施す。凹面には8本/cmの布目痕が認められる。側面はヘラ削り調整。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は灰褐色、焼成は良好。

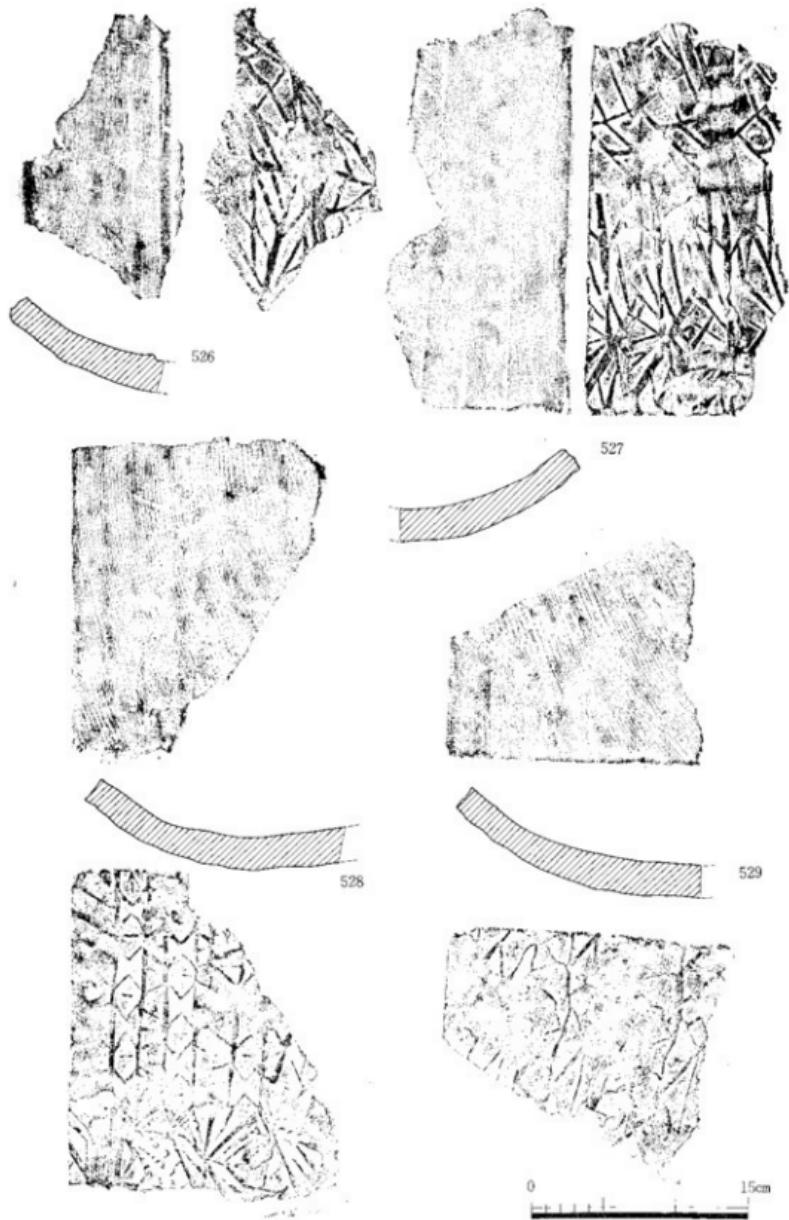
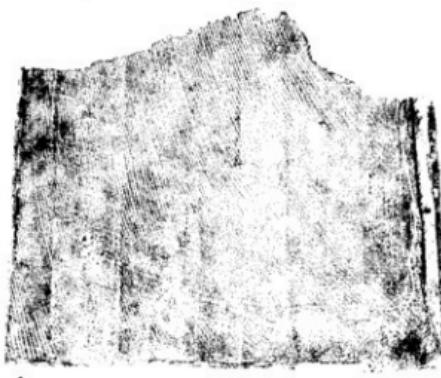
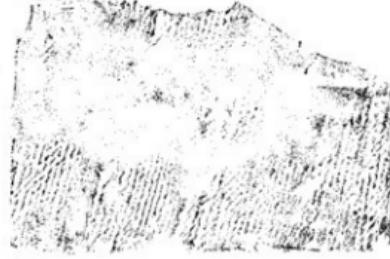


図-54 平瓦⑨



530



531



図-55 平瓦⑩

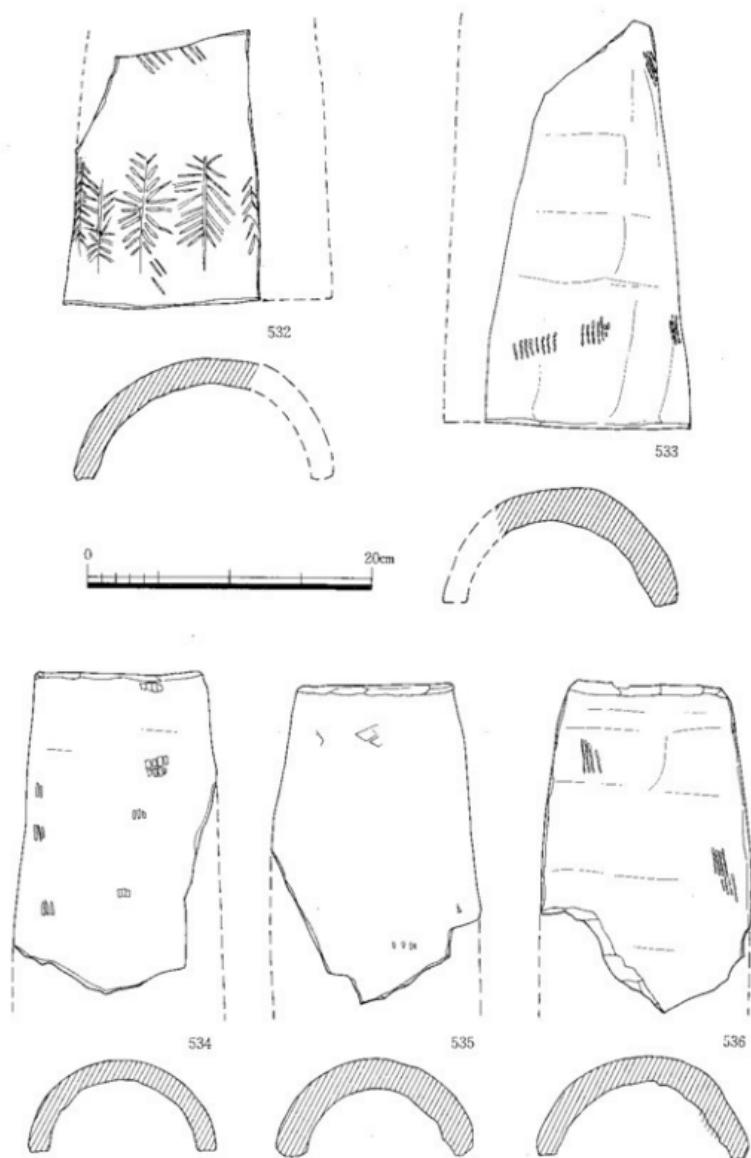


図-56 丸瓦

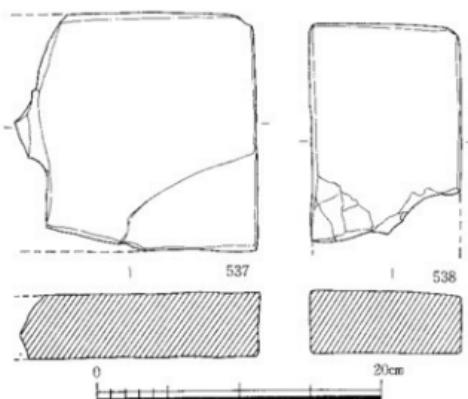


図-57 塚

3) 塚輪 (図-58~60)

◎溝1出土の埴輪

種類は、朝顔形埴輪⑤と馬形埴輪⑥~⑧がある。朝顔形は、体部片で口縁部との境に幅1.5cmの凸帯をめぐらす。外面は左上りのタテハケ、内面はナデ上げ調整。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は橙色、焼成は良好、窯窓製品。馬形埴輪は、1個体分で各部位が断片となっている。頭部は、左側の一部が遺存しており耳部も遺っている。鞍部は、前輪の一部が遺存し、刺突紋が配されている。その前には、手綱の表現が認められる。尻部には、尻轡の一部が認められる。また、雲珠の飾具が1点ある。外面はハケ調整で、部分的に横ナデ。胎土には、0.2cm以内の石英・長石を含む。色調は黄灰色、焼成は良好。これらの埴輪の時期は共伴土器より川西宏幸編年の中期に相当するものである。

◎溝2の埴輪と須恵器

種類は、円筒埴輪⑨・⑩・⑪~⑭、朝顔形埴輪⑮・⑯、家形埴輪⑰・⑲・⑳・㉑と須恵器の器台㉒が出土している。円筒埴輪は、基部のみ遺存するものが多く完形品はない。法量は、底径14~16cmで凸帯によって4段に区分されたものと考えられる。外面は9本/cmの縱ハケで1次調整をおこなった後に凸帯を貼り付ける。内面は左上りの横ハケをおこなうものの⑨・⑩とナデ仕上げのもの⑪・⑫・⑬~⑭・㉑・㉒がある。底面は平坦で、末調整又はナデをおこなう。凸帯は断面台形状のもの⑨・⑩・⑪~⑭・㉑~㉒と断面三角形状のもの㉒がある。口縁部は直立し端部は平坦面として横ナデをおこなう。スカシは、基部より2・3段目に直径6cm前後の円形のものを対向に1対穿つ。外面には、「へ」・「U」等のヘラ記号を施す。胎土には0.2cm以内の石英・長石・クサリ礫を多く含む。色調は明赤褐色、焼成は良好。無黒斑で須恵器のもの

◎塚 (図-57)

1次調査において、方塚と長方塚が各1個体づつ出土している。⑤は、一辺17cm、厚さ4.6cmの方塚で器面にナデ調整をおこなっている。胎土には、0.3cm以内の石英・長石を多く含む。色調は明橙色、焼成は良好。⑥は、8.4cm×残存長13cm、厚さ3.6cmの長方塚で器面をナデ調整。胎土には、0.3cm以内の石英・長石を多く含む。焼成は良好、色調は灰褐色。

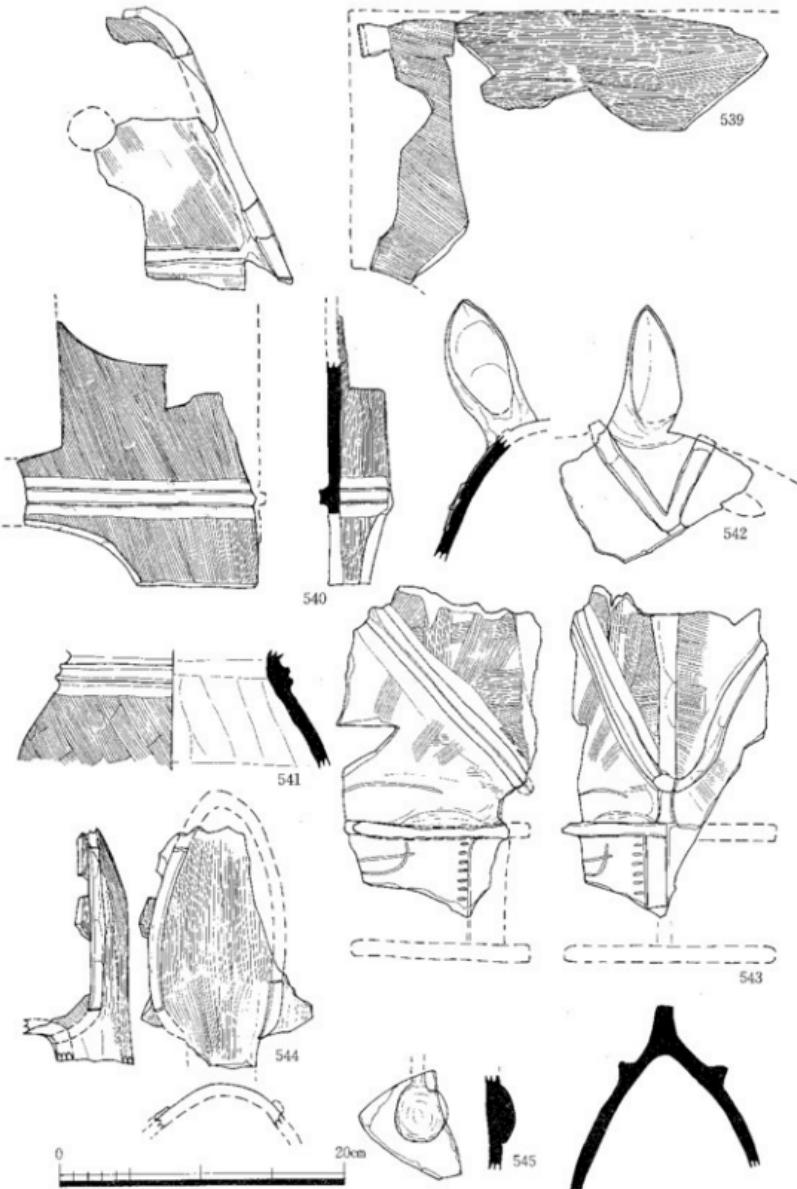


図-58 塗輪①

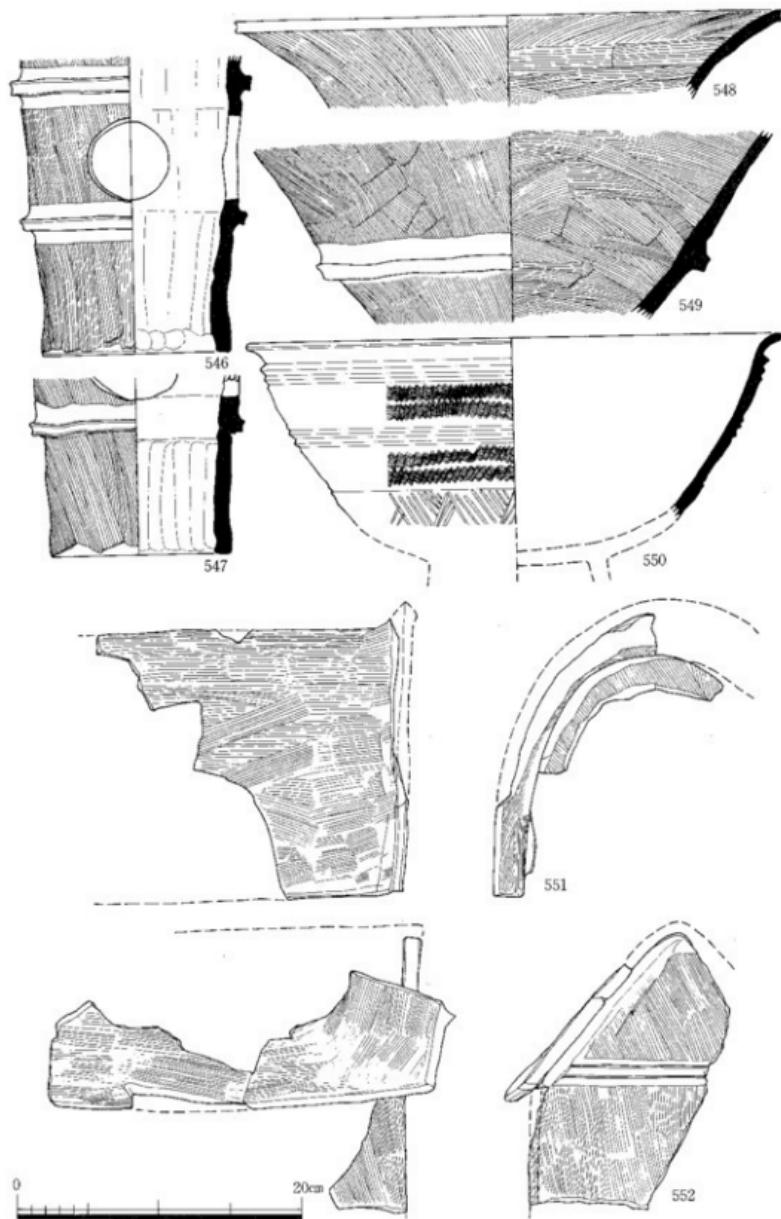


図-59 塗輪②

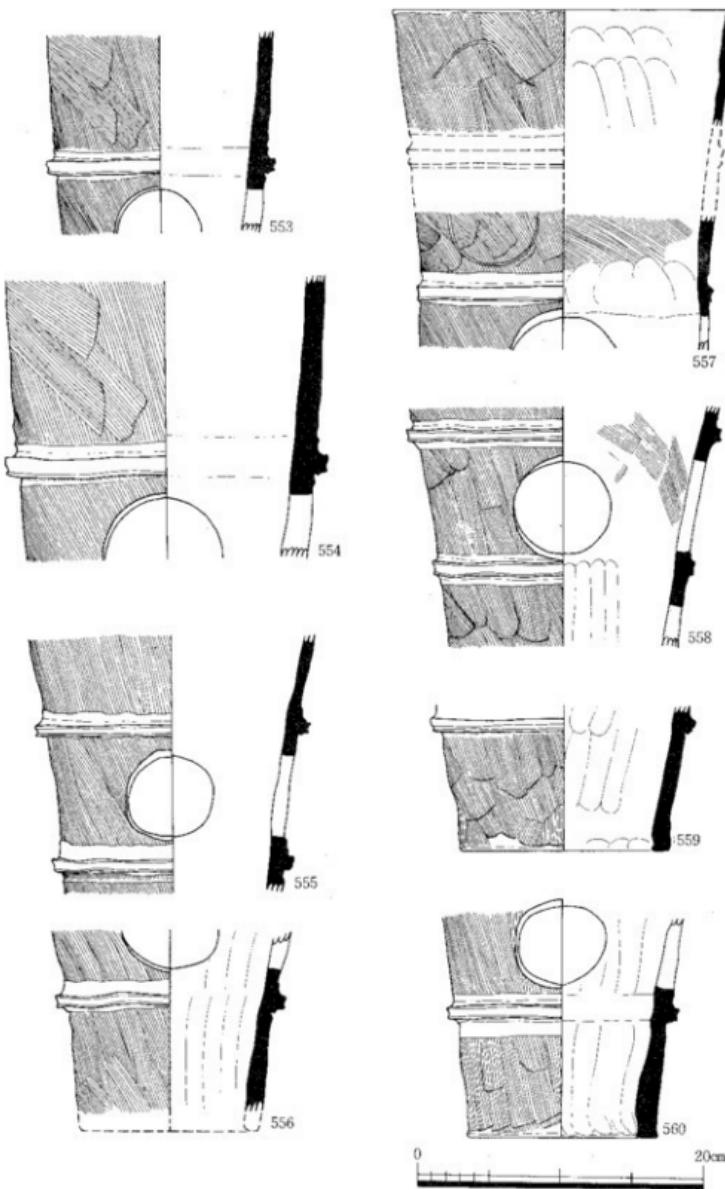


図-60 填輪③

が含まれることから、窯窓製品と考えられる。朝顔形埴輪は、外面に荒い縦ハケ、内面に横ハケを丁寧におこなう。凸帯は、断面台形を呈する。色調は明赤褐色、焼成は良好。㊷は、口縁部で大きく外反し面をなし、端部を横ナデ調整。家形埴輪は、㊸・㊹・㊺・㊻があり2~3個体分と考えられる。共に切妻の小形の家屋を模倣したものである。外面はハケ調整、内面はナデ調整。胎土・色調・焼成は円筒埴輪に類似する。

4) 金属・石製品 (図-61)

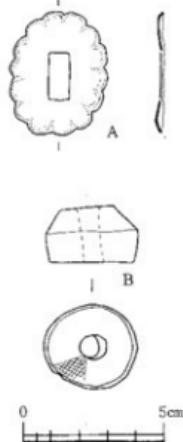


図-61 金属・石製品

Aは、2次調査区E区整地層内より出土したもので、銅製飾金具で、表面には金が部分的に遺存している。長径4.4cm、短径3.5cmの楕円形を呈し、外縁は、花弁状に加工し、それに沿って約1mm間隔で点描を施している。内には1.7cm×0.7cmのスカシ孔を有する。当資料に類似するものに、法隆寺藏飾金具があり、仏像の天蓋等を飾っていたものと考えられる。

Bは、石製の筋轆車で、縦断面は台形を呈する。径は約3cmであるが正円ではない。ほぼ中央に径0.8cmの穿孔がある。また底面には、わずかに、細線で描かれた鋸歯紋が1単位認められる。三角形の内を格子で埋めるものである。色調は黒灰色を呈しており、外表面には、磨いた痕跡をとどめる。

5) 錫冶関係遺物 (図-62)

錫冶関係の遺物は、特に谷一2地区から多量に出土しておりその種類は鞴の羽口㊷~㊹、ルツボ㊺、鉄滓・銅滓等がある。また、2次調査においても鞴の羽口等が整地層内より出土した。鞴の羽口は、孔径2.5cm、直徑6~7cmで細長いものの㊷・㊹と、末端が「ハ」字状に開くものの㊷・㊹・㊻がある。外面調整は、指押えを明瞭に留めるもの㊷・㊹・㊻・㊻と、板状のもので面的に調整するもの㊷・㊻がある。成形は、棒状のものに粘土帶を右回りに巻き、外面調整をおこなうものと考えられる。胎土には、全て長石・雲母・石英等の砂粒を多く含む。色調は赤褐色。2次調査では、孔径1cm、直徑4~5cmの小形の鞴羽口も出土している。

㊷は、用途不明であるが胎土や器面の2次焼成から錫冶関係のものと考えられる。口径11.5cm、器高5cmで器壁が2cmと非常に厚い。内外面はナデ調整。胎土には0.2cm以内の石英・長石・雲母を含む。色調は赤褐色、焼成は良好。ルツボであろうか。

鉄滓は、細片が多く明瞭な楕形滓は確認できない。銅滓は6gで溶解している。

2. 遺物

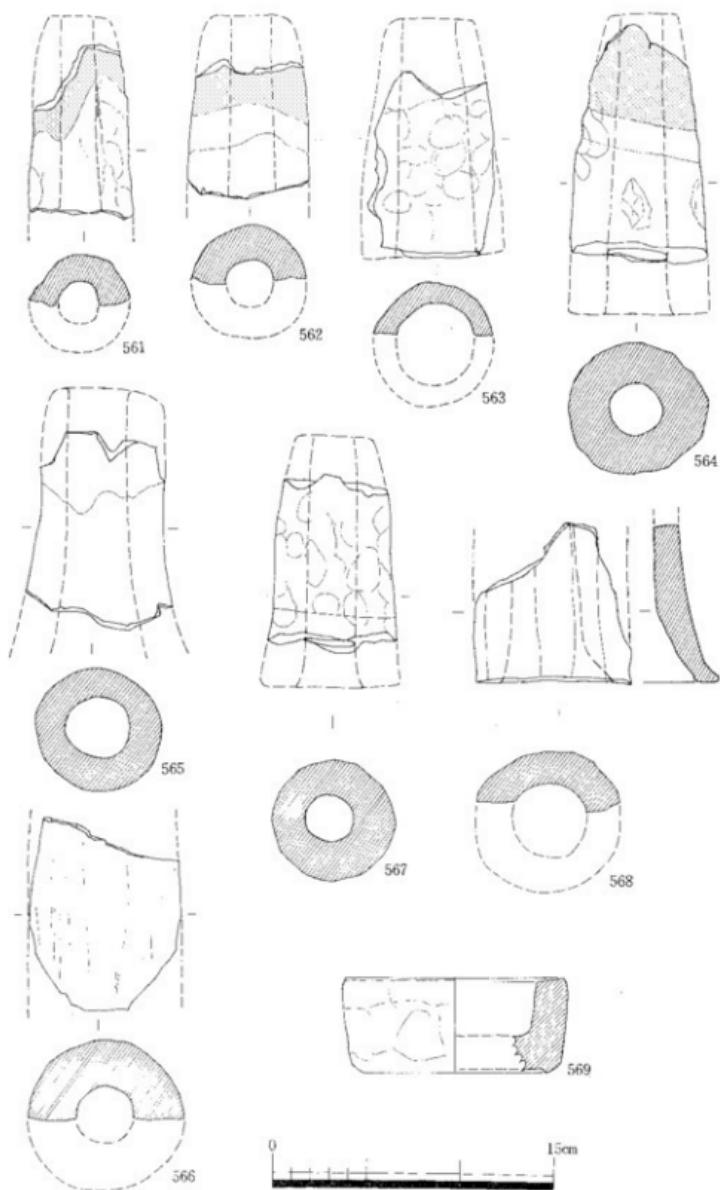


図-62 鐵冶関係遺物

6) 木製品 (図-63・64)

木製品は、井戸1[◎]～[◎]・[◎]～[◎]、井戸2[◎]、遺物包含層-2内[◎]～[◎]から出土している。特に、井戸1内からその半数が出土した。出土した木製品の多くは、破損し原形を保つものは少ない。ここでは、説明を加えなかったが他にも製品の断片とみられるものがある。用途別に区分すると、祭祀具、工具、服飾具、食膳具、建築材、その他（不明品）がある。以下では、用途別に記載していく。

① 祭祀具

斎串は、短冊形の薄板の上端を主頭状にかたちどり、下端を尖らして両側縁に切り込みを入れた木製品である。従来、「削り掛け」、「塔婆形木製品」等と呼ばれていたものである。長短・大小の差がみられるが、それらの差を除外して、この木製品のもっとも特徴的な形態からA～D類の4種類に分類することができる。A類は、両側辺の各1個所に切込みを入れるもの。B類は、側辺上方に2対計4個所に切り掛けを施したものである。C類は、側辺に4対以上の切り掛けを加えるもので、切り掛けは上方からと下方から交互となるもの。D類は、両側辺の対称位置にV字形の切り欠きを施したもので、切り欠き数は4対をかぞえる。

A類には、[◎]～[◎]があり、1個所の切り込みが各1回のもの[◎]と2回以上のもの[◎]・[◎]～[◎]がある。いずれも檜の柾目材を使用し、表裏面は割ったまま面をとどめるもの[◎]～[◎]が多い。側辺の整形については、[◎]・[◎]～[◎]は削り整形するが、[◎]は剖面のままである。B類には、[◎]があり、1個所の切り込みが1～2回である。C類[◎]は、切り込みが1回～2回で檜の柾目板を使用している。D類[◎]は、切り込みが現存で7対あり、全体に丁寧な作りで、表裏面を削り調整している。[◎]～[◎]は、分類は不明であるが斎串の下端部である。完形品の計測値は次のようにになる。[◎]は長さ22cm・幅18cm・厚さ0.4cm、[◎]は長さ24cm・幅2cm・厚さ0.3cm、[◎]は長さ24.5cm・幅2.5cm・厚さ0.3cm、[◎]は長さ29.2cm・幅2.7cm・厚さ0.5cm。また上記以外に、小形のもの[◎]も出土している。

② 工具

[◎]は、刀身を欠く刀子の柄である。細長い木片を粗く削って加工したもので、柄の中央部で背の方に腰を折り、柄頭を長さ1cmほど凸状に削出している。柄元部分の断面は、円形を呈する。茎部は、断面が梢円形を呈し、その内の茎孔は断面二角形である。材質は檜材。長さ11.2cm、最大幅22cm、茎孔の深さ6.3cm、茎孔の幅0.3cm。

③ 服飾具

櫛は、板目板に鋸で細い歯をひきだし、表面を平滑に研いた横櫛である。いずれも破片であるが3点出土している。形態は、長方形のもので肩部を角張らすもの[◎]・[◎]とまるくするもの[◎]がある。断面は、3点とも肩をまるくするものである。

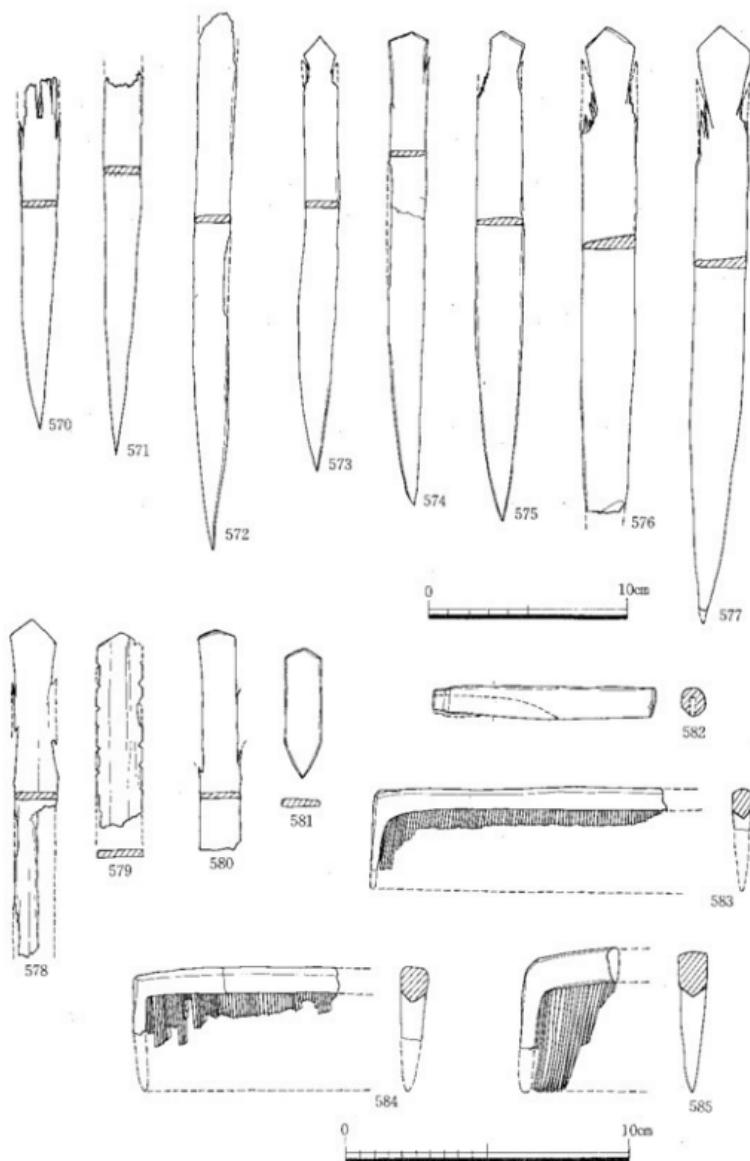


図-63 木製品①

④食膳具

曲物容器は、全て円形の底板㊀～㊂で、檜の板目板を円形に両面とも削り整形している。底板の復元径は、13～16cmとなり小形品である。底板を固定する樹皮を通す穴を持つもの㊃がある。また㊄には、製作時に径を示しておく刻線が引かれている。㊅は大形の曲物、又は折教と考えられ、内面に一方向への細刻線が認められる。

杓子状木製品㊆は板目板から作った杓子状木製品ではほぼ完形である。柄部は、割り取ったのち若干の削り整形を加えた荒い作りで断面長方形をなす。身部は、幅広く扁平に削り出す。

⑤建築部材

㊇・㊈は、くさびの部材。長方形の粗い割面をとどめる材の一端を両面から削って斧頭状に加工するもの㊉。さらに打面部分に4方より削り込みを入れ、先端を尖らしたものがある。材質は、共に檜材。刃にあたる部分や頭頂部分に顕著な使用痕跡は認められない。㊊は、長さ8.5cm、最大幅3cm、最大厚1cm、㊋は、長さ7cm、最大幅4cm、最大厚2.2cm。㊌は平城宮で類似がある。

部材㊍は、2次焼成を受け角材が断面半円状に焼けているが、ほぞ穴が認められる。ほぞ穴は、1.8×3.8×3.2cmで中にはぞが遺存する。木取りは板目板を用いている。

㊎は、直径4.3cmの半円状のほぞ穴のある扁平な板材である。板目板を用いた木取りで、厚さ1.4cmである。

⑥その他

㊏は、長径10cm、短径4.8cmの檜円形を呈し、両平面の各片面のみ削り、直径0.6cmの穴を両端に1対あける。材質は、檜材。㊐は、残存長17cm、直径2.3cmの丸棒で、表面をかるく削っている。

これらの木製品の時期は、谷2の埋土内のものは共伴土器より8世紀代。井戸1は、若干年代差のある土器が出土しているが、他遺跡との比較から斎串・櫛とともに奈良時代頃と考えられる。

7) 古墳出土遺物(図-65)

古墳から出土した遺物には、土師器の鉢㊑、須恵器の高杯㊒、台付壺㊓・㊔、提瓶㊕・㊖、器台㊗、鉄釘㊘～㊙、刀子㊚がある。土師器の鉢㊑は、口径28cm、器高10.8cmを側る鉢で、底部に焼成前穿孔をおこなう。体部中央には、直径1.8cmの円孔が1カ所あり、それに付属して一条の凸帯をめぐらした痕跡が認められる。外面は、縦ハケをおこない口縁部のみをナデ消す。内面下半部は、横方向に板ナデ、上半部は横ナデ。色調は橙色、焼成は良好。胎土には、0.1cm以内の石英・長石を少量含む。須恵器の高杯㊒は、杯部で体部に稜をなし底部となる。口縁部は、かるく外反する。㊓・㊔は、共に台付壺の脚部で壺部に明瞭な境を持つもの㊕、もたないもの㊖がある。筒部外面には、逆時計回りのかき目を施した後に4方に長方形のスカシを穿

2. 遺物

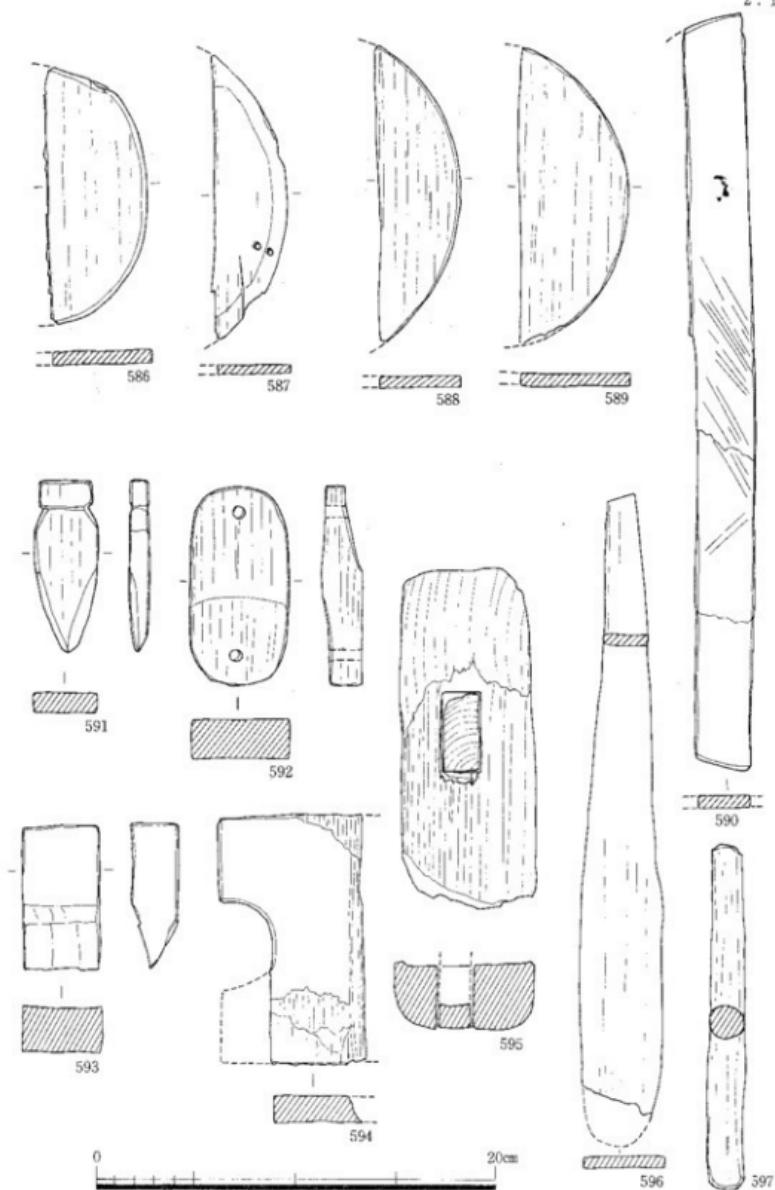


図-64 木製品②

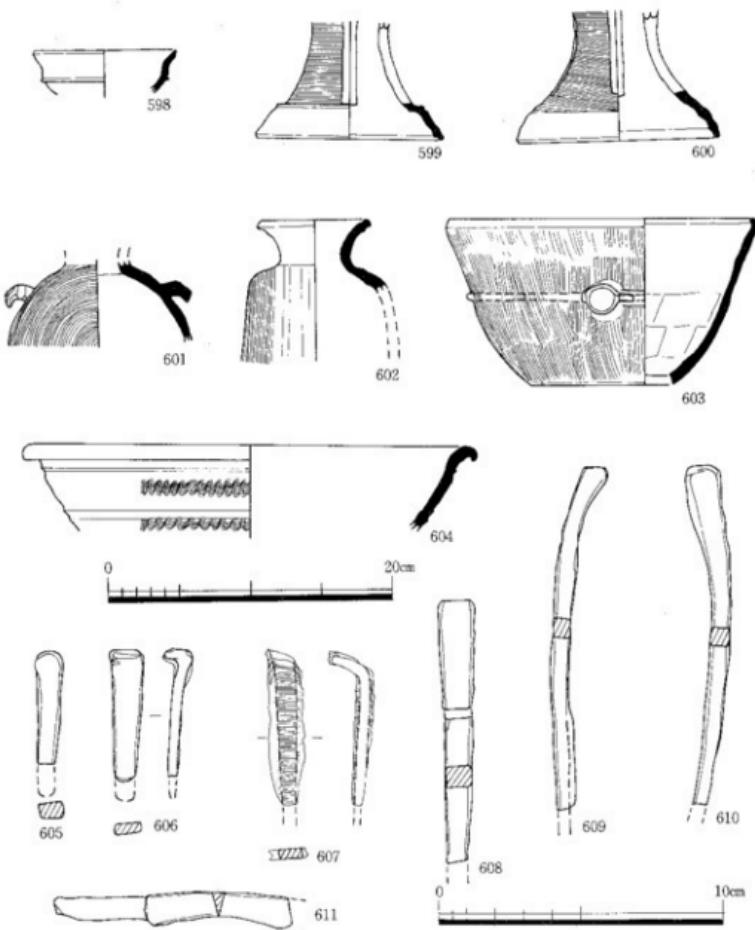


図-65 古墳出土遺物

つ。内面はナデ調整。色調は灰褐色、焼成は良好。胎土には、0.1 cm以内の石英・長石を含む。
 ⑩・⑪は、提瓶で体部にかき目を施す。⑫は、体部上半に1対の貼付けの把手を持つ。⑬は、
 体部より大きく外反した口縁部を有し、端部を面とする。⑭・⑮共に色調は灰白色、焼成は良
 好。胎土には、0.2 cm以内の石英・長石を少量含む。⑯は、器台の体部で口縁端部を外方へ折
 り曲げ丸くおさめる。体部は、ゆるい稜線に区画された内に上下に波状紋を施す。内面はナデ
 調整、色調は青灰色。焼成は良好。胎土にはほとんど砂粒含まず。

鉄釘は、断面形が長方形で扁平な面を頭部で曲げるものの⑩～⑫、断面形が方形を呈し、細長いもの⑬～⑯の2種類が認められる。全て鐵造品である。特に⑬は、木質が遺存しており木棺の留釘に使用されていたことが明らかである。刀子⑭は、残存長8.4cmで柄部3.4cmに木質が遺存している。刃部は、中央が彎曲しており、使用痕と考えられる。鐵造品である。

古墳の時期は、須恵器がTK43型式に類似することから6世紀末頃と考えられる。

8) 移動式窓 (図-66)

⑰～⑲の資料はともに2次調査区整地層内に混入していたもので、移動式窓の釜口の部分にあたる。これらの資料の共通する特徴として、釜口端部外傾面に同心円紋圧痕が認められる。この圧痕が、土師器につけられるのは非常に希なことであり、今後の資料の増加によってさらに検討を深める必要のあるものである。それぞれ外面はハケ目、内面はナデ調整、内面には多量の煤の付着が認められる。胎土には、個体差はあるが、長石・雲母・角閃石等を多く含み、色調は暗茶褐色を呈する。移動式窓は、完形となるような好資料が少ないので、その実態が明らかでない部分が多いが、今後、わずかな破片でも、このような特徴のある紋様を手掛かりにその生産や、消費活動の一端を窺い知ることができるであろう。

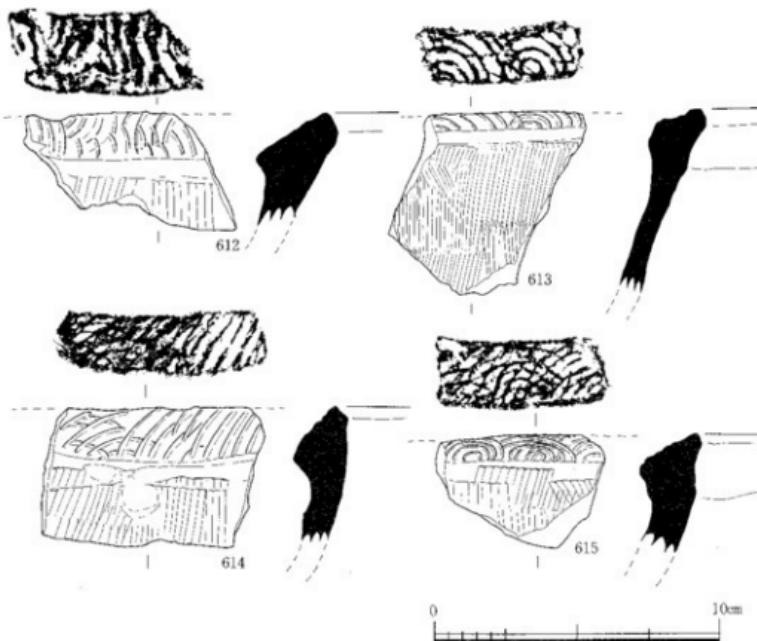


図-66 移動式窓

第V章　ま　と　め

1. 調査地及び周辺の考古学的成果

当調査地は、生駒山地の最南端の丘陵に立地しており、南は高井田川をはさみ高井田横穴群と境をわけている。西には一つ谷をはさみ、尾根上に鳥坂寺の主要伽藍である塔・金堂・講堂跡が遺存している。調査地周辺では、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡は明らかにされていないが、わずかに遺物の散布が認められる。古墳時代前期には、鳥坂宮古墳や鳥坂古墳、鳥坂北古墳が築かれている。当古墳群は、玉手山・松岳山の両古墳群とともに、古墳時代の社会をさぐる重要な手掛かりとなるものであるが、鳥坂宮古墳は、鳥坂寺塔建立のために、他の古墳は、鉄道工事や宅地開発によって破壊されてしまっている。古墳時代中期には、前方後方墳等を含む安堂山古墳群が形成され、後期にいたって、平尾山山中に約2000基を数える大群集墳が形成される。この群集墳の構造は、花崗岩を積みあげた横穴式石室が主流をしめるが、中には、横口式石槨の形態をとるものや、切石積みで床面に凝灰岩を敷いたもの、また、1人しか葬ることのできない小石室や、粘土室木炭槨を有するもの等も確認されており、時期は、6世紀の中頃から7世紀の末まで盛衰はあるものの連続として古墳が造られている。また、高井田川の南側には、凝灰岩質の地盤を掘り込んで造られる高井田横穴群が形成される。全国各地で、このような群集墳が急激に増加はじめる6世紀末には、大和では、大陸からの仏教を取り入れ、日本で初めての寺院である飛鳥寺の建立がおこなわれ、これ以後、仏教の普及とともに各地に寺院が次々とつくられるようになる。鳥坂寺もこれら古代寺院のうちの一つである。

鳥坂寺は、昭和36・37年の発掘調査によって塔・金堂・講堂の規模が明らかになっており、その伽藍配置は、地形に大きく制約を受けて塔の位置がかなり西にずれているが、基本的には、各堂塔が、南北に並ぶ四天王寺式伽藍である。しかし、回廊や門、僧房、食堂等に関しては検出しえなかった。建立年代は、出土瓦の検討、特に「玉作^レ飛鳥評」とヘラ書きされた瓦から7世紀後半に求められている。また、塔が金堂・講堂に先立って建られたと考えられている。廃絶の時期は文献の上から11世紀頃と考えられている。名称については、郷名から鳥坂寺、地名から高井(田)寺、法名で普光寺と呼ばれていたと推定されている。このうち、今回の調査で、9世紀末には「鳥坂寺」と呼ばれていたことが確実となった。現在でも小字名として「²¹鳥坂」、「宮地」、「堂の間」、「クロウ」、「門口」、「矢倉」、「普光寺」等、寺院の堂塔を示唆するものが多くみられる。特に今回調査地北方の丘陵南斜面「普光寺」と呼ばれる地には昭和60年度の発掘調査により7世紀から8世紀にかけての掘立柱建物が多数検出されておりこの地に、鳥坂寺を中心とした大集落が盛まっていたことが判明している。また、これ以外に中世の遺物も多數散布している。

1. 調査地及び周辺の考古学的成果

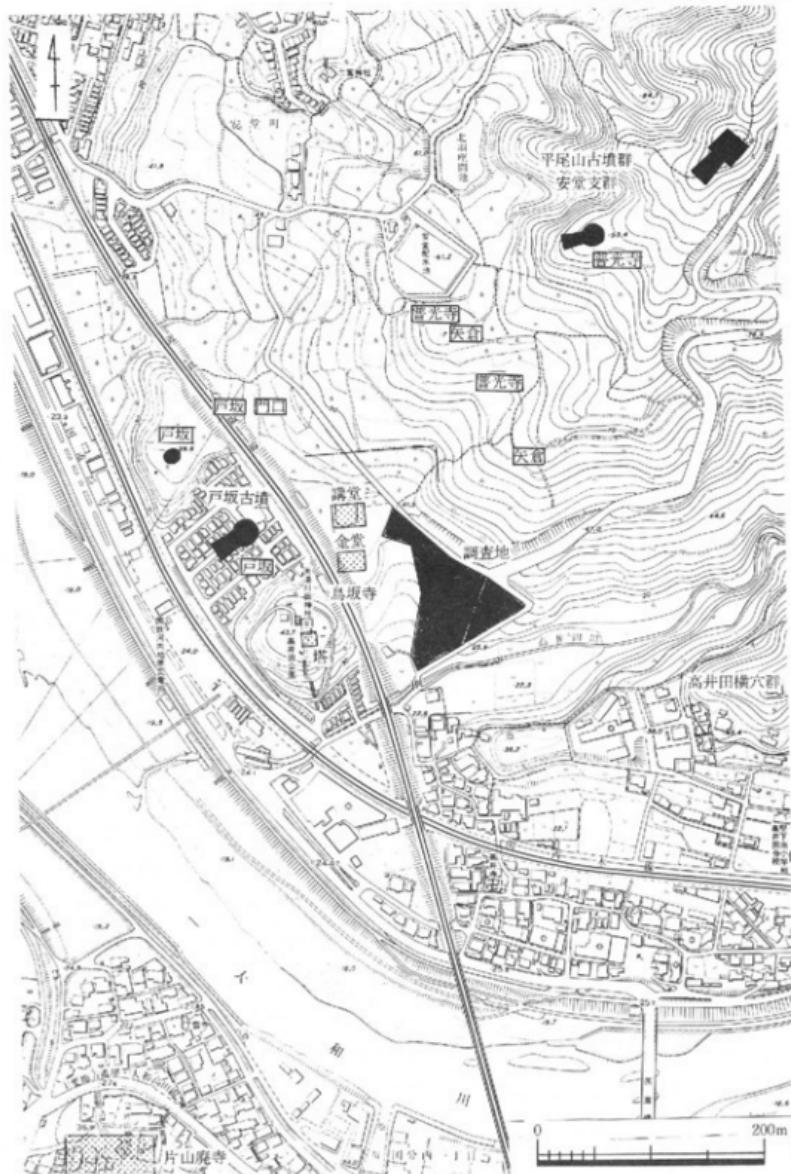


図-67 鳥坂寺位置図

2. 発掘調査成果のまとめ

今回の調査地は、鳥坂寺の主要伽藍である塔・金堂・講堂が立ち並ぶ尾根筋と谷一つへだてて東の尾根上に位置し、北東と南西は農道によって限られている。現在の地形図では、東西に約300mのびる南向きのゆるやかな斜面地の西端部として表現される。調査の結果、旧地表面は水田による削平を受けているものの、6世紀末から8世紀代を中心とする多量の遺物と、掘立柱建物や井戸、木炭窯、溝等の遺構を検出し得た。各遺構の概略は、先に述べたのでここでは、遺構の変遷、性格及び鳥坂寺との関係等を検討する。

まず遺構の変遷を追うと、次のようになる。6世紀末以前には、当地には1次調査区と2次調査区を東西にわける形で南北にのびる谷が存在していた、また1次調査区尾根上には、5世紀中頃と6世紀末に古墳が築かれている。この時期をⅠ期とする。先に述べた谷は、6世紀末から7世紀中頃にかけて意図的に埋められている。この埋土中には、多数の土器類とともに、牛・馬の骨、木片等も混在している。また炭層の重なりも見られた。この谷を埋めるのと同時に、当地では、大規模な造成がおこなわれ、W区に存在した古墳をも破壊し、斜面を削り込んで平坦面を作り出している。この造成によってW区に三段、E区に二段の平坦面ができる。またE区下段には、建物-8・9・10、木炭窯-2・3等が、造成後に営まれる。この時期をⅡ期とする。7世紀末になると、W区中段に建物-1・2が建てられるとともに、E区に存在していた平坦面が版築状の整地によって埋め立てられる。この整地は厚さ5cm前後の粘質土層が幾重にも重なっており、同様の技法は、昭和60年度の調査で明らかになった調査区北東約150mに位置する切石積の横穴式石室を有する古墳の埴丘構築の際にも使用されている。残念ながらこの整地層上面は、後世の水田により削平を受けているため上部にどのような遺構が存在していたのか明らかにすることができなかった。この整地と同時期があるいは、少しおくれて旧谷筋に重複するかたちで、多数の石が集石され、南北にのびる。この集石は、E区下段にも方形形状に広がっている。集石の性格については、今後の検討が必要であるが、この地点が、金堂中心から東へほぼ1町(108m)の位置にあたることは重要である。この時期をⅢ期とする。8世紀中頃には、建物-2は廃絶し、建物-5・4が短期間のうちに建てかえられる。建物-3・11等の倉庫もこの時期のものである。この時期をⅣ期とする。8世紀末には、建物が建てられていた平坦面は放棄され上段から多量の土器が廃棄される場所となる。建物-1もおそらく建物-2と同様な時期に廃絶したものと考えられる。9世紀、10世紀の遺構は、8世紀から続く井戸-1だけであるが、この井戸内からは、9~10世紀初頭の一括土器の他、斎弔や櫛等も出土している。特に重要なのは、「鳥坂寺」と墨書きされた土器の存在である。この土器の型式から10世紀に当地が「鳥坂寺」と何らかの関係にあったことがわかる。また、「寺」や「三昧」等の寺院を示す墨書き土器も多数出土していることから考えると、当地が寺域内に含まれていたと考えることができる。同じような例として、本市大県遺跡でも「大里寺」と墨書きされた

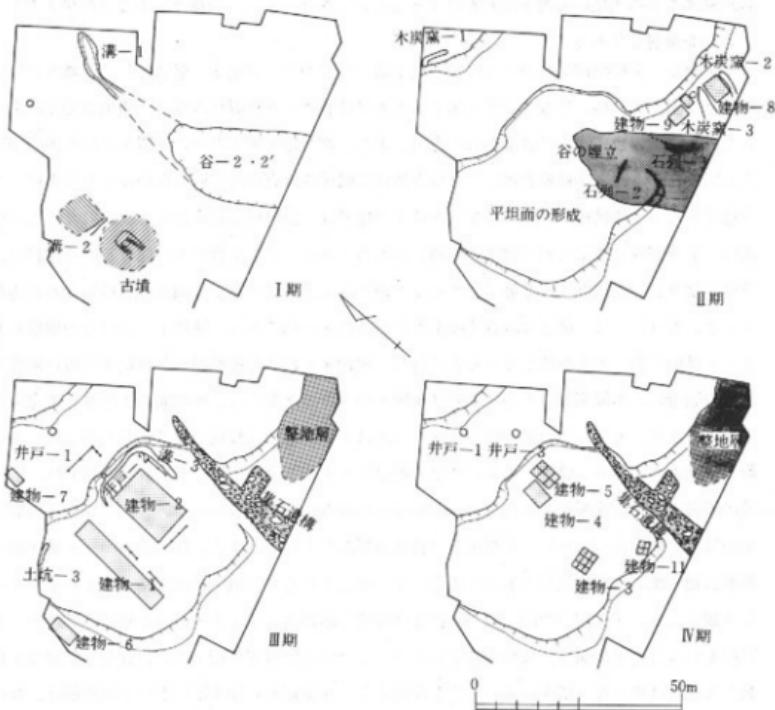


図-68 遺構変遷図

土器が井戸内から検出されている。これら墨書き土器の発見により、今まで文献あるいは、小字名等からしか推定し得なかった河内六寺の位置が明らかになってきた。今回の調査では、墨書き土器の他に、陶碗等も出土しており当時の文字を書くという行為が、その書体だけからでは無く、道具からも、かなり普及していたことが窺える。◎は、E地区整地層内から出土したもので、7世紀末以前に位置づけられるものである。墨書き土器の大半のものが、8世紀代のものであるが、この陶碗は、7世紀末に、すでに書をたしなむ人物が存在していたことを窺わせる資料である。以上、発掘調査の成果から、5世紀から10

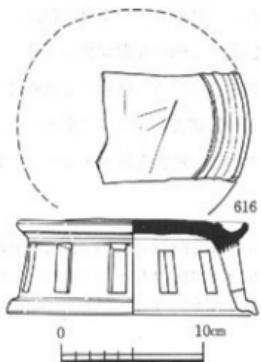


図-69 陶碗

世紀初頭までの当地の変遷を明らかにすることができた。次に、当地がいかなる性格を有していたかを検討してみる。

4世紀から7世紀初頭にかけては、古墳が造られており、当地が、墓域として認識されていたことが窺える。特に鳥坂寺の塔を建てるために破壊された鳥坂宮古墳や、当調査地で検出された、建物1建設のために破壊された古墳、また、調査地北東150mに位置する切石積の横穴式石室を有する古墳の被葬者達は、鳥坂寺造営に間接的・直接的に何らかのかかわりを持った人達であろう。7世紀中頃から後半にかけて当地では、大規模な造成がおこなわれる。この造成は、7世紀末に建てられる建物を意識したものである。この7世紀末に建てられる建物は、その立地及び存続状況から2群にわけることができる。一つは第1次調査面で検出された建物1・2、もう一つは、第2次調査で検出された建物8~10である。建物1・2はその規模も大きく8世紀に到っても存続しているのに対し、建物8~10は存続期間が7世紀末の短い期間で建物の周辺に、木炭窯等をそなえており規模も小さいこと等から、短期間の工房跡と推定することができる。また、この建物群の存在する面は7世紀末には整地がおこなわれ約2mに及ぶ版築が施されている。建物1・2の性格を推定する手掛りとしては、その規模及び形状、「寺」等の墨書き土器の存在等を考え合わせるならば、鳥坂寺に関連するものであり、しかもその形は他の寺院で明らかにされている僧房及び食堂と類似している。また、杯・皿・高杯・甕・鍋・移動式竈・甕等日常炊飯具が多量に出土していることからも当地で日常生活が営まれていたことが窺える。8世紀の中頃には、建物2は廃絶し建物3・4・5・11等が建てられるが、8世紀末にはこの平坦面は、放棄されてしまう。このことから8世紀中頃に、食堂・僧房等が移動しなければならない情況にあったことが窺える。9世紀から10世紀にかけての遺構は、井戸1だけであり、それに伴う建物跡が検出されておらず不明な点が多いが、井戸内からは、9世紀初頭の一括土器や斎串等が多数出土しており、当時の井戸をめぐる祭祀のあり方が窺える。また、「鳥坂寺」の墨書き土器は、当地が鳥坂寺と関係する地であることを裏付ける資料である。

以上、今回の発掘調査により、6世紀末まで墓域であった当地が、7世紀以後に大規模な造成を受け鳥坂寺に関連する諸施設が建てられていた地であることが判明した。またそれと同時に、発掘調査に伴なって出土した、7世紀代~8世紀代の遺物は、コンテナ300箱分にも達し、この時代の遺物を研究するうえで非常に有力な資料となるものである。

註1) 大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』1968年

註2) 柏原市教育委員会『高井田遺跡』1986年

註3) 柏原市教育委員会『大県・大県南遺跡』1985年

図 版



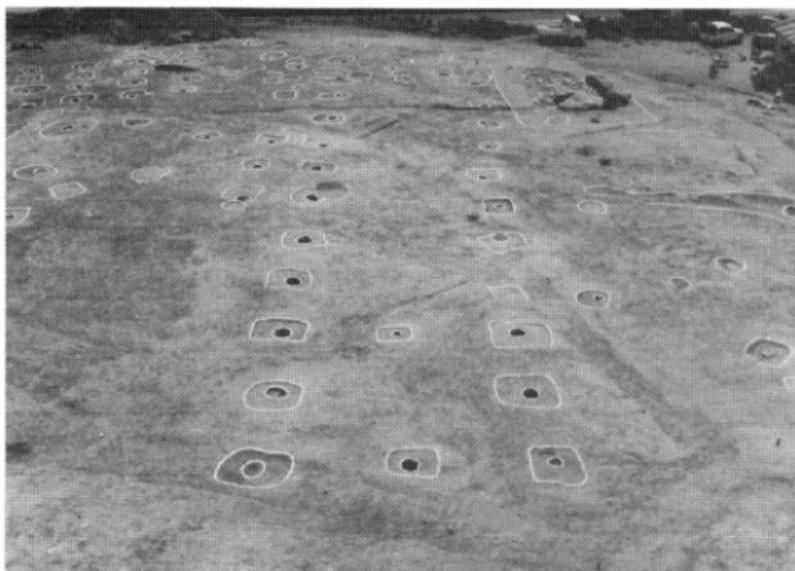
鳥坂寺全景



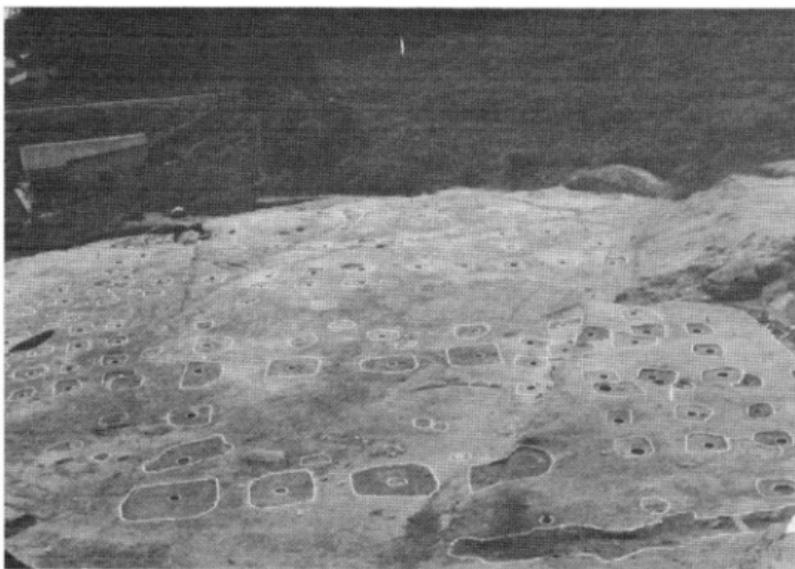
第1次調査区全景



第2次調査区全景



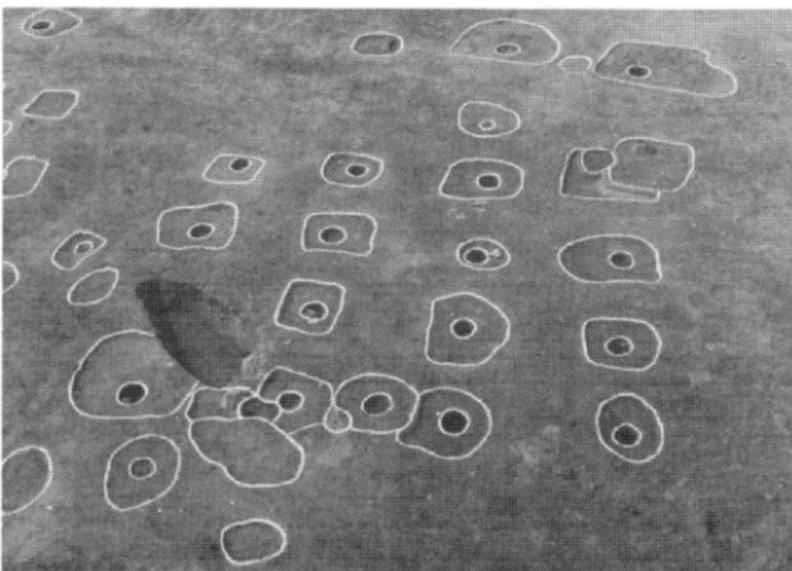
掘立柱建物—1



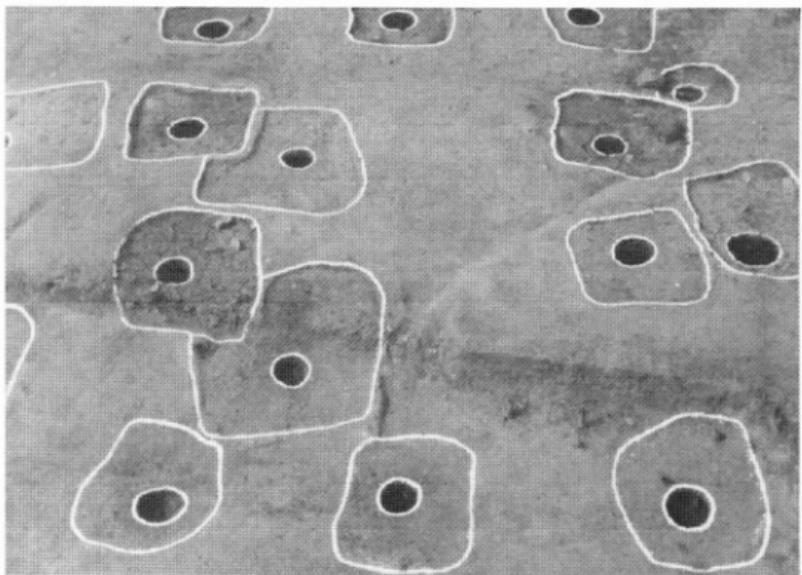
掘立柱建物—2



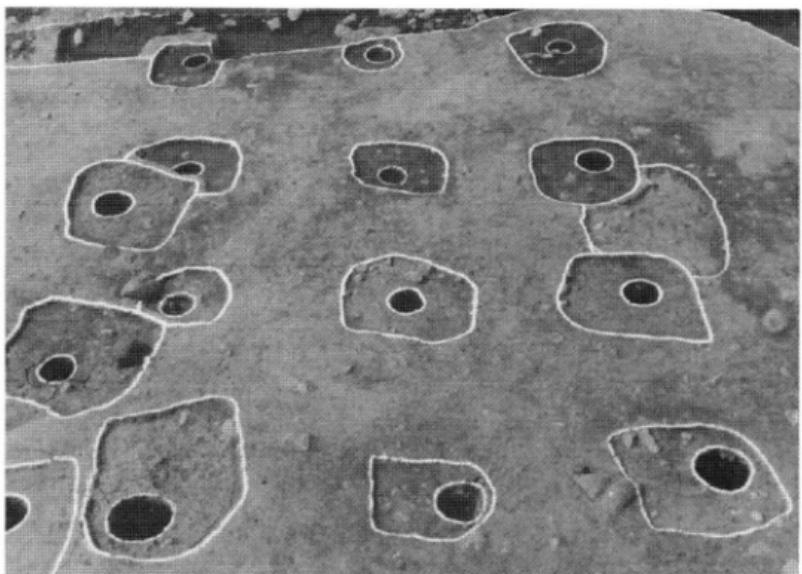
掘立柱建物-2



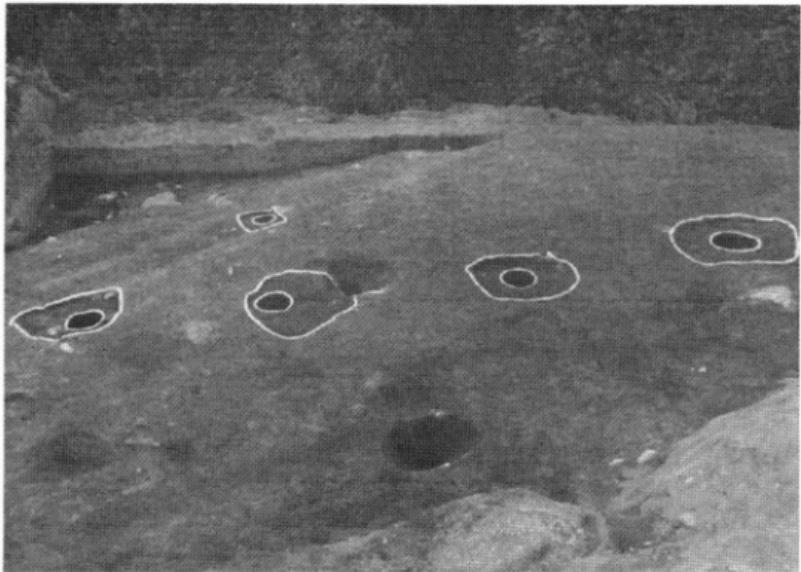
掘立柱建物-3



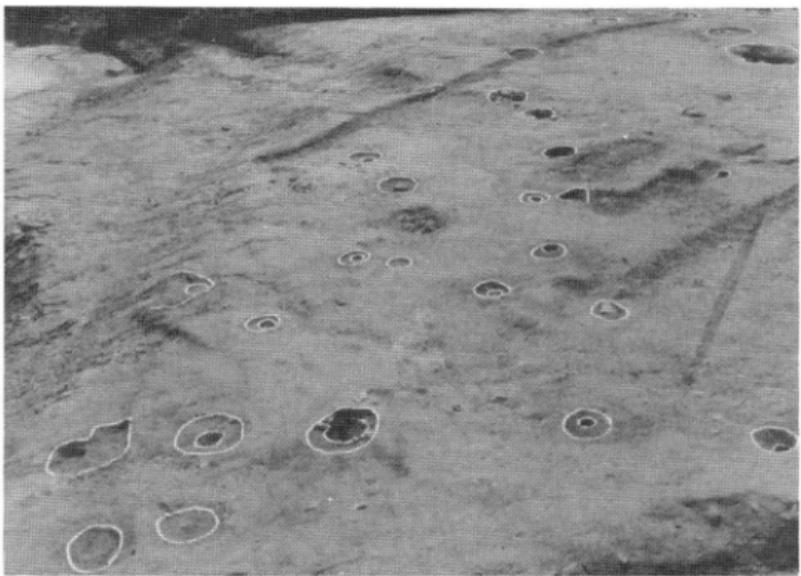
掘立柱建物—4



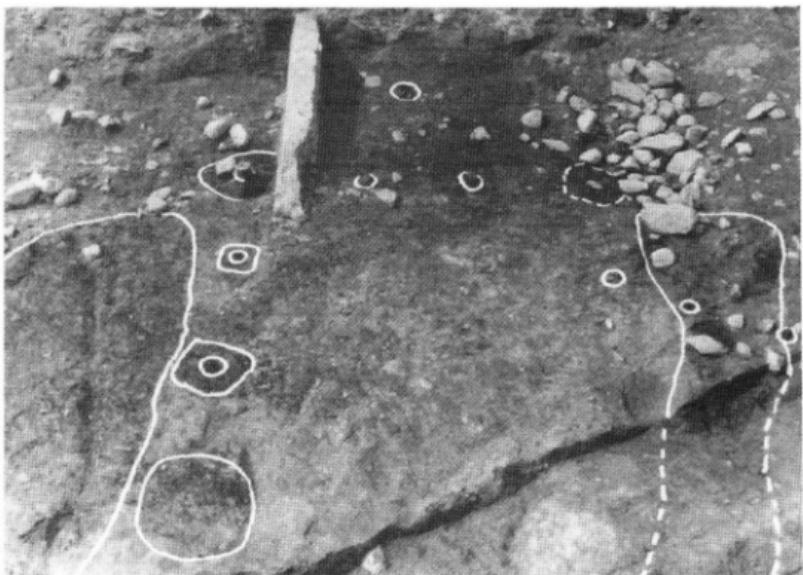
掘立柱建物—5



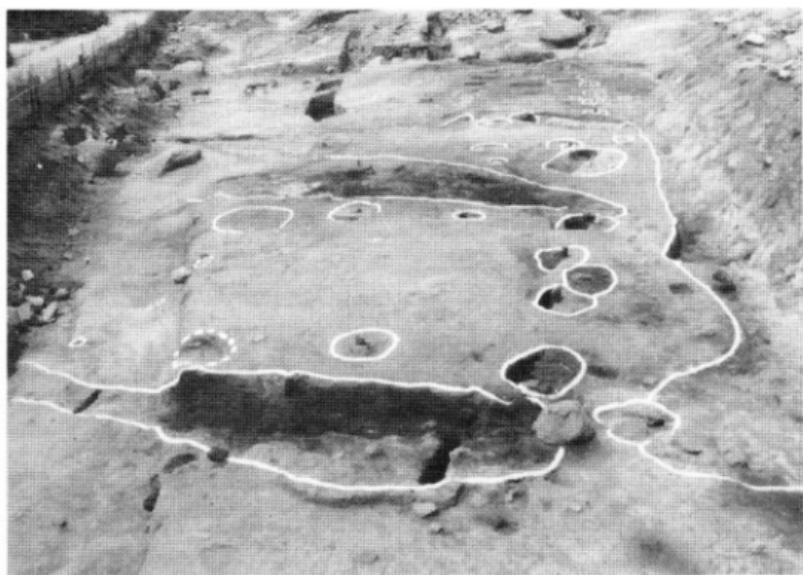
掘立柱建物—6



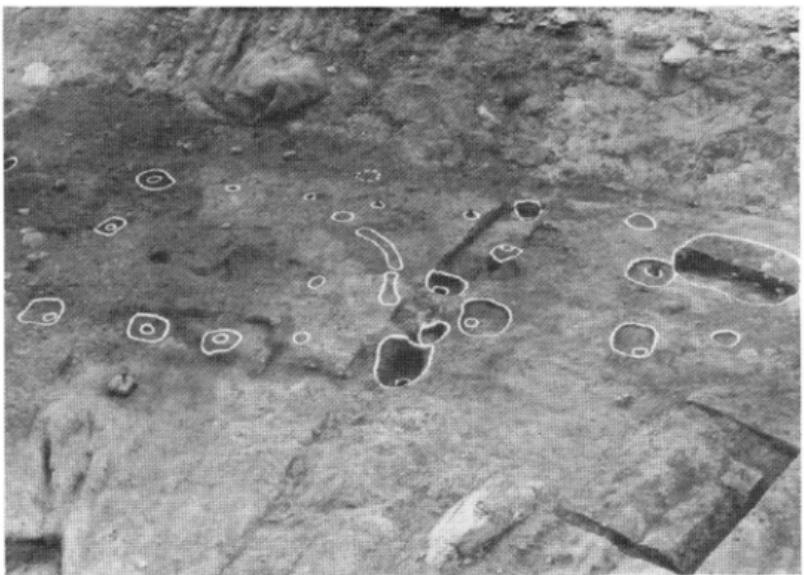
柵列—4



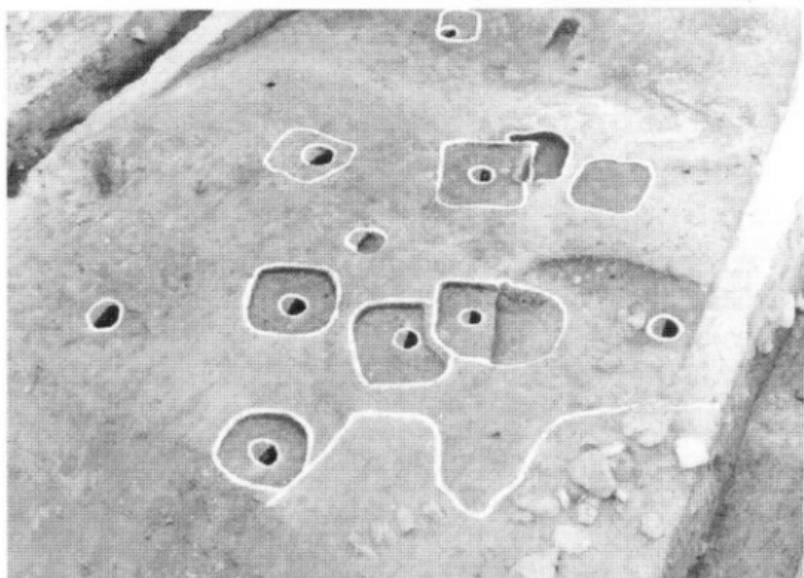
掘立柱建物-8



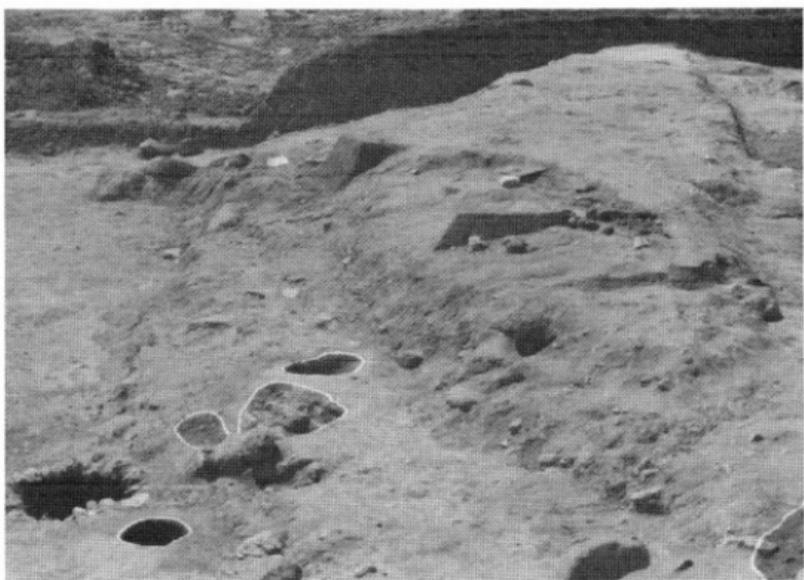
掘立柱建物-8



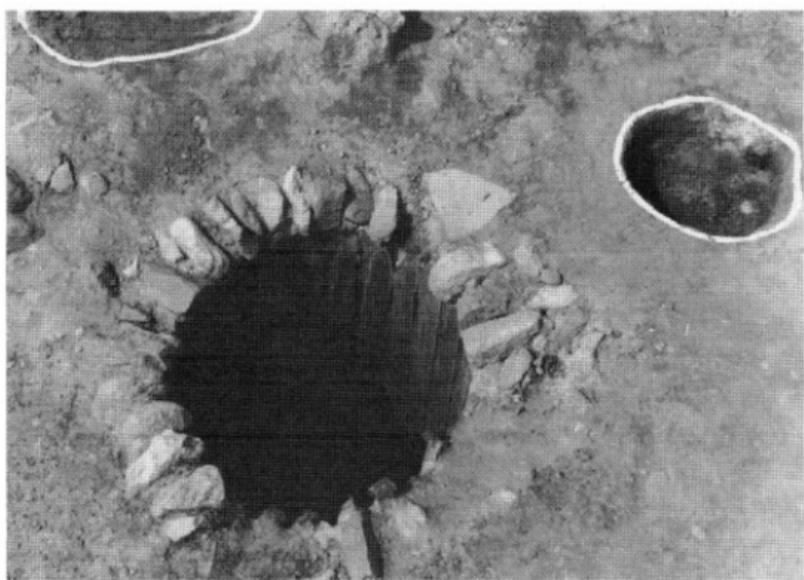
掘立柱建物-9・10



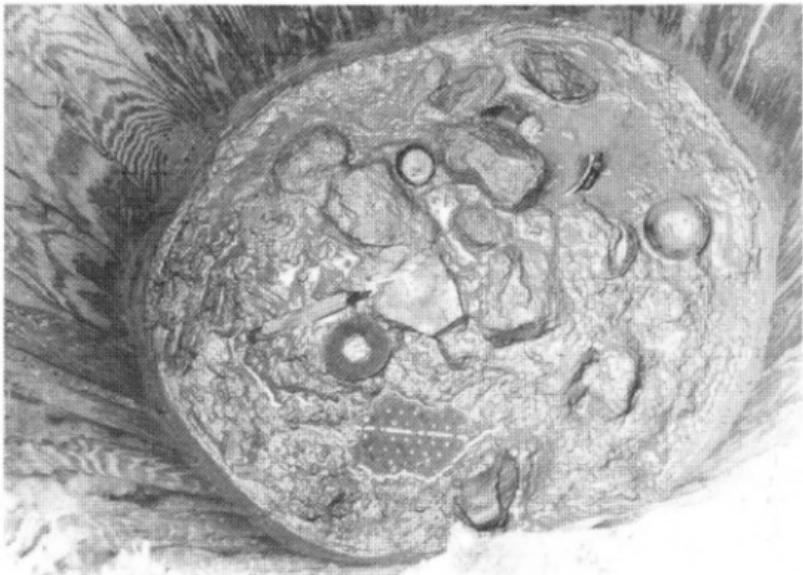
掘立柱建物-11



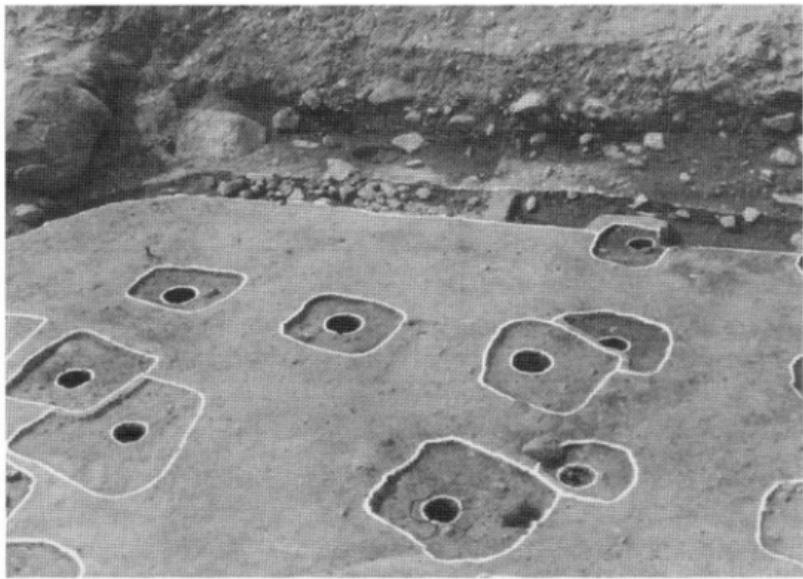
W区上段平坦面



井戸-1



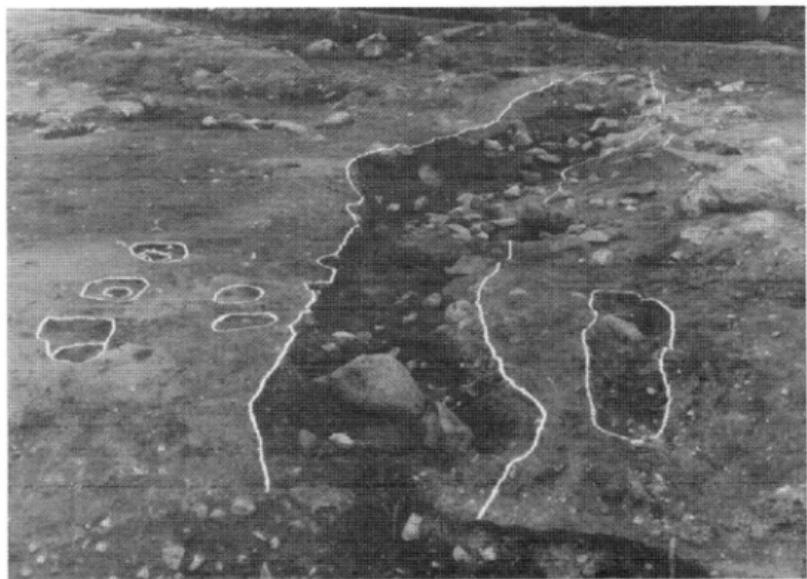
井戸-1(内部)



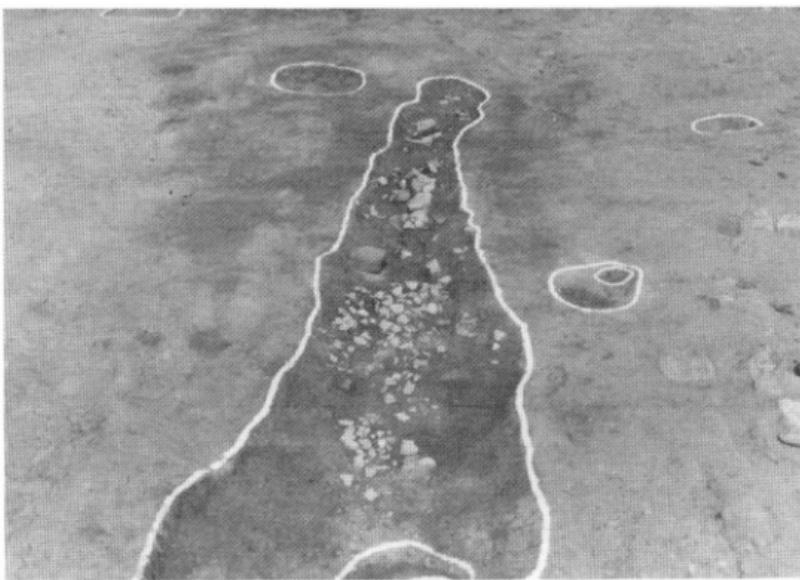
井戸-2



井戸-3



溝-1



溝一 2



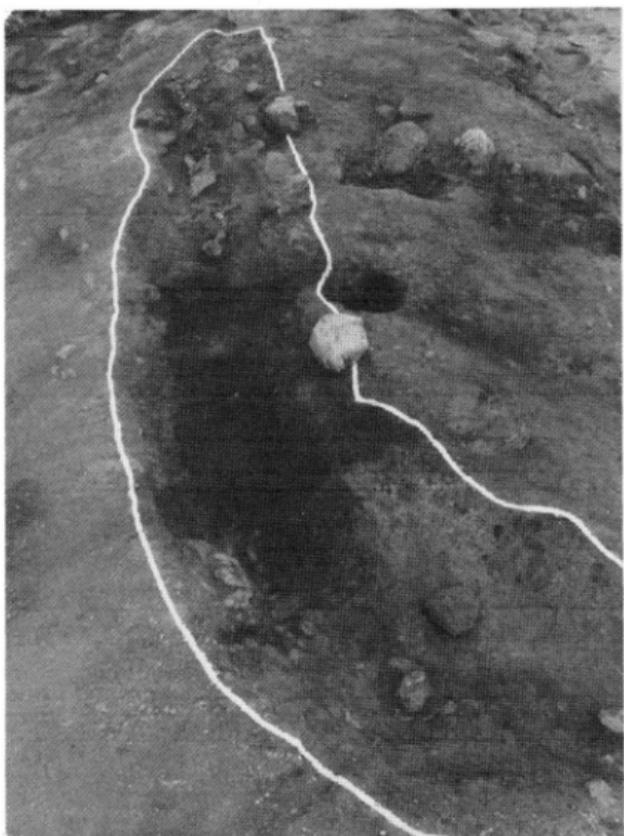
遺物包含層—2 斷面



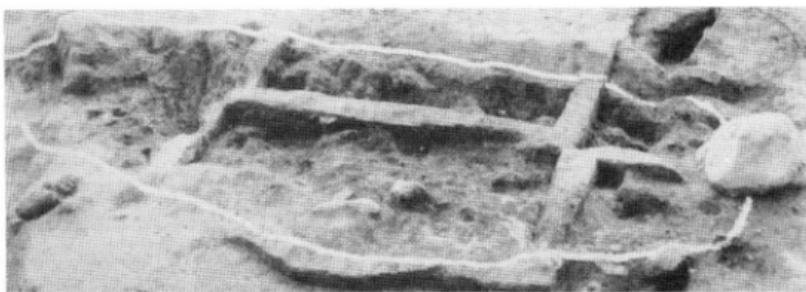
石列一 2



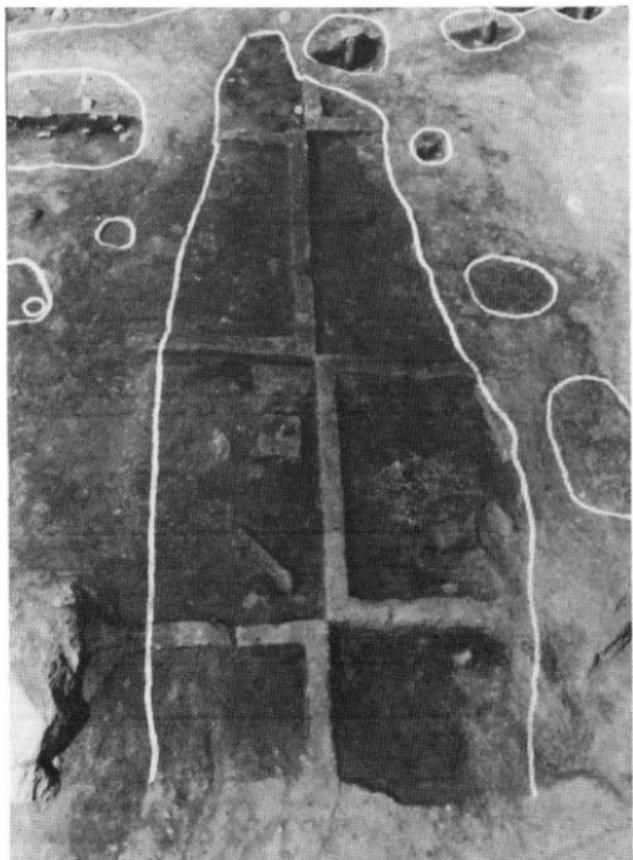
石列一 2



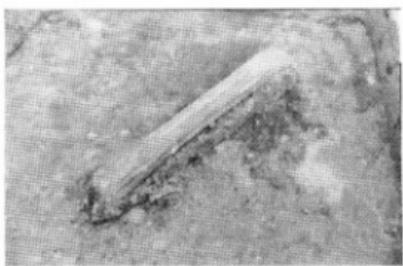
木炭窯-1



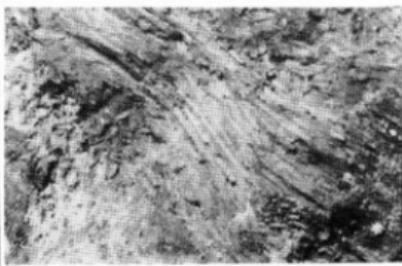
木炭窯-2



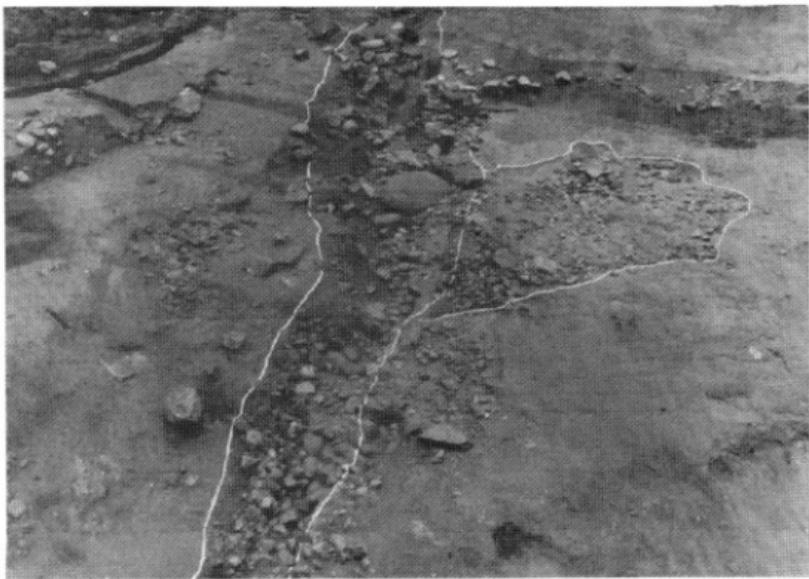
木炭窯—3



建築部材・釘



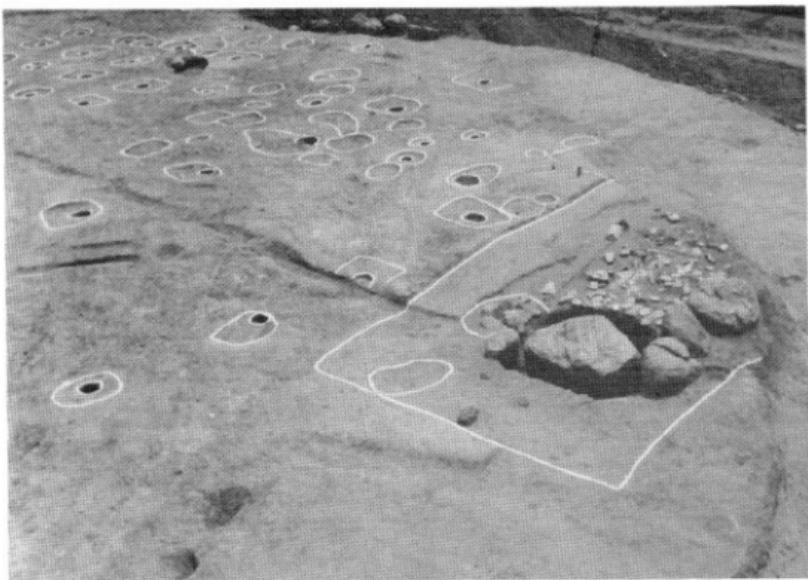
ワラ灰



集石遺構



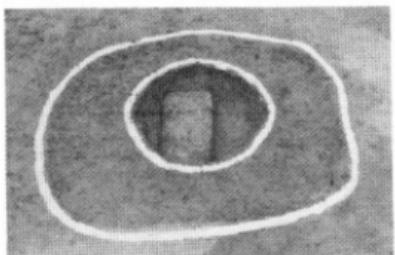
E区整地層断面



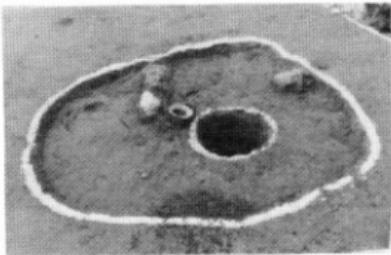
古墳(北より)



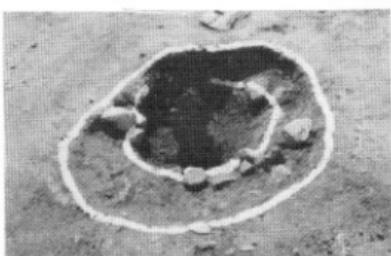
古墳石室内



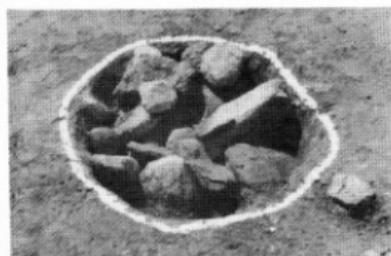
掘立柱建物-1 挖形



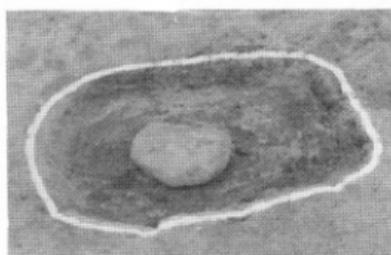
掘立柱建物-5 挖形



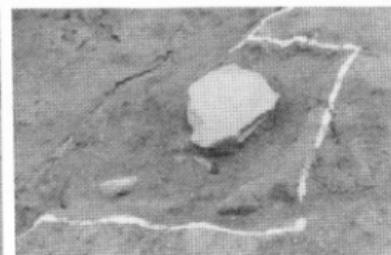
柵列-4 挖形



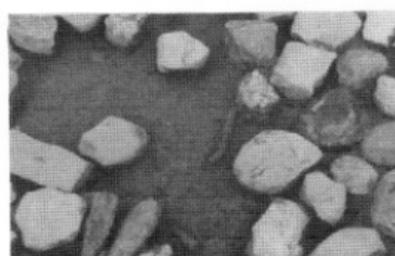
ピット 6



ピット 8



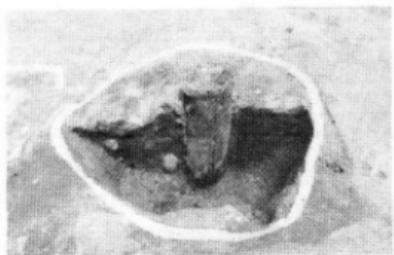
ピット 9



古墳石室内



溝-3



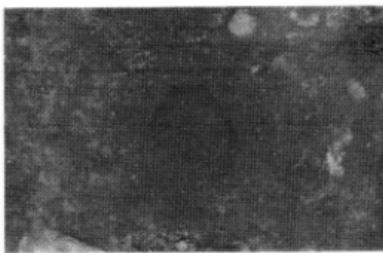
掘立柱建物-8 挖形



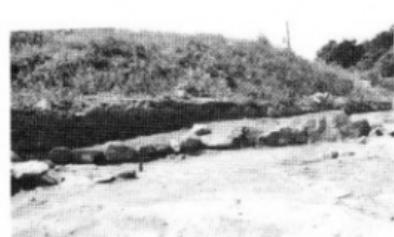
掘立柱建物-8 挖形



掘立柱建物-8 柱



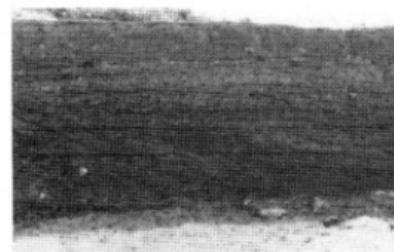
掘立柱建物-8 柱



石列-2



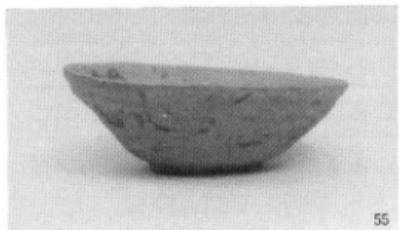
石列-2



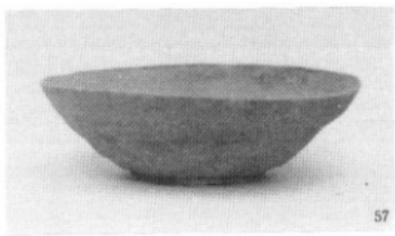
E地区整地層



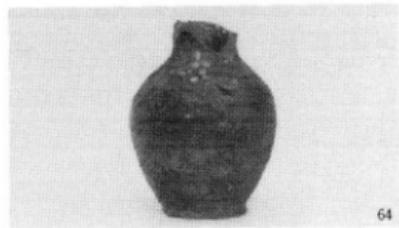
谷-2 内出土牛の角



55



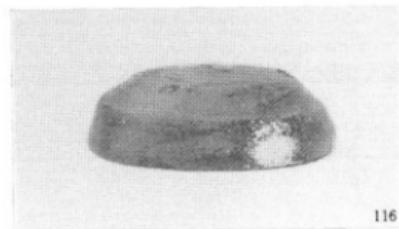
57



64



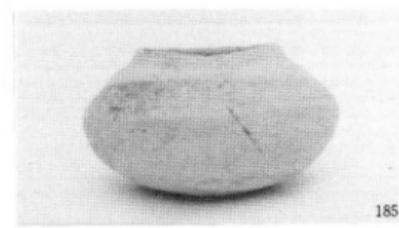
112



116



127



185



232



235



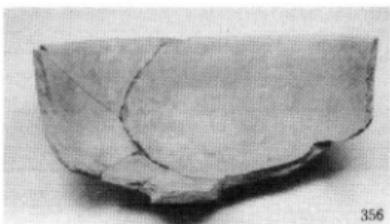
264



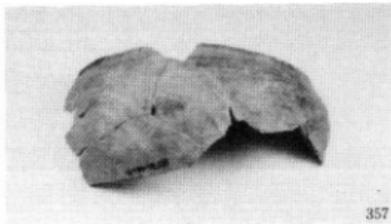
331



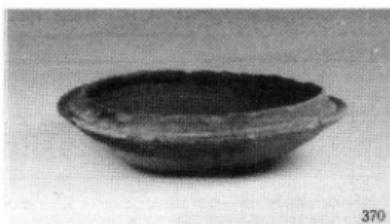
351



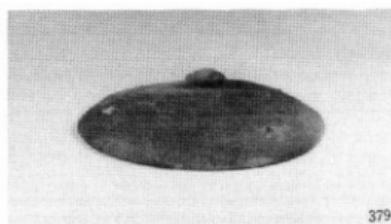
356



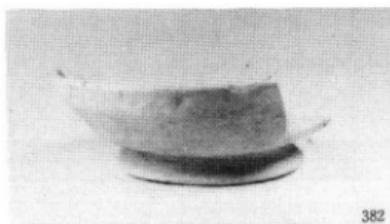
357



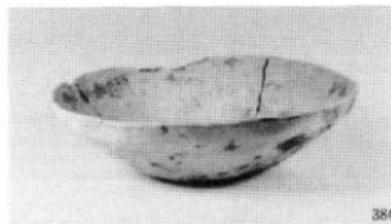
370



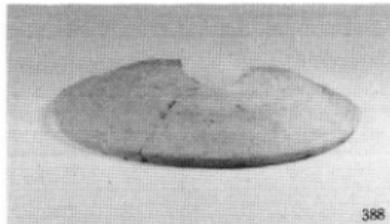
379



382



384



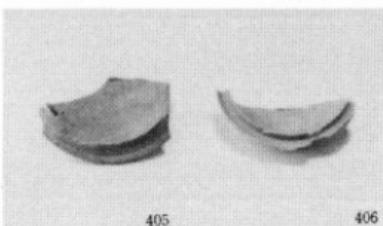
388



390



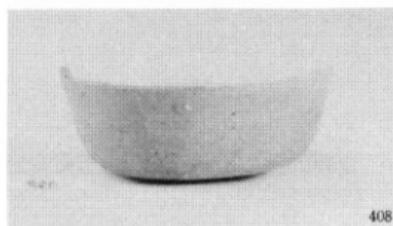
400



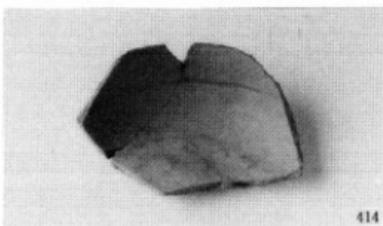
405



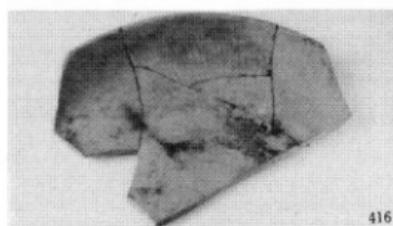
406



408



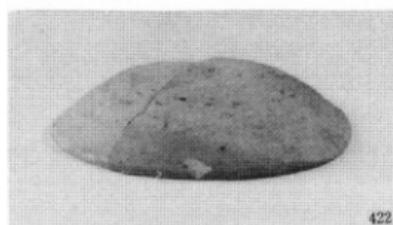
414



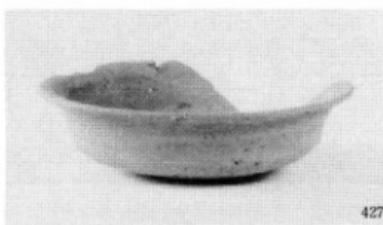
416



418



422



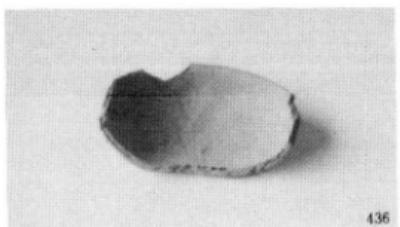
427



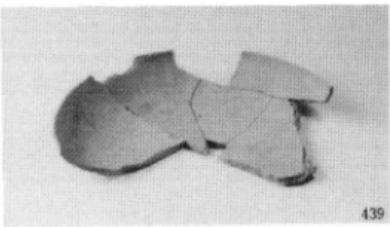
428



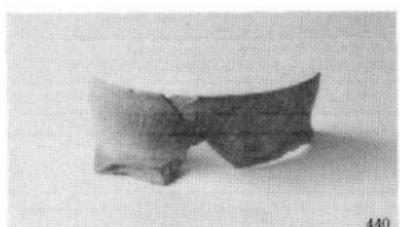
429



436



439



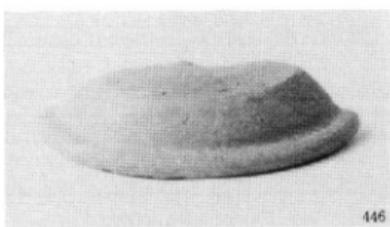
440



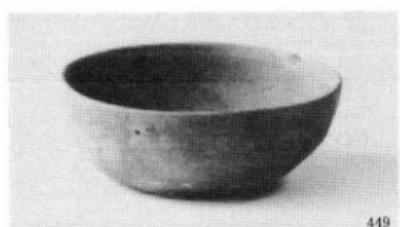
442



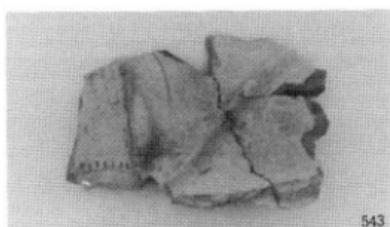
444



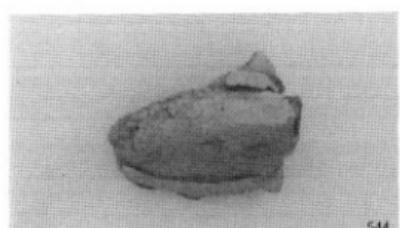
446



449



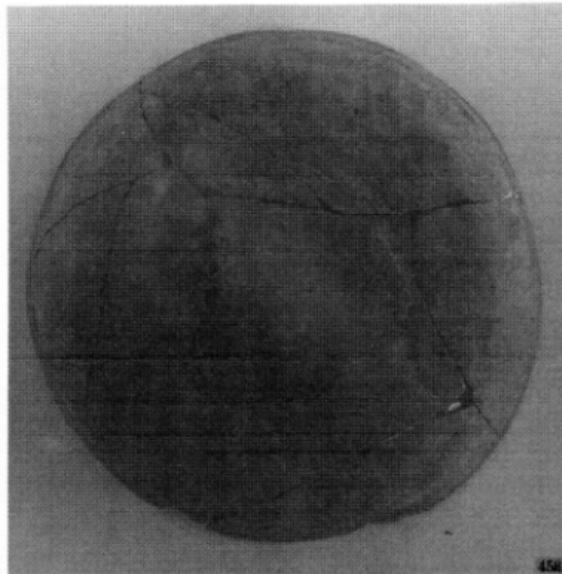
543

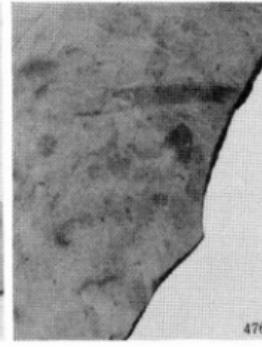
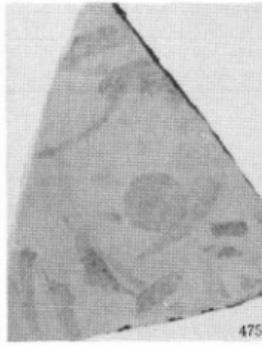
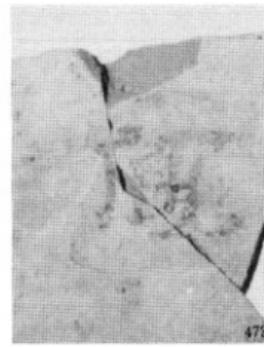
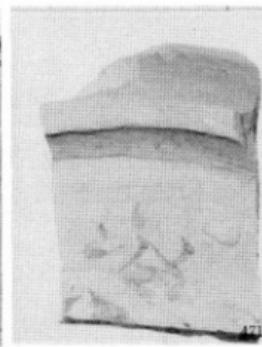
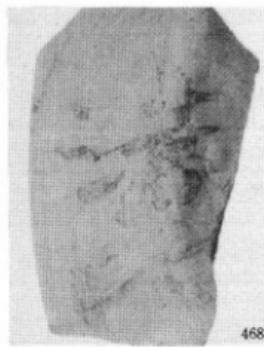
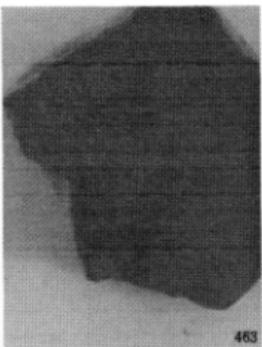
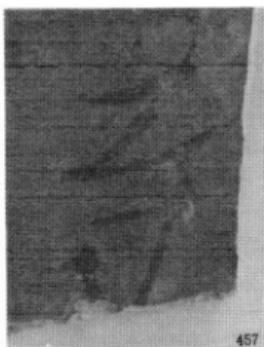


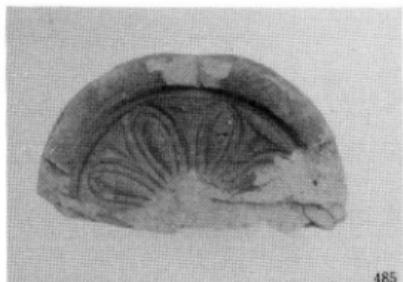
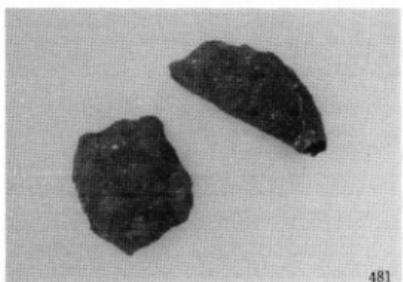
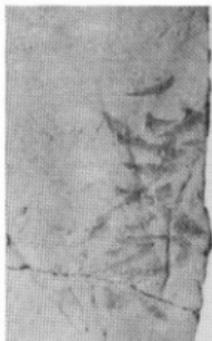
544

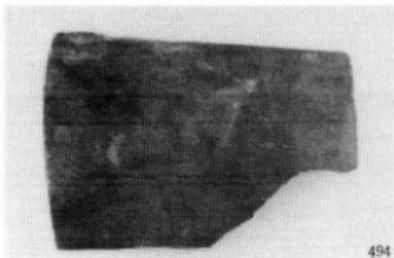


560

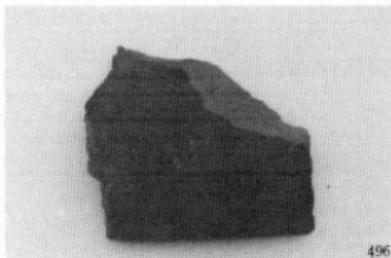




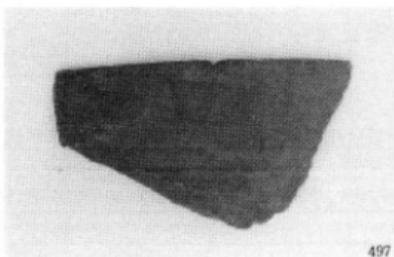




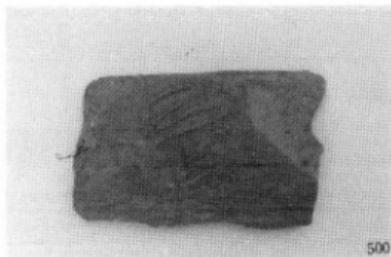
494



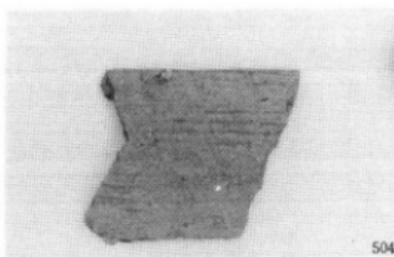
496



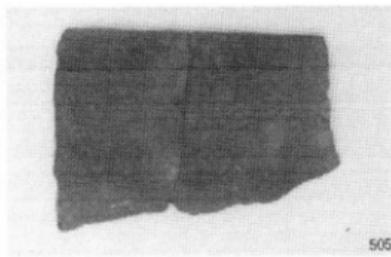
497



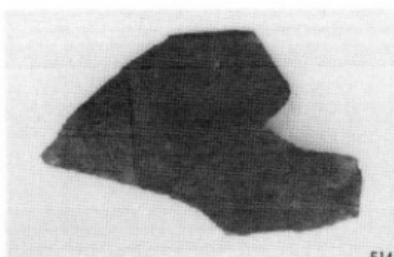
500



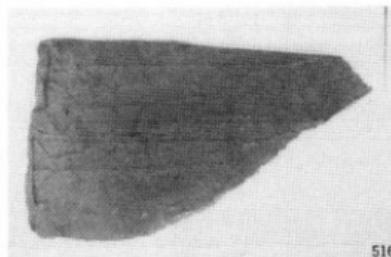
504



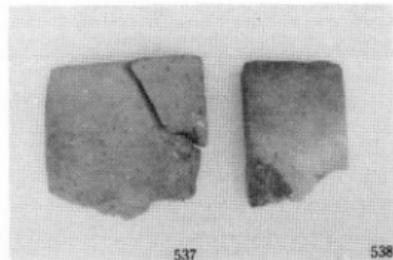
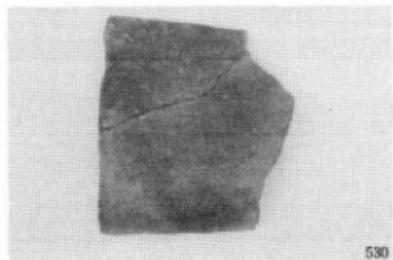
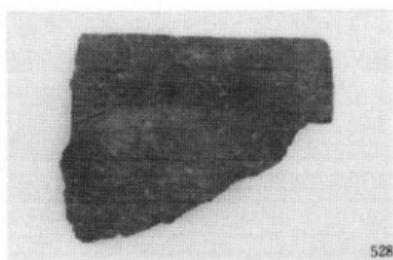
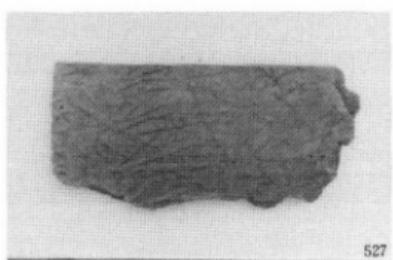
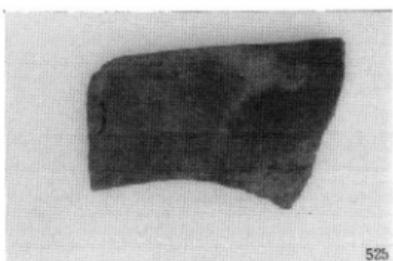
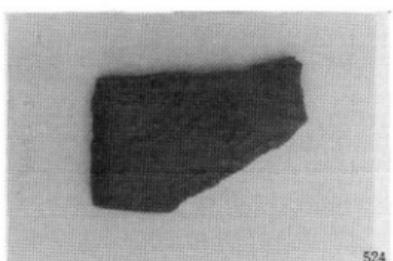
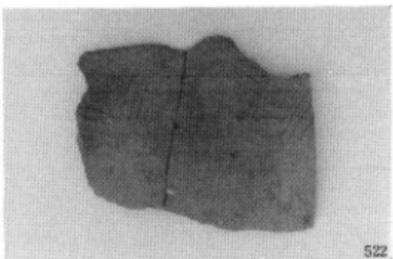
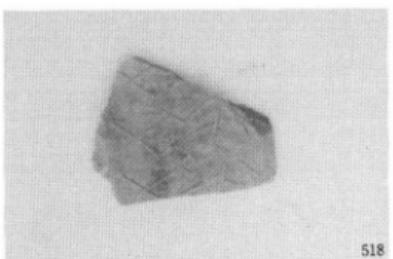
505

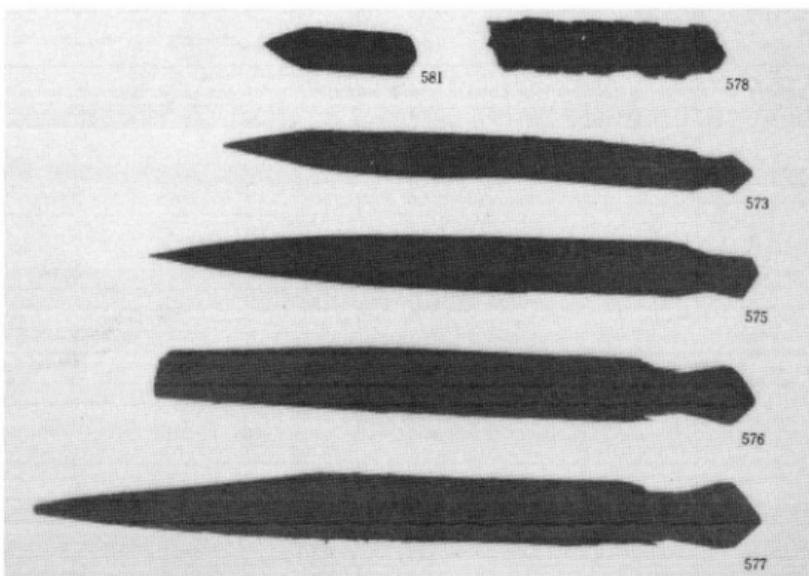
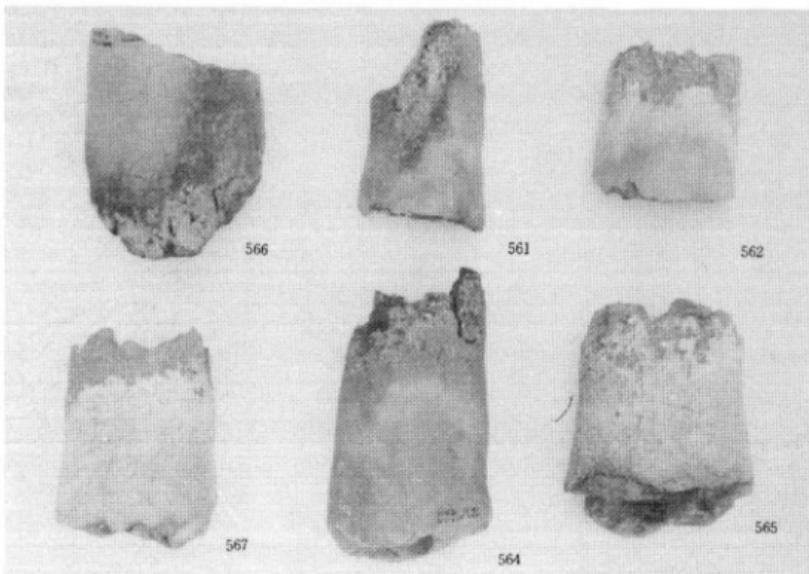


514



516





鳥坂寺

1985年

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和61年3月31日

印 刷 サンケイ総合印刷株式会社

